

ご ばり い せき
後 張 遺 跡 IV
－ D 地 点 の 調 査 －

2 0 1 0

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

ここに報告する後張^{ごはり}遺跡は、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジの周辺に広がる埼玉県屈指の古代集落遺跡であります。後張遺跡の周辺は、古墳時代の開始とともにいち早く開発が進み、近傍の丘陵上には埼玉県内でも最古級の前方後方墳である鷺山^{さぎやま}古墳が築造された土地としても知られております。本遺跡の位置するかつての水田地帯は、現在インターチェンジ周辺区域として開発が進み、本庄市街と児玉市街を結ぶ国道 462 号線にも接しておりますところから、急速に古い景観が失われつつあります。

このたび、この地に生きた先人達の歴史的な営みを伝える埋蔵文化財は、ここに記録として保存し永く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、将来の私たちの文化的な生活を形づくるためのひとつの基礎となりえるものであり、これらを守り、後世に伝えて行くことはもとより、郷土を愛する心を育み、地域の理解のために生かしてゆくことが、今後の文化財保護の課題ではないでしょうか。文化財は、第一に守り伝えていくこと、そして教育現場や生涯学習の場での活用が必要であるといっていよいでしょう。

この発掘調査報告書が刊行できたことは、秀和観光開発株式会社をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。報告書の刊行は埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成 22 年 8 月 31 日

本庄市遺跡調査会
会 長 茂木孝彦

例 言

- ・本書は、埼玉県本庄市児玉町高関字地藏堂 205 番地－ 4、同 206 番地－ 1 に所在する後張遺跡（D 地点）の発掘調査報告書である。
- ・後張遺跡では、関越自動車道建設に先立ち発掘調査が行われた A・B 地点の成果が、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって『後張遺跡Ⅰ』・『後張遺跡Ⅱ』として、民間開発に伴い記録保存を目的として発掘調査が行なわれた C 地点の成果が、児玉町遺跡調査会によって『後張遺跡Ⅲ』として既に刊行されている。そのため、本書は後張遺跡の 4 冊目の報告書となることから、『後張遺跡Ⅳ』とした。
- ・発掘調査地点は、既に発掘調査が行われた地点が A～C 地点となっていることから、それに倣って D 地点と呼称した。D 地点の発掘調査面積は、約 1,000 m²である。
- ・発掘調査は、ホテル建設に伴い記録保存を目的として、平成元年度に児玉町教育委員会の指導に基づいて児玉町遺跡調査会が委託を受けて実施したものであり、発掘調査および報告書の刊行に要した経費は、秀和観光開発株式会社の委託金である。
- ・発掘調査の担当には、鈴木徳雄（児玉町教育委員会社会教育課：当時）および平田重之（児玉町遺跡調査会：当時）があたり、平田が調査員として現地で専従した。
- ・整理事業の一部および報告書作成作業は、本庄市遺跡調査会が株式会社測研ほんじょう事務所に委託して実施した。
- ・本書の執筆は、第 1 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 2 章～第 4 章は高林真人（株式会社測研）が行い、編集は高林が行なった。
- ・本書に掲載した出土遺物、遺構等の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料も含めて本庄市教育委員会で保管している。
- ・発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や機関より御助言・御協力を賜った。ここに記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
池田敏宏、大屋道則、小宮山克己、千装 智、長滝歳康、村上泰司、矢内 勲、山口逸弘、山田英彦
埼玉県教育局生涯学習文化財課、児玉郡市文化財担当者会

凡 例

- ・遺構番号は、D 地点での発掘調査時に便宜的に 1 号から付したが、『後張遺跡Ⅲ』の発掘調査報告書に倣い後張遺跡全体の続き番号に変更して正式番号とした。なお、新旧遺構番号の対比は別表の通りである。
- ・グリッドの設定は、日本測地系の国家座標に一致させ、一辺 4 m 方眼を単位とした。座標値（X＝24,258.00 Y＝－59996.00）を起点とし、東へ A・B・・・G、西へ－A、南へ 0・1・2・・・11 と番号を付した。
- ・本書第 3 図中に記載した X Y 座標値は、測量法の改正に伴い発掘調査時の日本測地系の座標値を世界測地系に変換した数値である。なお、発掘調査時の日本測地系の座標値を括弧内に記載している。また、巻末の抄録における北緯東経の数値も、世界測地系に変換したものである。
- ・遺構平面図中に記した＋は、各グリッドからの距離を示している。各グリッドの北西端部を原点（E 0、S 0）とし、東へ 1 m 行くごとに E 1～3、南へ 1 m 行くごとに S 1～3 と表記した。
- ・遺構挿図中に使用した方位記号は、すべて座標北を示している。
- ・土層断面図・エレベーション図に示した数値（L＝）は標高を示す。
- ・出土した遺物の注記には、遺跡名（後張 D）・遺構名（調査時の遺構番号）またはグリッド・出土層位などを記入した。

- ・本書で使用した略号は次の通りである。

S I＝竪穴住居跡 S K＝土坑 S D＝溝跡 p＝竪穴住居内ピット（小穴）

- ・遺構の実測図は、遺構配置図・大溝跡・1号・2号溝跡の平面図を1/200、大溝跡・1号・2号溝跡の断面図を1/100、竪穴住居跡・3号溝跡の平・断面図を1/60、竪穴住居跡炉跡・カマド跡・貯蔵穴の平・断面図・土坑の平・断面図を1/30で掲載した。
- ・遺物実測図は、1/4を基本とし、土製品の一部と石製品を1/2で掲載した。
- ・遺物実測図で反転実測を行なったもの、欠損しているものは、外形線の中心線付近で間を空けるようにしている。
- ・本報告書での法量表記は、（ ）を推定値、[]を残存値とした。
- ・遺物観察表における遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1998年度版）』を使用した。
- ・遺物観察表における出土位置は、床面から5cmまでのものを床直とし、それよりも高い位置は覆土とした。
- ・遺物写真は、実測図とほぼ同じ縮尺となるように掲載した。

新旧遺構番号対応表

旧番号	新番号	旧番号	新番号
1号住居跡	第218号住居跡	19号住居跡	第234号住居跡
2号住居跡	第219号住居跡	20号住居跡	第235号住居跡
3号住居跡	第220号住居跡	21号住居跡	第236号住居跡
4号住居跡	第221号住居跡	22号住居跡	欠 番
5号住居跡	第222号住居跡	23号住居跡	欠 番
6号住居跡	第223号住居跡	24号住居跡	第237号住居跡
7号住居跡	第224号住居跡	25号住居跡	第239号住居跡
8号住居跡	第225号住居跡	26号住居跡	欠 番
9号住居跡	第226号住居跡	27号住居跡	欠 番
10号住居跡	第227号住居跡	28号住居跡	欠 番
11号住居跡	第228号住居跡	29号住居跡	欠 番
12号住居跡	欠 番	30号住居跡	第238号住居跡
13号住居跡	第229号住居跡	1号土坑	第49号土坑
14号住居跡	第230号住居跡	1号溝跡	D－1号溝跡
15号住居跡	第231号住居跡	2号溝跡	D－2号溝跡
16号住居跡	第232号住居跡	3号溝跡	D－3号溝跡
17号住居跡	欠 番	2号大溝跡	大溝跡
18号住居跡	第233号住居跡		

後張遺跡D地点発掘調査組織

児玉町遺跡調査会（平成元年度：抜粋）

会 長	野口敏雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員
	日向國俊	児玉町文化財保護審議委員
	中兼久偉	児玉町文化財保護審議委員
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員
	吉川 豊	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	立花 勲	児玉町教育委員会社会教育課課長補佐
	前川由雄	〃 社会教育係長
	金子幸弘	〃 社会教育係
	恋河内昭彦	〃 社会教育係
調査員	鈴木徳雄	児玉町教育委員会社会教育課社会教育係
	平田重之	児玉町遺跡調査会調査員

後張遺跡D地点整理・報告組織

本庄市遺跡調査会（平成 22 年度）

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長
	田島弘行	本庄市会計課長
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木徳雄	〃 副参事兼課長補佐
	太田博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊季広	〃 埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	の野善行	〃 埋蔵文化財係臨時職員

目 次

例言
凡例
目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	検出された遺構と遺物	5
第1節	後張遺跡D地点の概要	5
第2節	竪穴住居跡	5
第3節	溝跡	37
第4章	まとめ	43
第4節	大溝跡	39
第5節	土坑跡	42
第6節	遺構外出土遺物	42

挿図目次

第1図	後張遺跡調査区位置図	1
第2図	周辺遺跡図	4
第3図	後張遺跡D地点遺構配置図	6
第4図	第218・第219号住居跡	7
第5図	第218号住居跡出土遺物（1）	8
第6図	第218号住居跡出土遺物（2）、 第219号住居跡出土遺物	9
第7図	第220号住居跡	12
第8図	第220号住居跡出土遺物	13
第9図	第221号住居跡、第221号 住居跡出土遺物	14
第10図	第222号住居跡	15
第11図	第222号住居跡出土遺物	16
第12図	第223号住居跡、第224・ 第225号住居跡	17
第13図	第224・第225号住居跡 出土遺物	18
第14図	第226号住居跡、第227・ 第228号住居跡	20
第15図	第226・第227号住居跡 出土遺物	21
第16図	第228号住居跡出土遺物	23
第17図	第229・第230号住居跡、 第231号住居跡	24
第18図	第229～第231号住居跡出土遺物	25
第19図	第232号住居跡	26
第20図	第232号住居跡出土遺物	27
第21図	第233号住居跡、第234・ 第235号住居跡	30
第22図	第233・第234号住居跡 出土遺物	30
第23図	第236～第238号住居跡	32
第24図	第236～第238号住居跡 出土遺物	33
第25図	第239号住居跡出土遺物（1）	35
第26図	第239号住居跡出土遺物（2）	36
第27図	D－1・2号溝跡	37
第28図	D－2号溝跡出土遺物	38
第29図	D－3号溝跡	38
第30図	大溝跡	40
第31図	大溝跡出土遺物	41
第32図	第49号土坑、第49号土坑 出土遺物	42
第33図	遺構外出土遺物	43

写真図版

第1章 調査に至る経緯

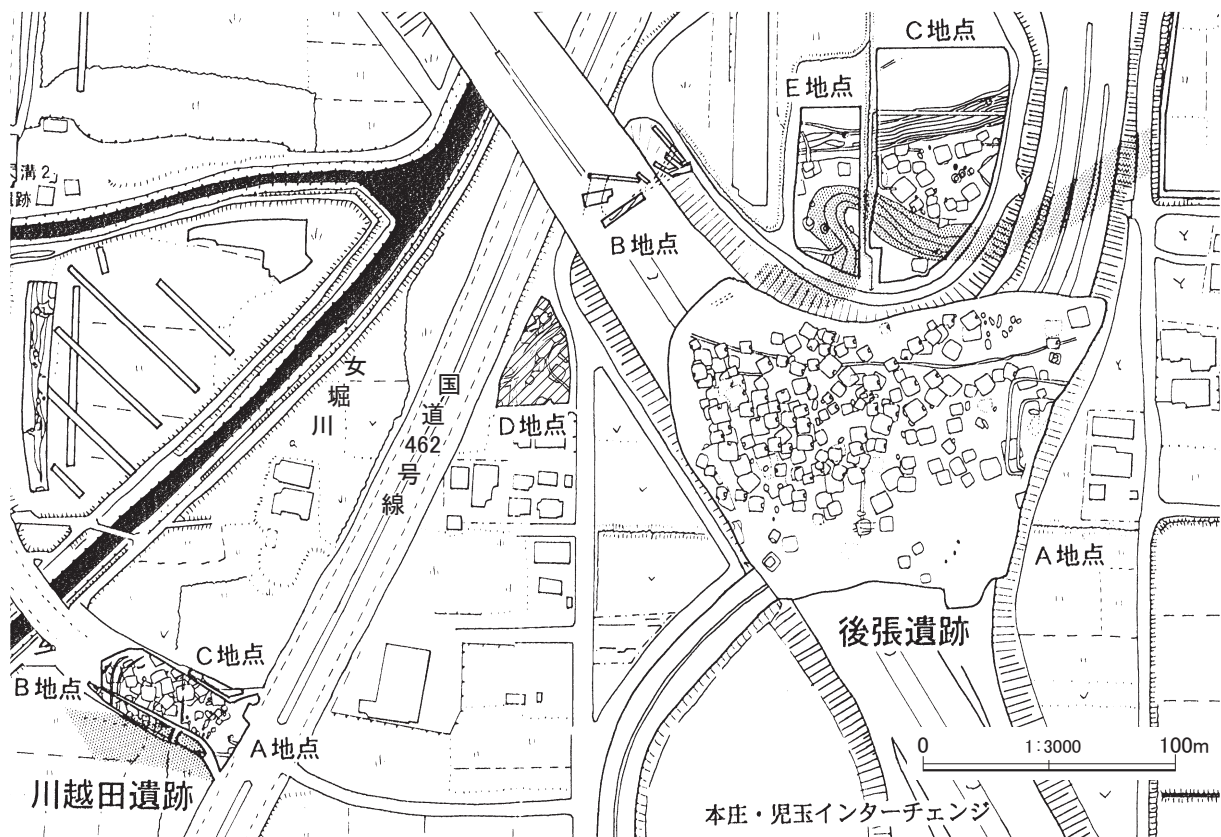
昭和63年、児玉郡児玉町大字高関字地藏堂205番地—4、206番地—1（現本庄市児玉町高関字地藏堂205番地—4、206番地—1）には資材置き場としての開発計画があり、児玉町教育委員会（当時）では周知の埋蔵文化財包蔵地である旨の回答を行ったところであった。その後、ホテル建設を計画している秀和観光開発株式会社より、この区域における開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会（当時）に照会があり、照会のあった開発予定地が、周知の埋蔵文化財包蔵地№54－275遺跡（後張遺跡）に相当しており、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いところから、現状を変更しようとする場合は、町教育委員会と協議するとともに、やむを得ず現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存措置について協議し、文化財保護法の規定に則って事業を実施する旨の回答を行った。

平成元年11月に秀和観光開発株式会社より発掘調査依頼書が児玉町教育委員会教育長あてに提出され、秀和観光開発株式会社と児玉町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、ホテル建設の予定の変更は困難であり現状で保存することが極めて困難であることから、この地点を後張遺跡D地点とし、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査に関わる届出は、同年11月6日付で児玉町遺跡調査会会長野口敏雄より、「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく秀和観光開発株式会社代表取締役神田雅彦より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出されている。なお、埼玉県教育委員会からは、教文第3－339号によって周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知があった。

発掘調査の実施にあたっては、児玉町教育委員会の指導に基づいて秀和観光開発株式会社と児玉町遺跡調査会との間で、平成元年11月18日に発掘調査に関する委託契約を締結し、平成元年11月22日から平成2年3月31日まで現地での発掘調査が実施された。

（本庄市教育委員会文化財保護課）



第1図 後張遺跡調査区位置図

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡の所在する埼玉県本庄市は、埼玉県の北西部に位置し、東は深谷市・美里町、西は上里町・神川町、南は長瀨町・皆野町に接する。北は群馬県との境を為す利根川が東流しており、利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。今回報告するD地点の位置する本庄市児玉町高関は、本庄市街地の南西約3kmの地点にあり、関越自動車道の本庄児玉インターチェンジに隣接する。西側には国道462号線が北東―南西方向に走っており、北進すると国道17号線、南進すると児玉市街に至る。そのすぐ西脇には女堀川がほぼ並行して北東方向に下っており、本庄児玉インターチェンジ出入り口を越えたところでほぼ直角に折れ曲がり東流している。約700m北には、上越新幹線が北西―南東方向に走っている。

本庄市は北東―南西方向に細長い形をしており、その南西部1／3あたりを断層線である八王子―高崎構造線が横断している。この断層線によって、本庄市の地形は南西部の山地と北東部の平野部とに大きく分けられる。平野部は山地から北東方向に舌状に延びる丘陵、群馬県境を流れる神流川によって形成された緩傾斜扇状地である台地、台地北端部を利根川などが浸食してできた低地及び台地上を山地から流れてきた中小河川が浸食してできた低地で構成されている。

山地は群馬県西南部と埼玉県北西部にまたがる上武山地に属しており、その山地も皆野町の男岳・女岳に源を発する小山川によって東西に二分される。西側の山地は、群馬県境の神流川の流れに沿うように二子山を西端に父不見山、城峰山と1000mを越える山々が連なるのに対し、東側の山地は不動山、陣見山、鐘撞堂山と500m級の山々となり低くなっている。

上武山地の縁辺から半島状に延びる丘陵は児玉丘陵と呼ばれ、大きく3つの地域に区分される。また、生野山や浅見山といった台地部に孤立する丘陵が見られる。これらの丘陵は、山麓から続いていた丘陵が侵食を受けたもので、それぞれ生野山残丘、浅見山残丘と呼ばれている。

平野部の大部分を占める台地は本庄台地と呼ばれ、東は小山川、西は神流川、北は利根川によって境が為されている。本庄台地は、洪積世末期に神流川の運んだ土砂によってできた扇状地である。台地上は概ね平坦であるが、扇状地の発達方向である南から北へ僅かに傾斜している。また、自然堤防が現況で微高地として確認できる場所もあり、僅かな起伏が認められる。台地北端は利根川などの浸食を受けて河岸段丘が形成されており、市内北部で東西に延びる比高差4～12mの崖線が見られる。この崖線が低地との境となる。

低地は利根川と台地北端の崖線とに挟まれた部分と、台地上を流れる金鑽川・赤根川・女堀川・小山川などの中小河川の開析作用によってできたものがある。前者は本庄低地と呼ばれ、烏川・神流川・利根川などが氾濫を繰り返すことで形成されたものである。後者は女堀川低地・小山川低地と呼ばれ、これらの低地は河川の流れに沿って北東方向に帯状に広がっており、低地内には島状に残された微高地や帯状に形成された自然堤防が見られる。

このような地形環境をもつ本庄市内において、本遺跡は台地上を流れる女堀川の中流域右岸に位置し、女堀川が開析してできた沖積低地内の標高68mの自然堤防上に立地している。本遺跡の立地する自然堤防は北東―南西方向に延びており、同一の自然堤防上には東へ約100mの所に四方田遺跡第（第2図18、以下第2図略）が、南西へ約300～400mの所に川越田遺跡（34）と梅沢遺跡（35）があり、これらの遺跡は、本遺跡と同一時期ならびに連続する時期の竪穴住居跡が多数検出されている。このことは、集落の中心が時間の経過によって移動し、移動が繰り返された結果、自然堤防上のほぼ全域において集落が形成されたものと考えられ、本遺跡を含む4遺跡は、遺構の分布が連続する一連の遺跡の可能性が考えられる。

第2節 歴史的環境

本遺跡の立地する女堀川低地およびその周辺の地域には、低地内の自然堤防上と微高地上、低地北西側の本

庄台地縁辺部、低地南東側に列上に並ぶ生野山・鷲山・浅見山（大久保山）の残丘上およびその斜面下の台地上を中心に各時代に渡って多くの遺跡が分布している。周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

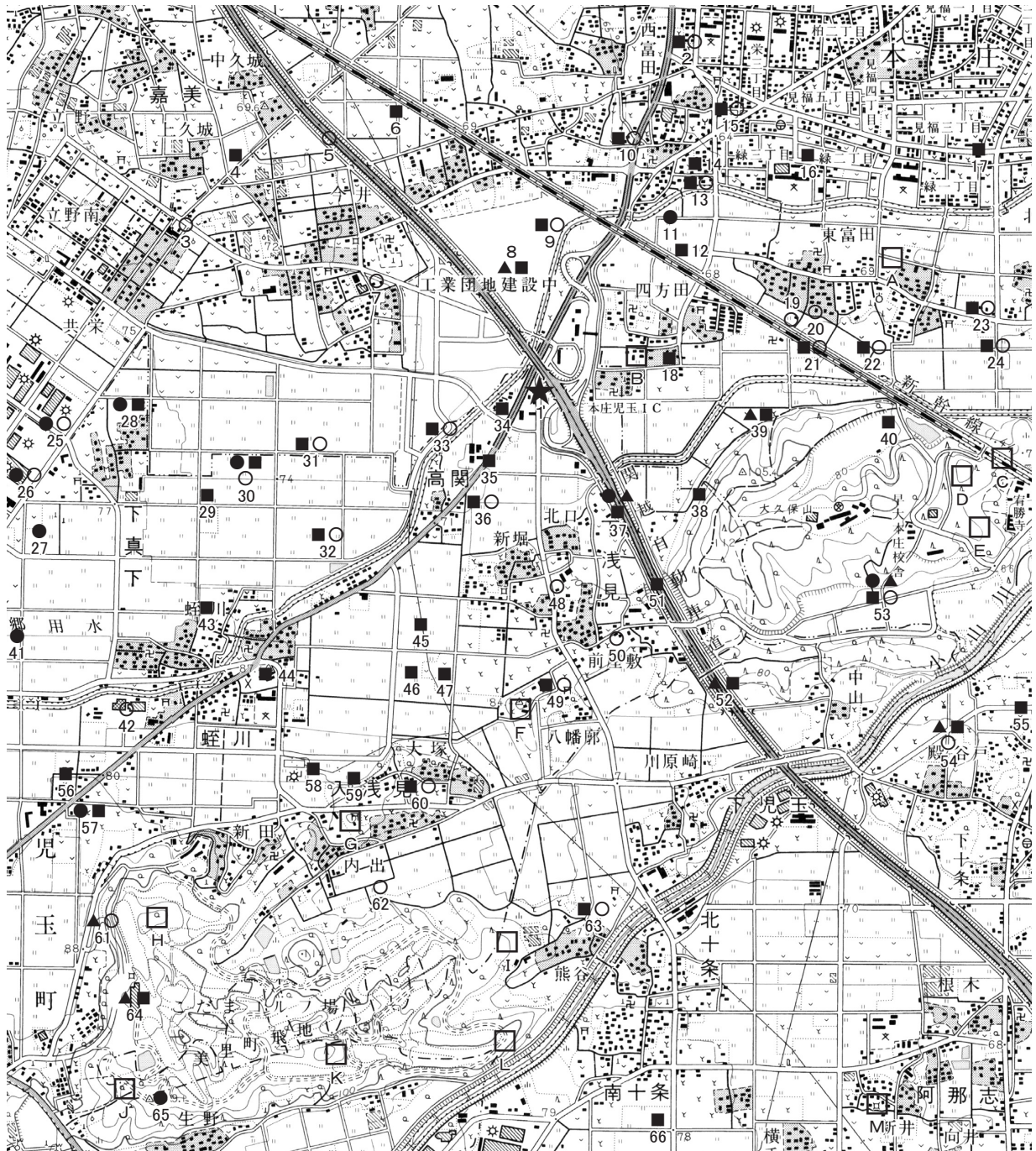
縄文時代の遺跡は、草創期から前期の遺構分布は丘陵上および山地内が中心となっており、女堀川低地周辺では大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区・宥勝寺北裏遺跡で草創期から早期の土器が出土しているのみである。中期後半になると、本庄台地の縁辺部に大規模環状集落である将監塚遺跡（25）・古井戸遺跡（26）・新宮遺跡が近接して形成されている。また加曽利EⅢ式期になると、数件の住居からなる小規模集落が中下田遺跡（41）や西富田前田遺跡（11）、七色塚遺跡（22）など低地部に造られている。後・晩期になると遺構数は中期と比べて減少し、古川端遺跡や女池遺跡、藤塚遺跡（30）などが旧河道や湧水点に近い場所で確認されている。

弥生時代の遺跡は、女堀川低地周辺域では検出例が少ないながらも、中期は丘陵部から低地部に、後期は丘陵部を主体に立地する傾向が認められる。中期の遺跡は、低地内の今井条里遺跡（8）、本庄台地上の夏目西遺跡、浅見山残丘上の大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区で中期中葉の土坑および土坑群が検出されている。集落跡である村後遺跡（54）が低地部に造られているが、これを端緒に低地部に長期間にわたって集落が営まれることは無かった。後期の遺跡は、生野山残丘・浅見山残丘上および残丘斜面下の台地上を主体に分布している。生野山遺跡（64）、大久保山遺跡（53）は吉ヶ谷式土器を主体、山根遺跡（39）・飯玉東遺跡（37）は樽式土器を主体、宥勝寺北裏遺跡、美里町塚本山遺跡は二軒屋式土器を主体とする遺跡である。これらの遺跡は、単一時期に近い小規模集落と考えられるものが多く、近くの小支谷の湧水を利用した小規模な谷田を生産基盤にしていたものと推測される。女堀川中流域の低地部は、ほぼ全域にわたり圃場整備が実施されたため、多くの遺跡で発掘調査が行われたが、自然堤防上・微高地上には弥生時代後期の遺構は確認されておらず、また水路を開削するなど低地部の開発を積極的に行った痕跡も認められなかったことから、弥生時代後期には低地部の開発を行なっていなかったようである。

古墳時代になると、女堀川低地の開発が本格化したことから、女堀川低地周辺の遺跡数が急激に増加する。これまでの弥生時代後期の遺跡とは異なり、低地部内への集落の進出が顕著に見られるようになった。古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期から継続して営まれるものは少なく、多くの遺跡は該期になって新たに出現している。前期中葉頃に川越田遺跡（34）や社具路遺跡（10）が低地内に出現し、後葉～終末期に本遺跡のような大規模集落を中心に女堀川中流域全域に分布が広がり、低地部の開発を積極的に進めつつ古墳時代中期・後期へと続いていく。古墳時代前期の遺跡から出土する土器は、吉ヶ谷式土器や樽式土器など弥生時代後期の在地土器の系統をくむ在地系土器も残存するが、畿内・東海西部・北陸・南関東地方などの土器の影響を受けた外来系土器が最初から作られている。その外来系土器はやがて在地系土器群を凌駕し主体となっていくが、その様相は低地部の遺跡と丘陵部の遺跡とは異なる。低地部では外来系土器が主体となる遺跡が当初から存在しているが、丘陵部では弥生時代後期からの生活基盤を継承しており、在地系土器の影響が根強く残る傾向が見られる。このような弥生時代後期から古墳時代前期にかけての展開からは、他地域から入植して来た集団が新たに低地部の開発を行なったのではないかと推測される。

古墳時代中期以降は、低地部のほぼ全域に集落が展開し、これまで対象外であった本庄台地にも開発が進み集落が営まれるようになった。弥生時代においては生活基盤の一つであった生野山・鷲山・浅見山の残丘は前期末葉に方形周溝墓が造営され、以降墓域として意識されるようになった。その後当該地域の首長墓である前期の鷲山古墳（F）・北堀前山1号墳（D）、中期の北堀前山2号墳（C）・物見塚古墳（J）、後期の生野山銚子塚古墳（H）・生野山16号墳（L）などが継続して残丘上に造営されている。

奈良・平安時代になると、低地部のほとんどの集落は廃絶され、低地を取り囲む台地縁辺、残丘上、残丘斜面下の低台地上に移動している。低地東側の残丘周辺に移動した集落は10世紀以降も継続して営まれている。低地西側の本庄台地上に移動した集落は9世紀後半に衰退し始め、9世紀後半から10世紀にかけて再び低地内に小規模な集落を形成するようになる。



●：縄文時代 ▲：弥生時代 ■：古墳時代 ○：奈良・平安時代 □：古墳

0 1:2,5000 1km

- 1:後張遺跡 2:夏目遺跡 3:今井遺跡群 4:往来北遺跡 5:久城前遺跡 6:諏訪遺跡 7:北廓遺跡 8:今井条里遺跡 9:地神・塔頭遺跡
 10:社具路遺跡 11:西富田前田遺跡 12:九反田遺跡 13:西富田・四方田条里遺跡 14:西富田本郷遺跡 15:南大通り線内遺跡 16:雌濠遺跡
 17:笠ヶ谷戸遺跡 18:四方田遺跡 19:観音塚遺跡 20:元富遺跡 21:下田遺跡 22:七色塚遺跡 23:久下東遺跡 24:久下前遺跡 25:将監塚遺跡
 26:古井戸遺跡 27:平塚遺跡 28:将監塚東遺跡 29:堀向遺跡 30:藤塚遺跡 31:前田甲遺跡 32:柿島遺跡 33:今井川越田遺跡 34:川越田遺跡
 35:梅沢遺跡 36:東牧西分遺跡 37:飯玉東遺跡 38:根田遺跡 39:山根遺跡 40:浅見山Ⅰ遺跡 41:中下田遺跡 42:蛭川坊田遺跡 43:左口遺跡
 44:共和小学校校庭遺跡 45:浅見境北遺跡 46:東田遺跡 47:浅見境遺跡 48:天神耕地・中畑遺跡 49:鷺山南遺跡 50:南ノ前遺跡 51:雷電下遺跡
 52:塚本山遺跡 53:大久保山遺跡 54:村後遺跡 55:権現塚遺跡 56:辻堂遺跡 57:南街道遺跡 58:日延遺跡 59:城の内遺跡 60:新屋敷遺跡
 61:吉田林割山遺跡 62:向田A遺跡 63:宮ヶ谷戸遺跡 64:生野山遺跡 65:上生野山遺跡 66:樋之口遺跡
- A:公卿塚古墳 B:四方田古墳 C:北堀前山2号墳 D:北堀前山1号墳 E:東谷古墳 F:鷺山古墳 G:金鐘神社古墳 H:生野山銚子塚古墳
 I:熊谷後1号墳 J:物見塚古墳 K:生野山將軍塚古墳 L:生野山16号墳 M:堂山古墳

第2図 周辺遺跡図

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 後張遺跡D地点の概要

本遺跡は、埼玉県本庄市児玉町高関字地藏堂・押仏に位置し、本庄台地を流れる女堀川中流域右岸の自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落である。

本遺跡はこれまでに5地点で発掘調査が実施されている。A・B地点は、関越自動車道建設に先立って埼玉県教育委員会が1975年から1976年にかけて発掘調査を行い、1982年に『後張遺跡Ⅰ』、1983年に『後張遺跡Ⅱ』としてまとめられている。C地点は、民間開発に伴い1985年に児玉町遺跡調査会が事前に発掘調査を行い、2005年に『後張遺跡Ⅲ』としてまとめられている。今回報告するD地点は1989年に、E地点は1990年に、どちらも民間開発に伴い児玉町遺跡調査会が事前に発掘調査を行っている。

A～C地点で検出された遺構は、竪穴住居跡217軒（古墳時代前期35軒、中期73軒、後期88軒、平安時代3軒、不明18軒）、土坑22基、井戸跡10基、溝跡12条である。その他にA地点で焼土跡や中世の屋敷跡、B地点で大溝跡・溝跡、C地点でピット群・河道跡などが検出されている。（第1図参照）

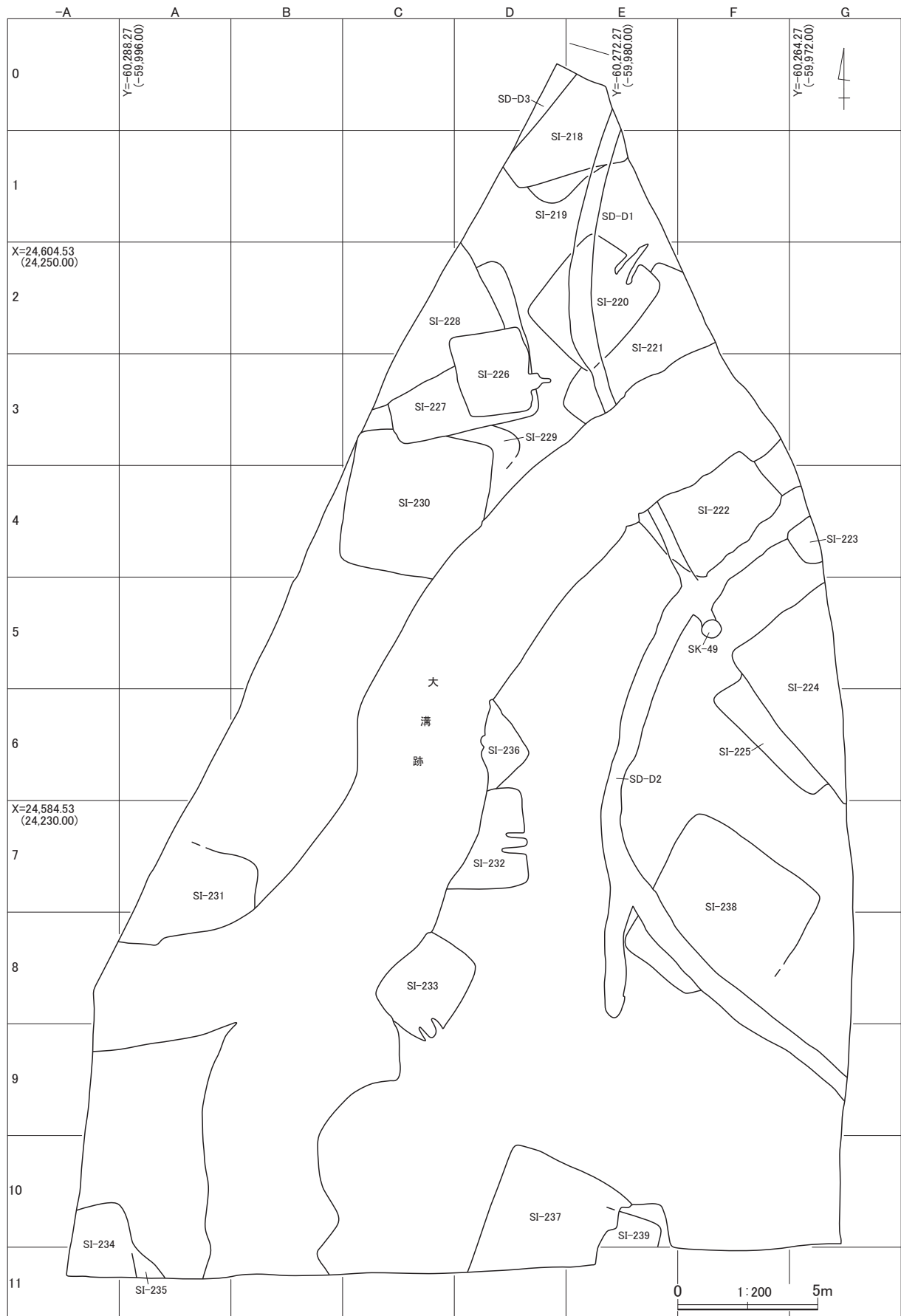
今回報告するD地点は、A地点の調査区西端から西へ約50m、B地点から南南西約70mの所に位置する。調査範囲は南を底辺とする二等辺三角形の様な形状を呈し、調査面積は約1,000㎡である。遺構検出面は、北端部が標高68m、南端部が標高67mで、南側へ非常に緩やかに傾斜しているがほぼ平坦である。検出された遺構は、竪穴住居跡21軒（古墳中期12軒、後期4軒、平安時代1軒、時期不明4軒）、土坑1基、溝跡3条、B地点から続くと考えられる大溝跡1条である。D地点まで含めた後張遺跡の竪穴住居跡の検出数は238軒となり、そのうち古墳時代前期が35軒（A地点24軒・C地点11軒）、中期が85軒（A地点59軒・C地点14軒・D地点12軒）、後期が92軒（A地点88軒・D地点4軒）、平安時代が4軒（A地点2軒・B地点1軒・D地点1軒）、時期不明が22軒となった。

遺構の分布状況を見ると、B地点で確認された大溝に繋がると考えられる大溝跡が1条、調査区の北西辺とほぼ並行する形で北東－南西方向に縦断している。大溝跡は南部で二股に分岐し、一方は西方向に延びる。調査区東端部では、古墳時代後期～平安時代の溝跡が1条、西側に弧を描く形で検出されている。この溝跡は、南下から南東方向へ方向を変える部分で、そのまま僅かに南下する溝と分岐している。調査区北端部では、中世以降と考えられる溝跡が2条あり、西側の溝跡は僅かしか検出されていないため全容は不明である。東側の溝跡は僅かに西側に膨らみつつ北－南方向に延びている。竪穴住居跡は、調査区北東側で遺構密度が濃く、2～3軒ずつ重複しつつ、13軒が密集して分布している。調査区南西側は遺構密度が薄く、重複する竪穴住居跡は少なく、8軒がまばらに分布している。時期別で見ると、古墳時代中期の竪穴住居跡は、調査範囲全域にわたって分布しているが、北東側で重複が見られることから、北東側で若干密度が濃いようである。古墳時代後期の竪穴住居跡は4軒のうち3軒が北東側に分布し、南西側の1軒も北東側に近い位置にある。ここよりも南西では古墳時代後期の竪穴住居跡が見られない。平安時代の竪穴住居跡1軒は、調査区北東側に分布している。

第2節 竪穴住居跡

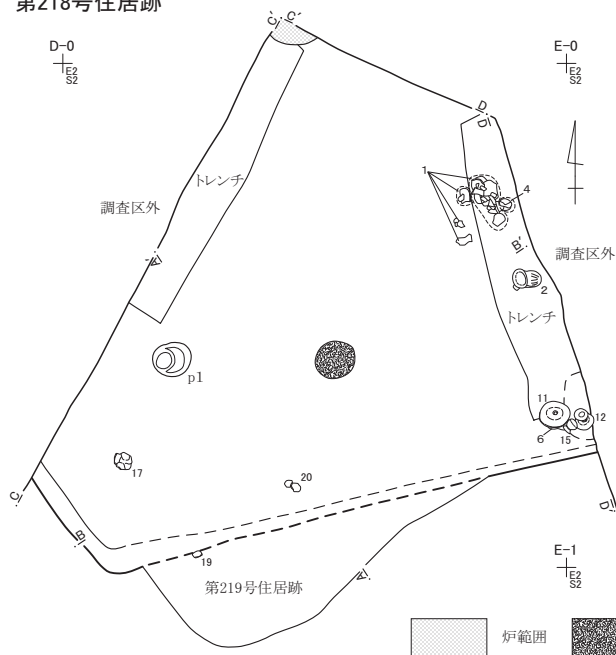
第218号住居跡（第4～6図・写真図版1・2）

本遺構は、調査区北端部のD0・1、E0・1グリッドに位置する。南西隅部付近が検出され、その他の部分は調査区外に含まれる。第219号住居跡・D－1・3号溝跡と重複しており、本遺構はD－1・3号溝跡より古く、第219号住居跡よりも新しい。平面形態は、大半が調査区外にあるため明確ではないが、西壁が外へ開いていることから、いびつな隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は[4.30]×[3.86]m、西壁方向はN38°W、検出面から床面までの深さは22cmである。床面は概ね平坦であるが、中央部が壁側よりもやや低くなっている。住居内施設は、炉跡1基と小穴1個（p1）が確認された。炉跡は床面範囲のほぼ中央に位置す

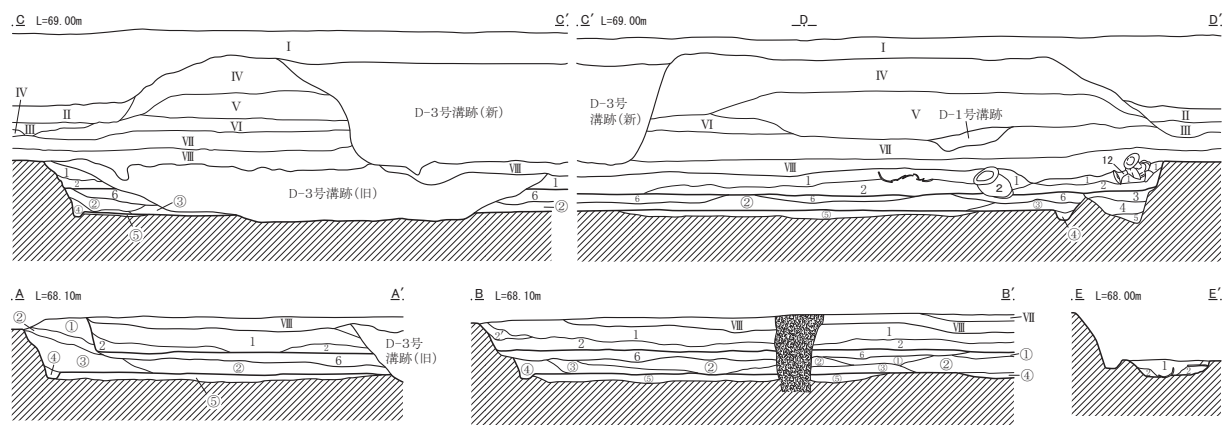
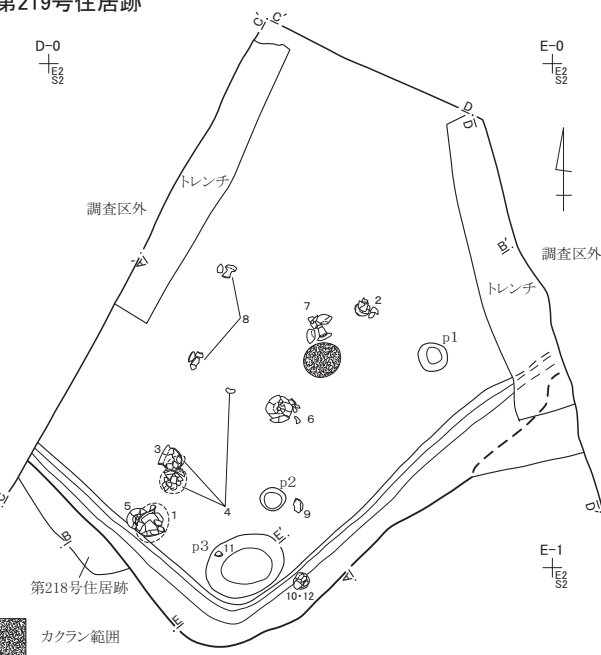


第 3 図 後張遺跡D地点遺構配置図

第218号住居跡



第219号住居跡



第218・219号住居跡

VIII 黒褐色土 黄褐色土粒・マンガン・鉄分等の凝集著しい。粘性に富み、しまり有り。

第218号住居跡

- 1 暗黄褐色土 灰黄褐色土にマンガン・鉄分等の凝集含む黄褐色土を充填。粘性に富み、しまり有り。
- 2 暗黄褐色土 黄褐色土粒・鉄分等含む。粘性は弱く、しまり有り。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒少量含む。粘性に富み、しまり有り。
- 4 黒褐色土 炭化物・焼土粒多く含む。粘性は弱く、しまりなし。
- 5 黄褐色土 黒褐色土にロームブロック多く含む。粘性は弱く、しまりなし。
- 6 掘形埋土

第219号住居跡

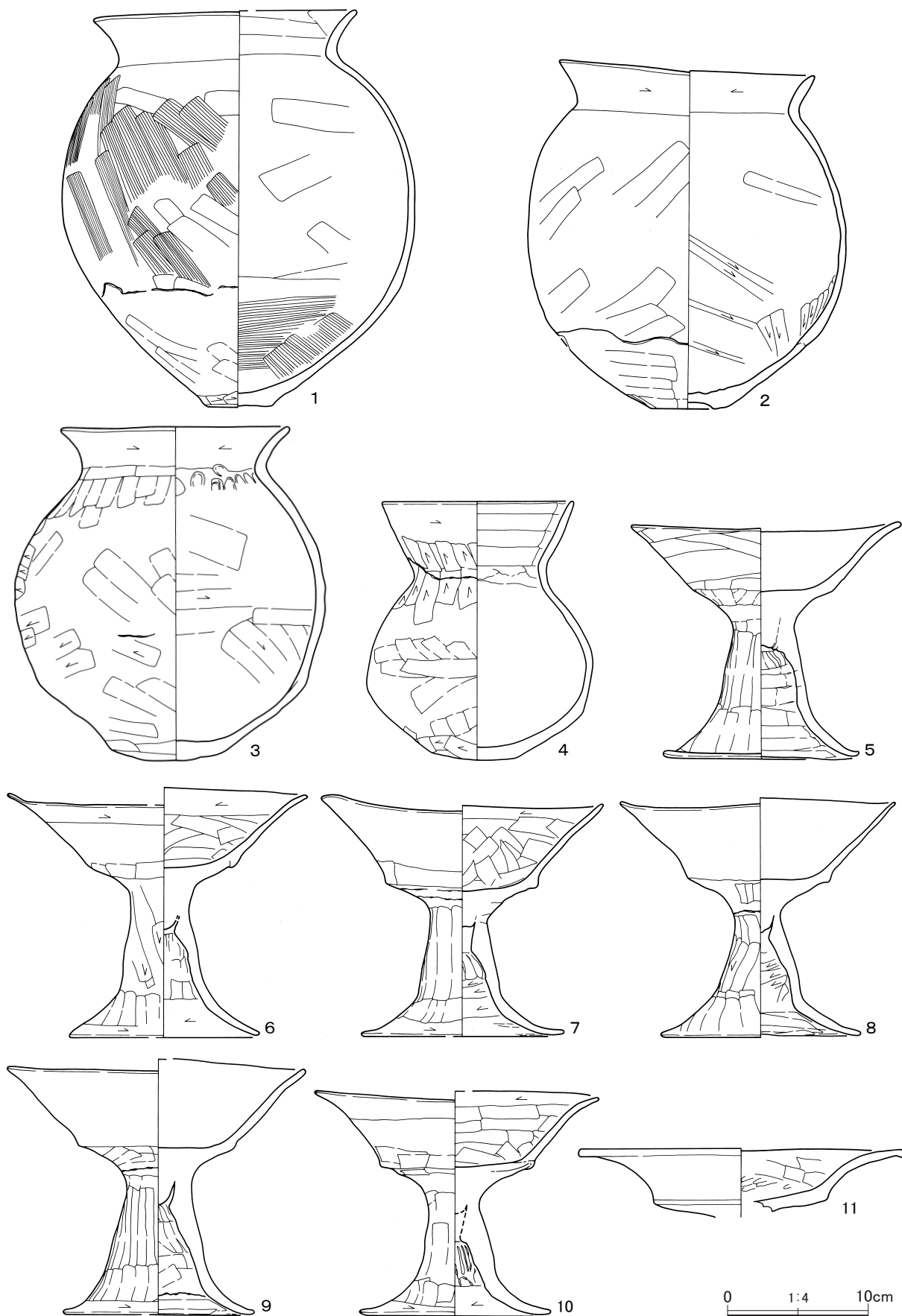
- ① 暗褐色土 黄褐色土粒・マンガン・鉄分等含む。粘性に富み、しまりは弱い。
- ② 暗褐色土 炭化物・焼土粒多く含む。粘性は弱く、しまりはない。
- ③ 黄褐色土 灰褐色土に黄褐色土ブロックを充填、炭化物・マンガン・鉄分多く含む。粘性・しまりともに弱い。
- ⑤ 掘形埋土

第219号住居跡 p3

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒若干、炭化物・焼土粒少量含む。粘性は弱く、しまりはない。
- 2 黄褐色土 暗褐色土にロームブロックを充填したような土。粘性は弱く、しまりはない。

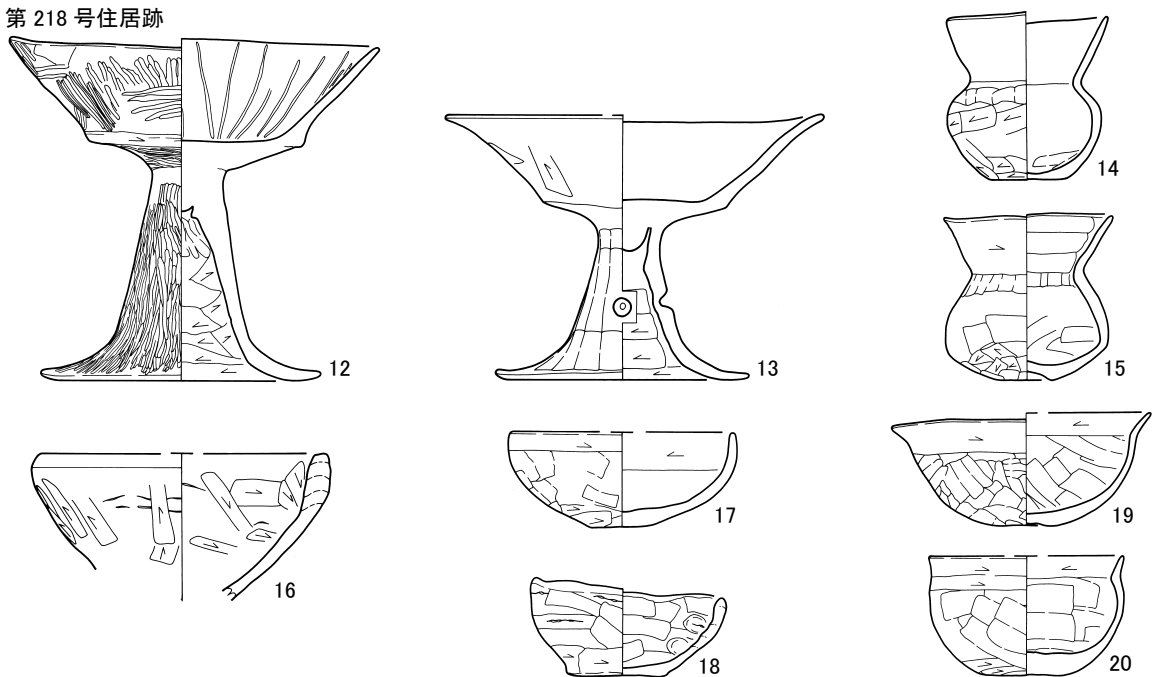
第4図 第218・第219号住居跡

と思われる。南西部約4分の1が検出され、その他の部分は調査区外にある。規模は[53]×[16]cmである。小穴は南西隅部にあり、直径約30cmの円形を呈する。深さ36cmを測り、東側にはテラスを有する。位置から柱穴の可能性はある。また、南壁際の調査区境部分には、上端幅53×[20]cm、深さが26cmの掘り込みがある。断面がV字形を呈しておりその性格は判然としない。遺構内堆積土は6層に分けられる。1・2層は

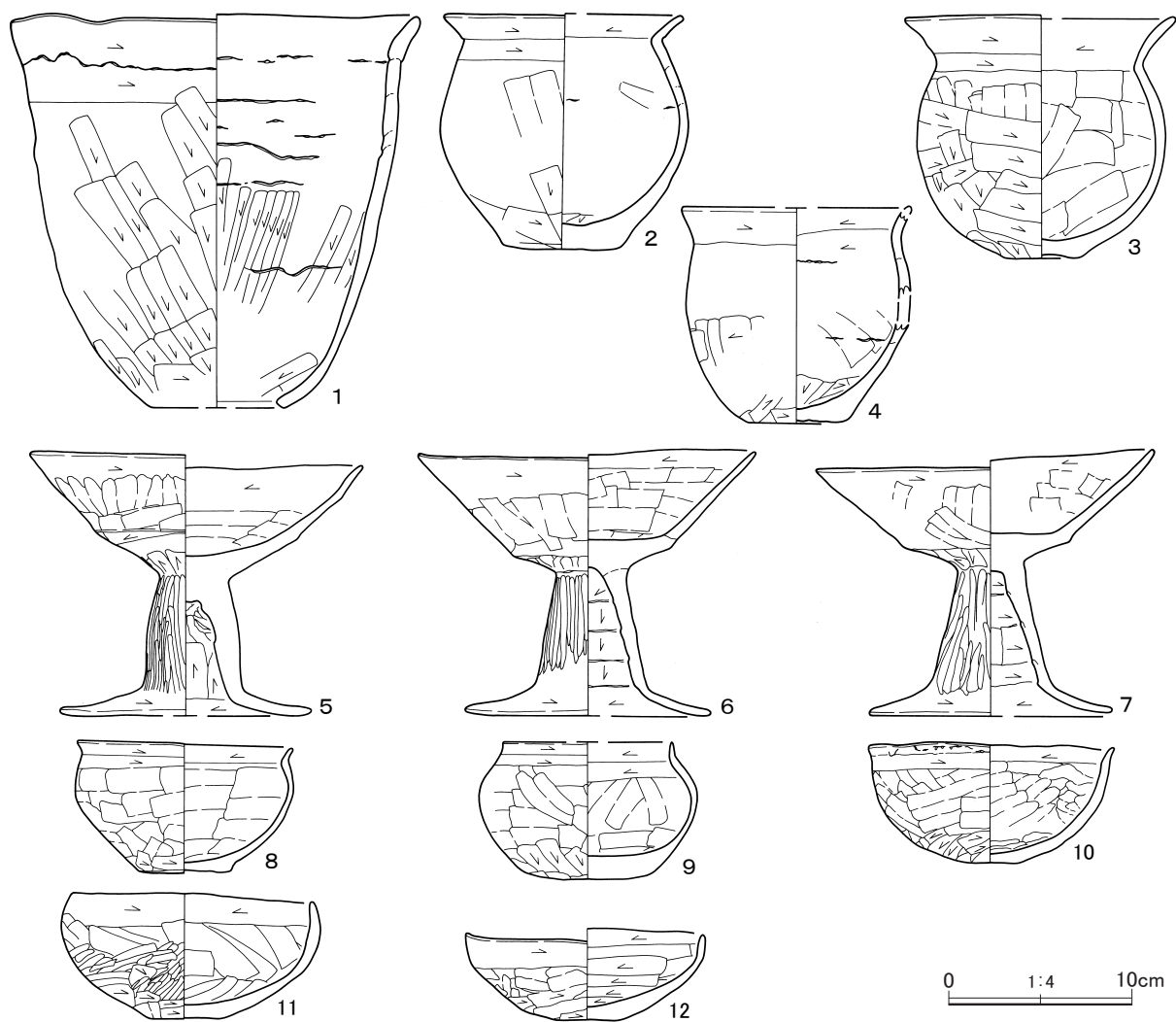


第 5 图 第218号住居跡出土遺物(1)

第 218 号住居跡



第 219 号住居跡



第 6 図 第218号住居跡出土遺物(2)・第219号住居跡出土遺物

第 218 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 甕	床直	18.8	5.2	28.3	やや粗	良	にぶい 橙色	最大径を胴中位にもつ球胴を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ハケメ 胴下部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ハケメ	口縁～胴上部 1/2 胴下～底部ほぼ完存
2	土師器 甕	床直	18.3	4.7	24.7	やや粗	良	にぶい 褐色	底部外縁に粘土帯を貼り付け上げ底状を呈し胴部は球胴 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ	ほぼ完存
3	土師器 甕	覆土	16.2	2.5	23.7	やや粗	良好	橙色 黒斑	最大径を胴中位にもつ球胴を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 胴～底部ヘラケズリ	ほぼ完存
4	土師器 壺	床直	13.5	1.8	18.4	緻密	良好	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 頸～胴中部ヘラケズリ 胴下部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラナデ 頸～底部磨減激しく調整不明	ほぼ完存
5	土師器 高坏	覆土	18.9	13.7	16.9	やや粗	良	橙色 明黄褐色	外面：坏上部ヘラナデ 坏下～裾上部ヘラケズリ 裾端部ヨコナデ 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下～裾部ヘラナデ	完存
6	土師器 高坏	覆土	21.0	13.5	17.8	緻密	良好	黄橙色	外面：坏上部ヨコナデ 坏下～脚部ヘラケズリ 裾上部ヘラナデ 裾端部 ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ナデ・絞り痕 裾部ヨコナデ	ほぼ完存
7	土師器 高坏	覆土	19.8	14.1	17.1	緻密	良	黄橙色	外面：坏上部ナデ 坏下～脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部絞り痕・ヘラケズリ 裾部ヘラナデ	ほぼ完存
8	土師器 高坏	覆土	19.4	14.0	17.0	やや粗	良	橙色	外面：坏上部磨減激しく調整不明 坏下～裾上部ヘラケズリ 裾端部ヘラナデ 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚部ヘラケズリ 裾部ヘラナデ	ほぼ完存
9	土師器 高坏	覆土	21.0	13.2	18.2	やや粗	良好	橙色 黄褐色	外面：坏上部磨減激しく調整不明 坏下～裾上部ヘラナデ 裾端部ヨコナデ 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚部絞り痕・ヘラケズリ 裾部ヘラナデ	ほぼ完存
10	土師器 高坏	覆土	19.9	13.3	16.0	緻密	良好	黄褐色 黒斑	外面：坏上部ナデ 坏下～脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部絞り痕 裾部ヨコナデ	ほぼ完存
11	土師器 高坏	覆土	22.9	—	[4.8]	やや粗	良	橙色	口唇部面取り 外面：磨減激しく調整不明 内面：坏上部ヘラナデ 坏下部ヘラミガキ	坏部完存
12	土師器 高坏	覆土	19.3	12.6	18.2	緻密	良好	黄褐色	外面：坏上部ナデ後ヘラミガキ 坏下～裾部ヘラミガキ 内面：坏部ナデ後放射状ヘラミガキ 脚部絞り痕・ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	ほぼ完存
13	土師器 高坏	覆土	19.9	12.0	13.9	やや粗	良	橙色 黄褐色	脚部に径1cmの刺突痕1個有り 外面：坏上部ヘラケズリ後ナデ 坏下～裾上部ヘラケズリ 裾端部ヨコナデ 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	ほぼ完存
14	土師器 埴	覆土	8.5	4.0	8.8	緻密	良	橙色	体上部に最大径をもつ 外面：口縁～頸部ヨコナデ 体上部ナデ 体中～下部ヘラケズリ 底部ナデ 内面：口縁～体下部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 底部ヘラナデ	完存
15	土師器 埴	覆土	8.8	2.8	8.8	やや粗	良好	橙色 黒斑	体部最大径が下部にある下膨れの器形で底部中央が窪み上げ底状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 頸～体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラナデ 頸部絞り痕 体～底部ヘラナデ	完存
16	土師器 鉢	覆土	(15.2)	—	[7.8]	やや粗	良好	にぶい 黄色	外内面輪積み痕顕著に残る 外面：口唇部部分的に面取り 体部ナデ後 ヘラケズリ 内面：口縁～体部ヘラケズリ	口縁～体部 3/4
17	土師器 坏	床直	(11.7)	3.5	4.0	やや粗	良	にぶい 褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部磨減激しく調整不明	口縁部 1/2 体～底部ほぼ完存
18	土師器 坏	覆土	9.8	4.8	5.1	緻密	良好	橙色	外内面輪積み痕顕著に残る 外内面：ヘラナデ・指頭圧痕 外面底部ヘラナデ	完存
19	土師器 坏	床直	13.7	3.2	6.0	緻密	良好	橙色	外内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	2/3
20	土師器 坏	床直	(10.2)	3.2	6.3	緻密	良好	明赤褐色	外面：口縁～頸部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ 体～底部ヘラナデ	口縁～体部 1/4 底部完存

第 219 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 甌	覆土	22.1	(7.4)	21.4	やや粗	良	明黄褐色 黒斑	胴部整形後に口縁部を成・整形し輪積み痕顕著 外面：口縁～頸部ヨコナデ後接合部指押さえ 胴部ヘラケズリ 内面：口縁～胴上部ヨコナデ 胴下部ヘラケズリ	ほぼ完存
2	土師器 小型甕	床直	(12.7)	4.4	12.8	やや粗	良	明赤褐色	外面：口縁～頸部ヨコナデ 口縁部境に輪積み痕顕著 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	口縁～胴中部 2/3 胴下～底部ほぼ完存
3	土師器 小型甕	覆土	(14.6)	4.0	13.3	やや粗	良	橙色 黒斑	底面がわずかに窪み上げ底状を呈する 外面：口縁～頸部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴中～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	口縁～胴中部 1/2 胴下～底部完存
4	土師器 小型甕	覆土	—	4.8	[11.6]	やや粗	良	明褐色	外内面：口縁～頸部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ	頸～底部 3/4
5	土師器 高坏	床直	17.9	12.1	14.4	やや粗	良	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 坏上部ヘラナデ 坏下部ヘラケズリ 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：坏上部ヨコナデ 坏下部ヘラナデ 脚部絞り痕・ヘラケズリ 裾部ヘラナデ	坏～脚部ほぼ完存 裾部 1/8
6	土師器 高坏	床直	18.3	12.8	14.5	緻密	良	にぶい 褐色	外面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ・輪積み痕顕著 裾部ヨコナデ	坏～脚部ほぼ完存 裾部 1/2
7	土師器 高坏	床直	18.2	12.8	14.7	緻密	良	橙色	外面：口縁部ナデ 坏上部ヘラナデ 坏下部ヘラケズリ 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ・輪積み痕顕著 裾部ヨコナデ	ほぼ完存
8	土師器 埴	覆土	11.7	4.9	7.1	緻密	良好	橙色 黒斑	外面：口縁～頸部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	口縁～体中部 3/4 体下～底部完存
9	土師器 埴	床直	(9.1)	3.0	7.5	緻密	良好	明褐色 黒斑	外面：口縁～頸部ナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁～頸部ナデ 体～底部ヘラナデ	口縁～体部 1/4 底部完存
10	土師器 坏	覆土	13.3	2.6	6.4	やや粗	良	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
11	土師器 坏	覆土	13.0	3.9	6.8	やや粗	良好	橙色	口縁部は内湾する 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ・ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
12	土師器 坏	覆土	12.8	3.2	5.0	やや粗	良好	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ	完存

住居内堆積土、3～5層は南壁際の掘り込みの覆土、6層は掘形埋土である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち甕3点・壺1点・高坏9点・埴2点・鉢1点・坏4点の20点を図示した。

本遺構は、南西部の一部のみ確認されたものであるが、床面の状況および炉跡から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、炉跡があることと出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第 219 号住居跡（第 4・6 図、写真図版 2）

本遺構は、調査区北端部の D 0・1、E 0・1 グリッドに位置する。南西隅部が検出され、その他の部分は調査区外に含まれる。第 218 号住居跡と D-1・3 号溝跡と重複しており、本遺構は第 218 号住居跡・D-1・3 号住居跡よりも古い。平面形態は、大半が調査区外にあるため明確ではないが、隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [4.25] × [3.74] m、西壁方向は N 45° W、検出面から床面までの深さは 41 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は南壁付近に小穴 2 個（p 1・2）、南西隅部に小穴 1 個（p 3）、周溝が確認された。p 1 は直径約 25 cm の円形を呈し、深さは 17 cm である。p 2 は直径約 20 cm の円形を呈し、深さは 9 cm である。位置から柱穴と考えられる。p 3 は 63 × 49 cm の楕円形を呈し、深さは 17 cm である。形態・位置から貯蔵穴と考えられる。周溝は検出された範囲全域で確認された。上端幅 10 ～ 15 cm、深さ 5 cm である。遺構内堆積土は 5 層に分けられる。①～④層は住居内堆積土、⑤は掘形埋土である。本遺構からは多数の土器片が出土しており、そのうち甕 1 点、小型甕 3 点、高坏 3 点、埴 2 点、坏 3 点を図示した。

本遺構は、南西隅部のみ検出されたものであるが、床面の状況、周溝が確認されたことなどから竪穴住居跡と考えられる。所属時期は出土遺物から古墳時代中期と考えられ、古墳時代中期でも第 218 号住居跡に先行するものである。

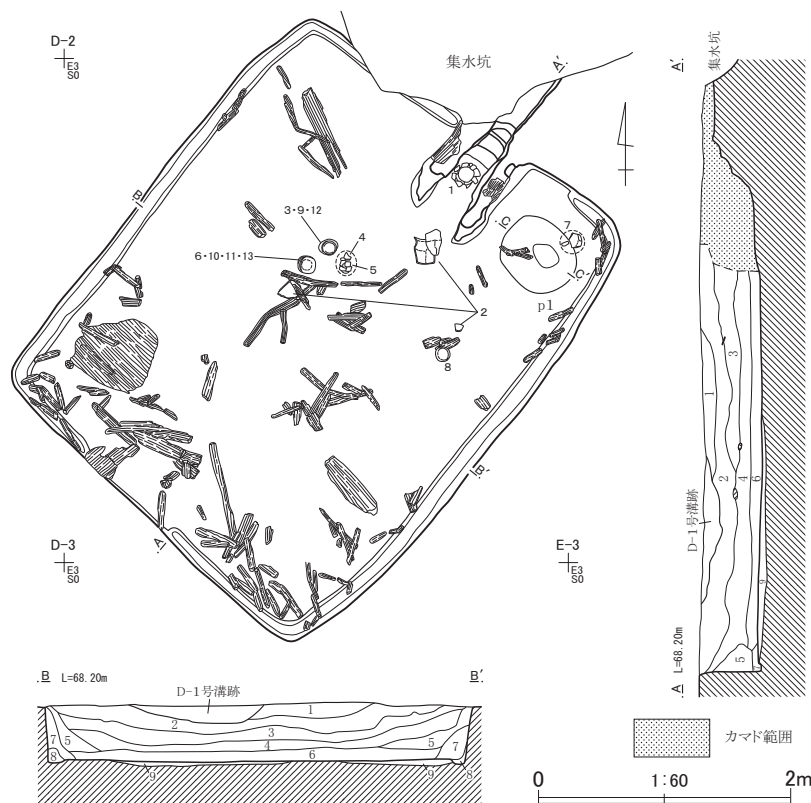
第 220 号住居跡（第 7・8 図、写真図版 2）

本遺構は、調査区北部の D 2・3、E 2・3 グリッドに位置する。集水坑によって北壁とカマド煙道の一部が壊されている。第 221 号住居跡と D-1 号溝跡と重複しており、本遺構は D-1 号溝跡より古く、第 221 号住居跡よりも新しい。平面形態は、隅丸方形を呈するが、東壁が西壁よりもわずかに長く、台形状である。床面幅は、4.05 × 3.06 m、長軸方向は N 39° E、検出面から床面までの深さは 44 cm である。床面は概ね平坦であるが、中央部が若干低くなっている。住居内施設は、カマド 1 基、小穴 1 個（p 1）、周溝が確認された。カマドは住居跡北壁のほぼ中央部に位置し、方向は N 38° E である。焚口幅は 31 cm、奥行きは 67 cm を測る。煙道部は、幅 [17] cm、長さ [55] cm である。崩落した天井部以外は上部表面が赤変しており、一部は構築もしくは改修時の工具痕が明瞭に残るほど焼き締まっていた。カマド内は甕が据えられた状態であった。p 1 は、カマドの右側、住居跡北東隅部に位置し、上端幅 61 × 54 cm の楕円形を呈する。断面は逆台形で、床面からの深さは 38 cm を測る。中位に炭化材が堆積しており、そこを境に下部が小穴内堆積土、上部が住居内堆積土に分かれている。位置・形態から貯蔵穴と考えられる。周溝はカマド右側と住居跡南壁の中央部を除いた部分で検出された。上端幅 10 ～ 18 cm、深さ 5 cm である。遺構内堆積土は 9 層に分けられる。1 ～ 8 層は住居内堆積土である。3 層から下層で炭化物・焼土が放射状に多く見られるが、床面や壁面で焼けた痕跡が確認されていないこと、貯蔵穴の中層に炭化物が堆積していることから、使われなくなってからある程度の時間が経過してから、もしくは土砂が堆積してから、焼失したものと考えられる。9 層は掘形埋土である。本遺構からは、多量の土器片が出土しており、そのうち甕 2 点、鉢 2 点、坏 10 点を図示した。

本遺構は、北壁にカマドを持つ竪穴住居跡である。検出された多量の炭化材は埋没途中に上屋構造が焼失したものであると考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

第 221 号住居跡（第 9 図、写真図版 3）

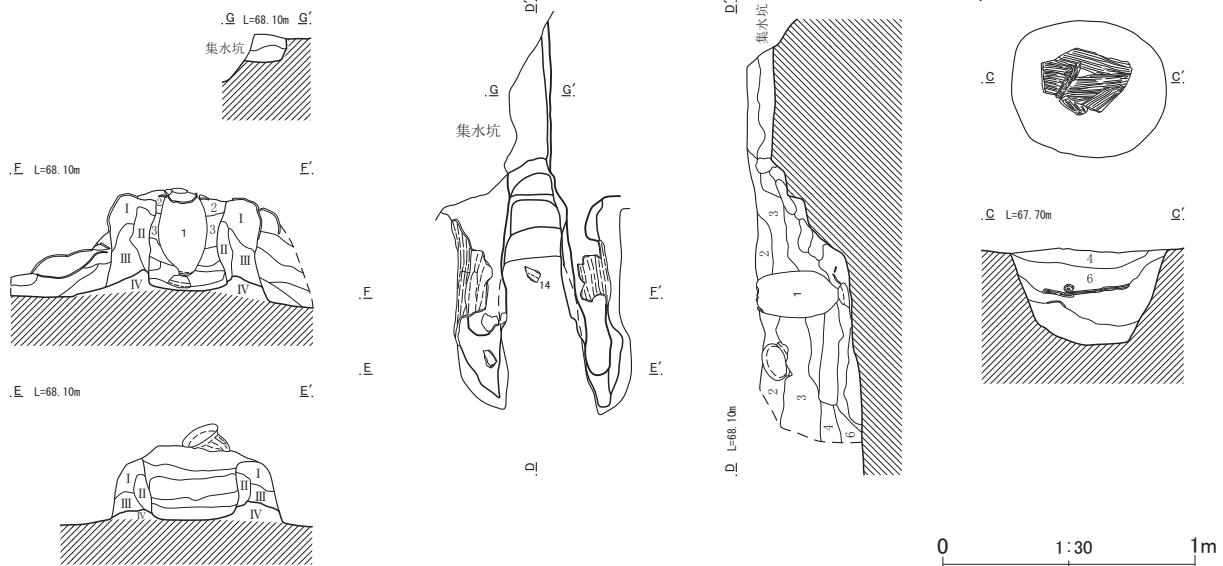
本遺構は、調査区北部の E 2・3、F 2 グリッドに位置する。第 220 号住居跡・D-1 号溝跡・大溝跡と重複しており、本遺構が一番古い。平面形態は南東側が大溝跡に切られ、東隅部は調査区外に延びているため明確ではないが、隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は 6.41 × [3.25] m、西壁方向は N 55° E、検出面から床面までの深さは 14 cm である。床面は概ね平坦であるが、中央部に向かって若干傾斜している。住居内施設は小穴 2 個（p 1・2）が確認された。p 1 は直径約 26 cm の円形を呈し、深さ 25 cm である。p 2 は直径約 25 cm の円形を呈し、深さ 5 cm である。位置から柱穴と考えられる。遺構内堆積土は 1 層のみである。本遺



第220号住居跡

- 1 黄褐色土 マンガンを若干含む。粘性は弱く、しまりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・マンガンが凝集。焼土ブロック多く含む。粘性は弱く、しまりあり。
- 3 黄褐色土 暗褐色土に粘性に富む黄褐色土が充填。炭化物粒・焼土ブロック大量含む。粘性に富み、しまりあり。
- 4 暗灰褐色土 炭化物粒・黄褐色土ブロック多量含む。粘性は弱く、しまりあり。
- 5 黄褐色土 炭化物・焼土ブロック含む。粘性に富み、しまりあり。壁の崩落土か？

カマド跡

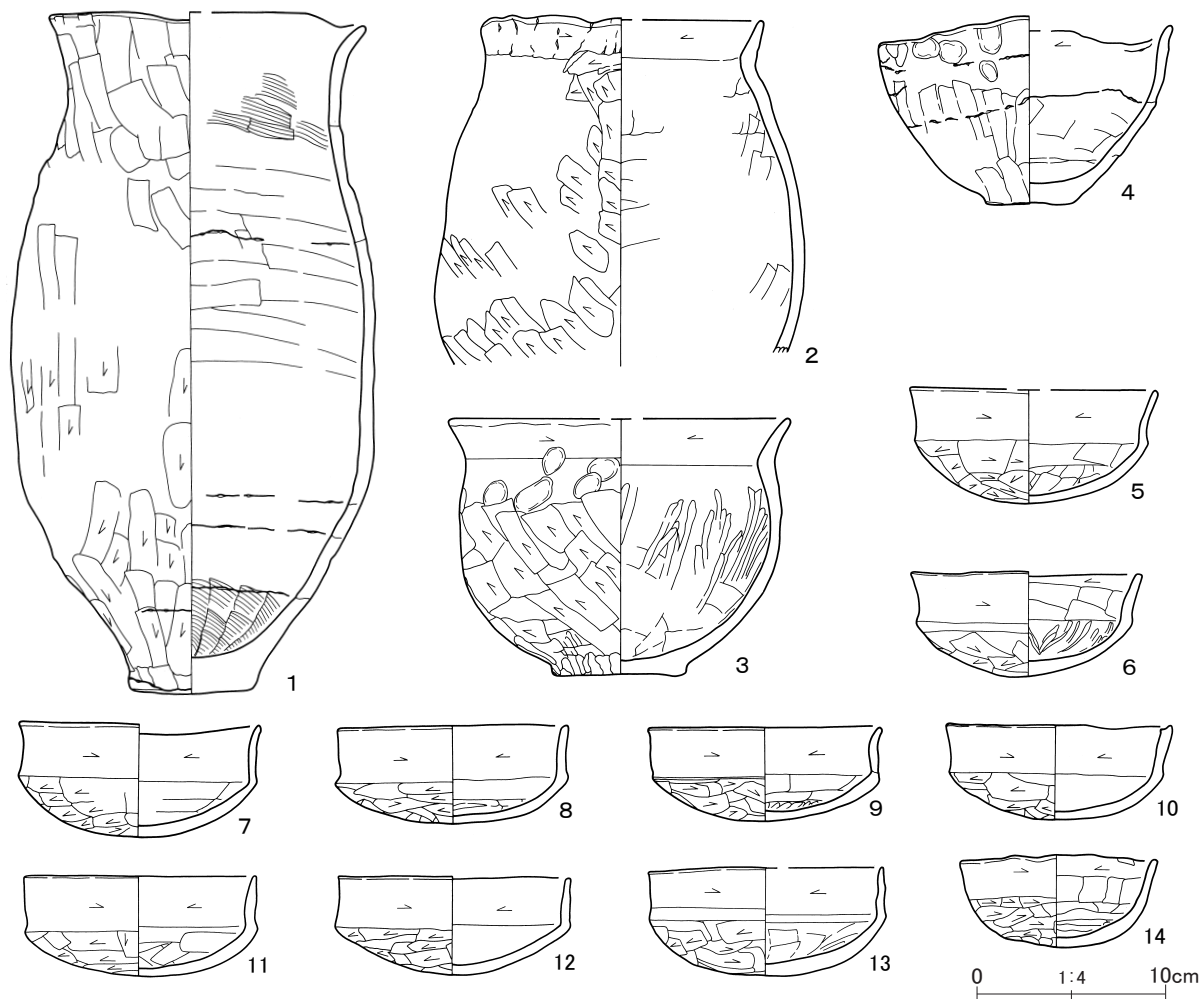


第220号住居跡 カマド跡

- I 暗黄灰色土 鉄分・マンガン・焼土粒含む。表面が赤変する。粘性は弱く、しまりあり。
- II 赤褐色土 酸化反応が著しい。一部で還元反応も見られる。
- III 暗黄褐色土 鉄分・マンガン・焼土粒含む。ローム粒多量含む黄色味強い。粘性は弱く、しまりあり。
- IV 暗黄灰色土 鉄分・マンガン・焼土粒含む。黒褐色土少量含む。粘性はなく、しまりあり。

※2～4・6は住居跡覆土と対応。

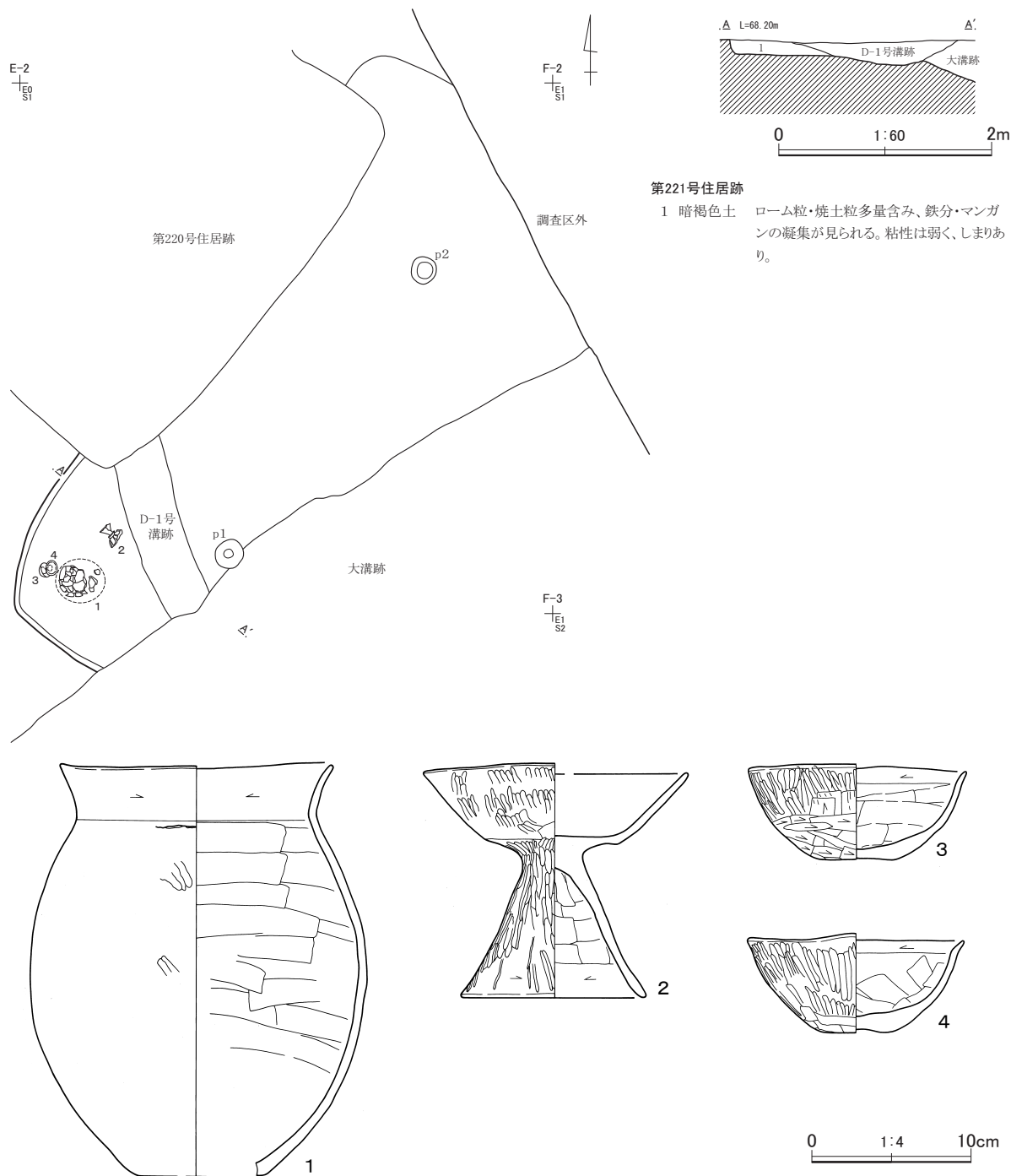
第 7 図 第220号住居跡



第 8 図 第220号住居跡出土遺物

第 220 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 □: 遺存値	口径	底径	器高				
1	土師器 甕	カマド 覆土	16.6	6.2	36.2	粗	良好	明褐色	最大径を胴中部にもつやや下膨れの器形 外面：口縁へ胴上部ヘラナデ 胴下へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ 胴部ヘラケズリ 底部ハケメ	ほぼ完存
2	土師器 甕	覆土	14.5	—	[17.6]	緻密	良	にぶい 橙色	外面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴中部ヘラケズリ後ナデ	口縁へ胴中部 4/5
3	土師器 鉢	覆土	15.4	4.6	9.8	やや粗	良好	明褐色 黒斑	外面：口縁へ頸部ヨコナデ、頸部指頭圧痕 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸へ体上部ヘラナデ後ヘラミガキ 体下へ底部ヘラナデ	口縁部 1/4 体上部 3/4 体下へ底部完存
4	土師器 鉢	覆土	(17.7)	6.3	13.6	やや粗	良	橙色	上面から見た形態は楕円形に歪み口縁部は波状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁へ底部ヘラナデ	ほぼ完存
5	土師器 杯	覆土	(12.9)	—	6.0	緻密	良好	橙色 黒斑	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラナデ	口縁部 2/3 体部完存
6	土師器 杯	覆土	11.0	—	5.4	やや粗	良	にぶい 橙色 黒斑	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁へ体上部ヨコナデ 体下へ底部ヘラミガキ	完存
7	土師器 杯	覆土	12.7	—	5.9	やや粗	良	橙色 黒斑	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラナデ	ほぼ完存
8	土師器 杯	覆土	12.1	—	5.2	緻密	良	橙色 にぶい 黄橙色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁へ体上部ヨコナデ 体下へ底部ヘラナデ	完存
9	土師器 杯	覆土	12.2	—	5.0	緻密	良好	明褐色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラミガキ	口縁部 2/3 体部完存
10	土師器 杯	覆土	11.8	—	4.9	緻密	良	橙色 明褐色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁へ底部ヨコナデ	ほぼ完存
11	土師器 杯	覆土	12.1	—	5.2	緻密	良好	橙色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は直立する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラナデ	ほぼ完存
12	土師器 杯	覆土	12.2	—	5.3	緻密	良好	褐色 橙色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は直立する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁へ体部ヨコナデ 底部ヘラナデ	ほぼ完存
13	土師器 杯	覆土	(12.3)	—	5.6	緻密	良好	明褐色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は直立する 外面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体へ底部ヘラナデ	口縁部 3/4 体部完存
14	土師器 杯	カマド 覆土	10.2	—	4.7	やや粗	良好	明黄褐色	外面：口縁へ体上部ヨコナデ 体下へ底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下へ底部ヘラミガキ	ほぼ完存



第221号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量含み、鉄分・マンガンの凝集が見られる。粘性は弱く、しりりあり。

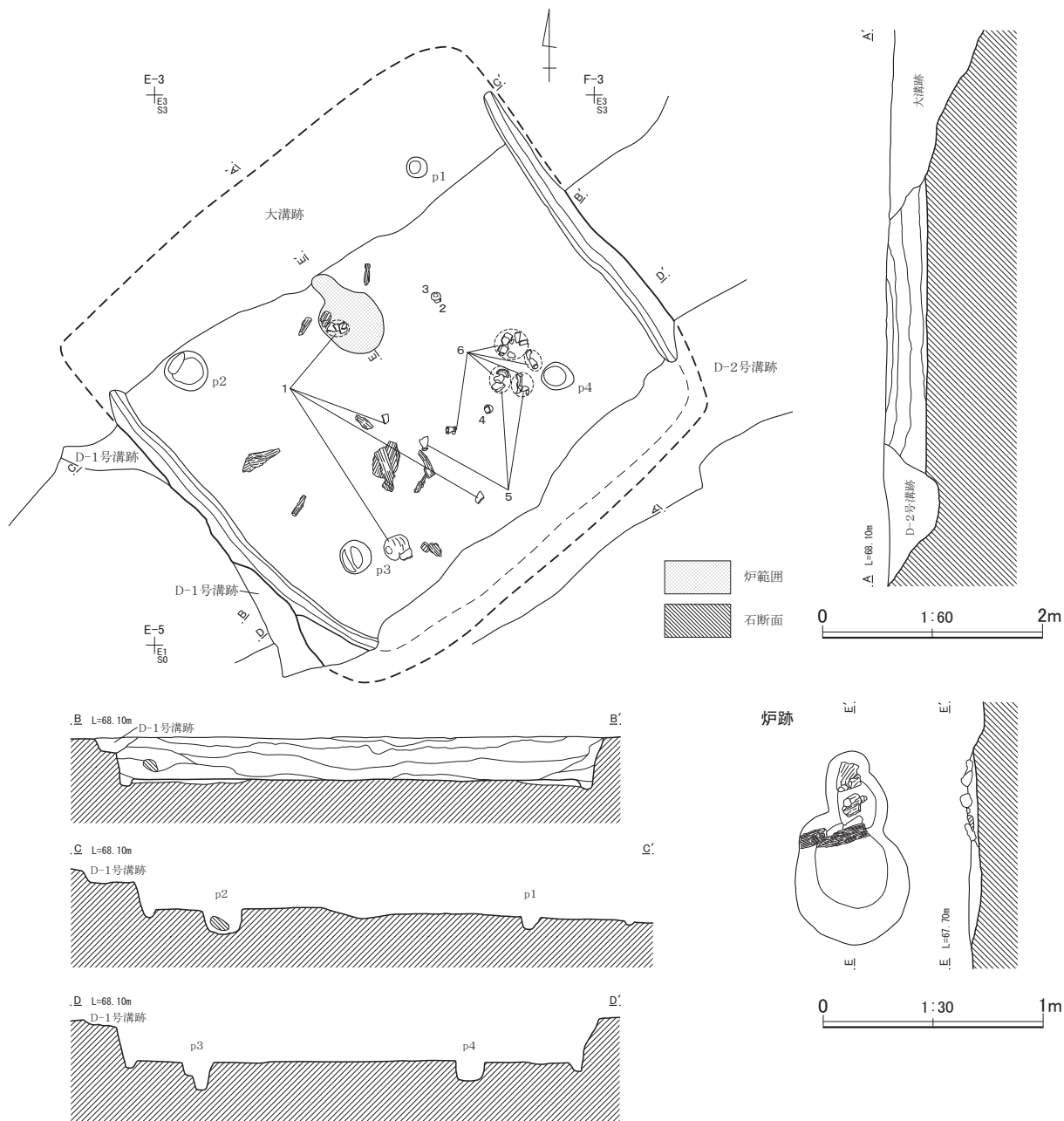
第 9 図 第221号住居跡、第221号住居跡出土遺物

第 221 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 [] : 遺存値	口径	底径	器高				
1	土師器 甕	床直	(16.8)	8.9	25.8	やや粗	良	橙色 黒斑	胴中部に最大径を持つ球形状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 胴部磨滅激しいがヘラケズリか 内面：口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	口縁～胴中部 1/2 胴下部ほぼ完存
2	土師器 高坏	床直	16.4	11.3	14.7	緻密	良	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラミガキ 脚～裾部ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：坏部磨滅激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	坏部 1/2 脚～裾部ほぼ完存
3	土師器 坏	床直	13.5	4.6	5.9	やや粗	良	橙色 黒斑	口縁端部がわずかに外反する 外面：口縁～体上部ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
4	土師器 坏	床直	13.4	3.8	6.2	やや粗	良好	橙色 黒斑	口縁端部がわずかに外反する 外面：口縁～体部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	完存

構からは多量の土器片が出土し、北西隅部で比較的遺存状況の良いものが出土している。そのうち甕 1 点、高坏 1 点、坏 2 点を図示した。

本遺構は、北西部のみ検出されたものであるが、床面の状況などから竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、

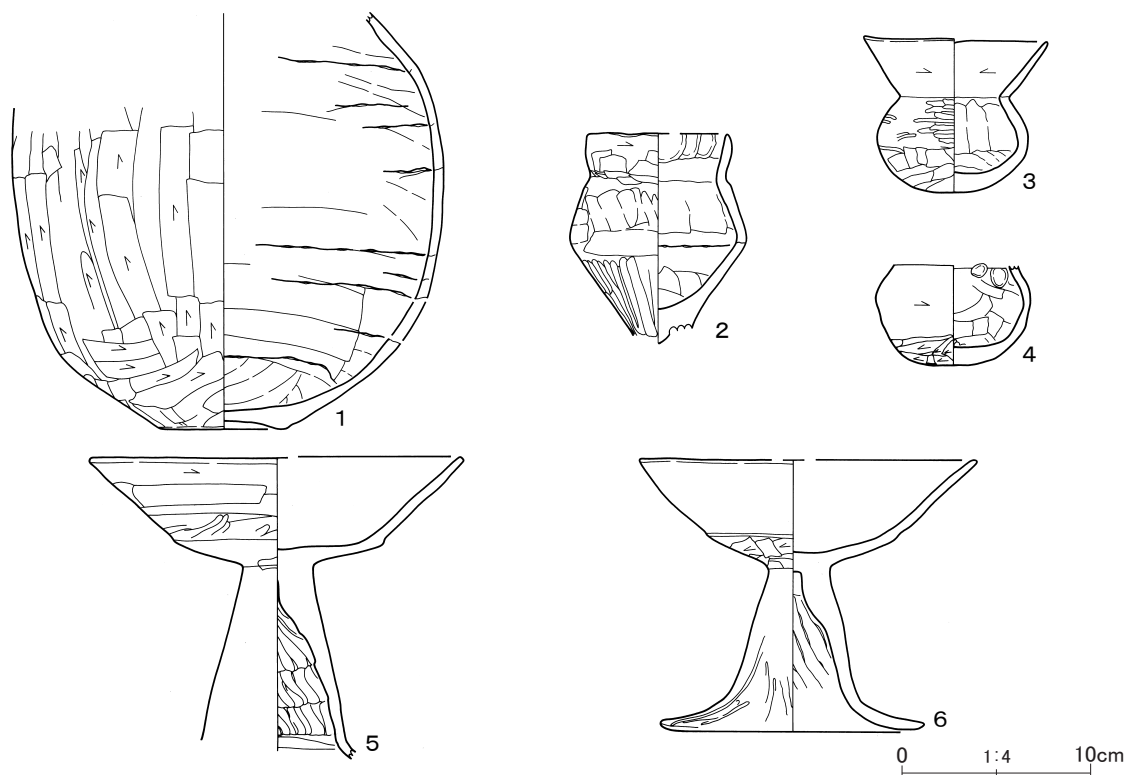


第 10 図 第222号住居跡

出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第 222 号住居跡（第 10・11 図、写真図版 3）

本遺構は、調査区北部の E 4、F 3・4 グリッドに位置する。D－1・2 号溝跡、大溝跡と重複しており、本遺構は D－1・2 号溝跡・大溝跡より古い。北西壁を大溝跡に、南東壁を D－2 号溝跡に切られており、その間部分のみが残存しているため平面形態は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。床面幅は 4.16 × [3.15] m、西壁方向は N 40° W、検出面から床面までの深さは 45 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、炉跡 1 基、小穴 4 個（p 1～4）、周溝が確認された。炉跡は床面中央よりやや北西の位置にある。平面形態は 62 × 51 cm の楕円形で、北西部に幅 26 cm、長さ 29 cm の張り出し部を有する。床面からの深さは 4 cm である。p 1 は北隅部に位置し、大溝跡によって上面が削られている。直径約 20 cm の円形を呈し、深さは 11 cm である。p 2 は西隅部に位置し、直径約 40 cm の円形を呈する。床面からの深さは 23 cm である。p



第 11 図 第222号住居跡出土遺物

第 222 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			口 径	底 径	器 高					
1	土師器 甕	床直	—	6.4	[22.0]	やや粗	良好	橙色 黒斑	外面：胴中～底部ヘラケズリ 内面：胴中～底部ヘラナデ	胴中部 1/2 胴下～底部完存
2	土師器 小型台付甕	覆土	(7.3)	—	[11.2]	やや粗	良好	にぶい 褐色	胴中位に最大径をもち算盤玉状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 頸～胴上部 ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ 内面：口縁部指頭圧痕 胴部ヘラナデ	口縁～胴上部 1/3 胴下部ほぼ完存
3	土師器 埴	覆土	9.6	1.6	8.1	やや粗	良	橙色 黒斑	体部は中位に最大径をもつ球形で、口縁部高より長い 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
4	土師器 埴	覆土	—	2.1	[5.2]	緻密	良好	明赤褐色 黒斑	外面：体部ヨコナデ 底部ヘラケズリ 内面：灰色 頸部指頭圧痕 体～底部ヘラナデ	体～底部完存
5	土師器 高坏	覆土	19.5	—	[16.0]	緻密	良好	明褐色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ後ヘラミガキ 坏下～脚部磨減激しく調整不明 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚部紋り痕・ヘラナデ	坏部 2/3 脚部完存
6	土師器 高坏	覆土	(19.4)	12.2	14.4	やや粗	良	橙色	外面：坏上部磨減激しく調整不明 坏下部ヘラケズリ 脚～裾部ヘラミガキ 内面：坏部磨減激しく調整不明 脚上部紋り痕 脚下～裾部ナデ	坏部 2/3 脚～裾部ほぼ完存

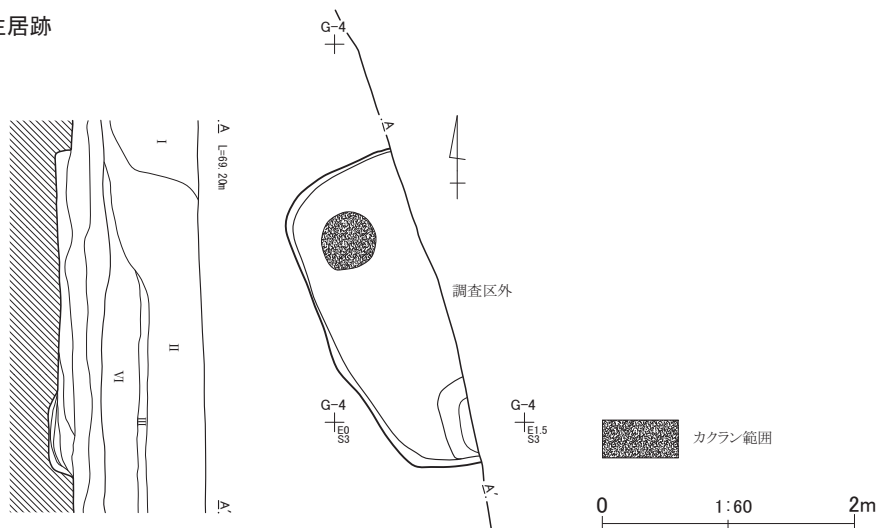
3は南隅部に位置し、直径約46cmの円形を呈する。床面からの深さは25cmで、西側にテラスを有する。p 4は東隅部に位置し、直径約26cmの不正円形を呈する。床面からの深さは18cmである。これらの小穴は、位置から柱穴と考えられる。周溝は、残存する部分全域で確認された。幅は12～26cm、床面からの深さは6cmである。遺構内堆積土は12層に分けられるが、詳細は不明である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち甕1点、小型台付甕1点、埴2点、高坏2点を図示した。

本遺構は、北東壁・南西壁のみであるが、炉跡の存在・床面の状況などから竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、炉跡があることおよび出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

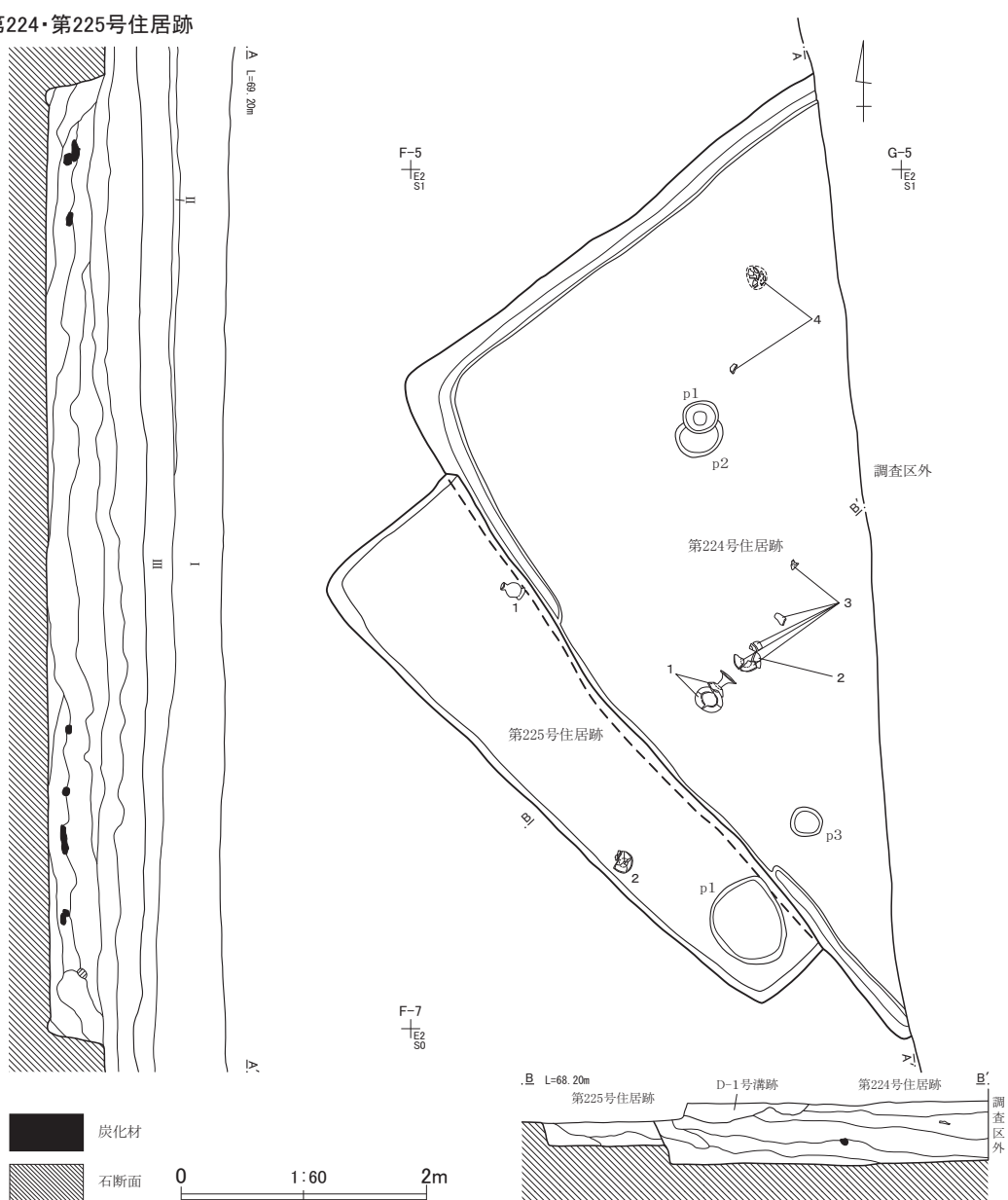
第 223 号住居跡 (第 12 図)

本遺構は、調査区北東部のG 4グリッドに位置する。西側約3分の1が検出され、東側約3分の2は調査区外に延びる。D-2号溝跡と重複しており、本遺構のほうが新しいと考えられる。大半が調査区外にあるため明確ではないが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は[2.49]×[1.15]m、西壁方向はN 28° W、検出面から床面までの深さは13cmである。床面は概ね平坦であるが、中央部がわずかに高い。住居内施設は、南壁の西寄りのところに落ち込みが見られる。大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。上端幅64×[26]cm、床面からの深さは9cmである。遺構内堆積土は7層に分

第223号住居跡

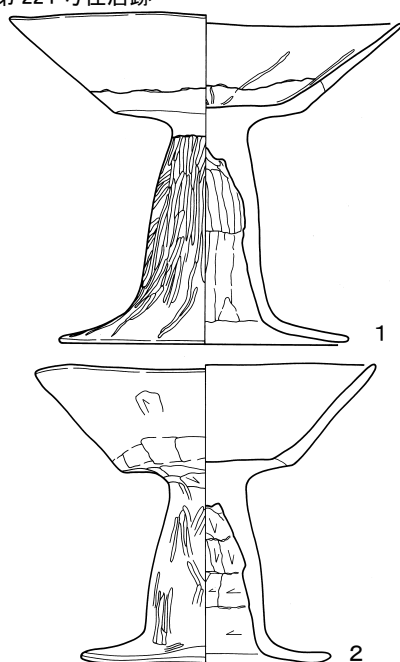


第224・第225号住居跡

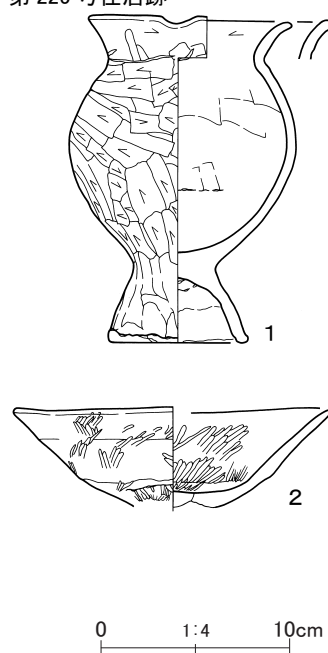


第 12 図 第223号住居跡、第224・第225号住居跡

第 224 号住居跡



第 225 号住居跡



第 13 図 第224・第225号住居跡出土遺物

第 224 号住居跡出土遺物観察表

番号			種別・器種			出土位置			法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
〇: 推定値 □: 遺存値																
口径			底径			器高										
1	土師器	高杯	覆土	20.5	15.2	17.6	やや粗	良	橙色 黒斑	外面: 坏部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ後2条ないし1条単位のヘラミガキ 内面: 坏部放射状ヘラミガキ 脚上部絞り痕 脚下部ヘラナデ 裾部ヨコナデ						ほぼ完存
2	土師器	高杯	覆土	17.8	13.2	16.0	やや粗	良	橙色	外面: 口縁部ヨコナデ 坏上部ヘラナデ 坏下部ヘラケズリ 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面: 坏部磨減激しく調整不明 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ						ほぼ完存
3	土師器	高杯	覆土	20.2	13.0	17.9	やや粗	良	橙色 明褐色	外面: 坏部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ後一部ヘラミガキ 内面: 坏部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下部ヘラナデ						ほぼ完存
4	土師器	埴	覆土	8.9	—	8.4	やや粗	良	にぶい 褐色	体部は中位に最大径をもつ扁平な球形で、口縁部高より長い 外面: 口縁部ヘラミガキ 体上部磨減激しく調整不明 体下部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体底部ヘラナデ						ほぼ完存

第 225 号住居跡出土遺物観察表

			法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
番号	種別・器種	出土位置	〇: 推定値 □: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 小型台付甕	床直	10.4	7.0	17.2	やや粗	良	橙色 明褐色	口縁部は1箇所がわずかに窪み片口状を呈する 外面: 口縁部ヨコナデ 頸部ヘラケズリ 台部ヘラナデ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 台部ナデ	完存
2	土師器 高杯	覆土	16.6	—	[5.3]	やや粗	良	明赤褐色	外面: 口縁部ナデ後ヘラミガキ 坏部ヘラナデ後ヘラミガキ 内面: ナデ後ヘラミガキ 外内面ともに磨減激しく不明瞭	口縁部 3/4 坏部完存

けられる。堆積状況は、南壁際の落ち込み部分も同時に埋没していることから、住居跡使用時にこの落ち込みが存在していたと考えられるが、詳細は不明である。本遺構からは少量の土器片が出土したが、図示し得るものはなかった。

本遺構は、西側約3分の1のみであるが、形態の特徴から堅穴住居跡と考えられる。時期を判断できる遺物が出土していないため、所属時期は不明である。

第 224 号住居跡 (第 12・13 図、写真図版 3)

本遺構は、調査区東部の F 5・6、G 5・6 グリッドに位置する。第 225 号住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。北西壁の西側約半分と南西壁を検出し、その他は調査区外にある。平面形態は、大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [6.31] × [4.42] m、南西壁方向は N 36° W、検出面から床面までの深さは 47 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 3 個 (p 1～3)、周溝が確認された。p 1・2 は住居跡北西部に重複しており、p 1 のほうが新しい。p 1 は、30 × 25 cm の不正円形を呈し、床面からの深さは 63 cm である。p 2 は 40 × 33 cm の楕円形を呈し、床面から

の深さは3 cmである。位置・深さから p 1 は柱穴と考えられる。p 3 は南西壁際の南寄りに位置する。直径約 25 cm の不正円形を呈し、床面からの深さは 19 cm である。周溝は、南西壁の中央部を除く部分で確認された。幅 11 ～ 34 cm で西隅部の周溝幅が広くなっており、深さは 5 ～ 6 cm である。遺構内堆積土は 8 層に分けられるが、詳細は不明である。下層からは多量の炭化材が出土し、堆積状況はレンズ状堆積を呈している。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち高坏 3 点、埴 1 点を図示した。

本遺構は、大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、形態の特徴から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代後期と思われる。

第 225 号住居跡（第 12・13 図、写真図版 3）

本遺構は、調査区東部の F 5・6、G 6 グリッドに位置する。第 224 号住居跡と重複しており、本遺構のほうが古い。南西側約 5 分の 1 が確認され、北東側は第 224 号住居跡によって壊されている。平面形態は、大半の部分が壊されているため不明であるが、残存する部分から隅丸方形を呈すると考えられる。床面幅は 4.81 × [1.39] m、西壁方向は N 46° W、検出面から床面までの深さは 18 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 1 個（p 1）が確認された。p 1 は、南隅部に位置する。72 × 60 cm の不正楕円形を呈し、床面からの深さは 26 cm である。断面は、壁面がほぼ垂直に立ち上がり中央部が低い皿状を呈する。位置・形態から貯蔵穴と考えられる。遺構内堆積土は 3 層に分けられるが、詳細は不明である。外側から埋没するレンズ状堆積の様相を呈する。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち小型台付甕 1 点、高坏 1 点を図示した。

本遺構は、大半を第 224 号住居跡に壊されているため全容は不明であるが、形態の特徴から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物および第 224 号住居跡に壊されていることから、古墳時代中期と思われる。

第 226 号住居跡（第 14・15 図、写真図版 3）

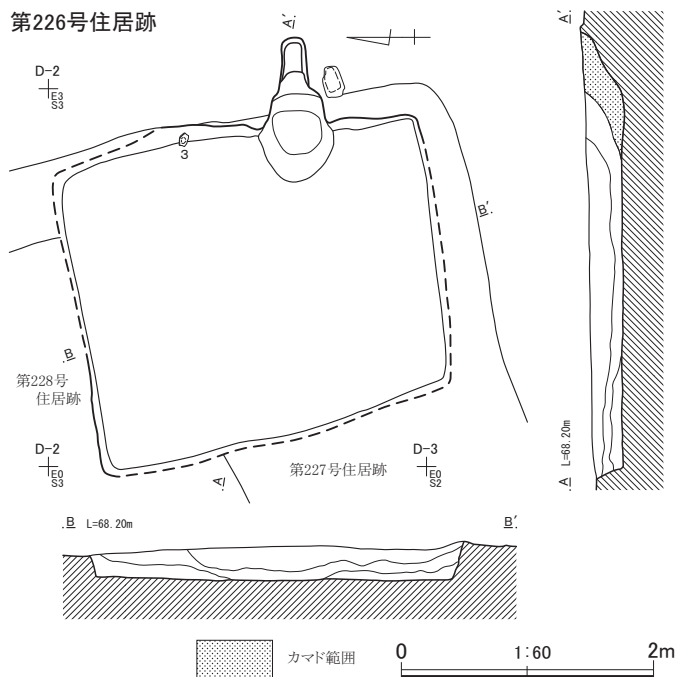
本遺構は、調査区北部の D 2・3 グリッドに位置する。第 227・228 号住居跡と重複している。第 227 号住居跡の精査中に確認したもので、本遺構が一番新しい。平面形態は、南壁が北壁よりも短い不正な隅丸長方形を呈する。床面幅は 2.88 × 2.42 m、長軸方向は N 12° W、検出面から床面までの深さは 31 cm である。床面は概ね平坦であるが、南側へわずかに傾斜している。住居内施設は、カマド 1 基が確認された。カマドは東壁の中央やや南寄りに造られており、燃烧部が竪穴の外部に出る形態である。方向は N 89° E、燃烧部幅 42 cm、奥行き 71 cm である。煙道部は幅 23 cm、奥行き 44 cm で、急角度で立ち上がる。燃烧部壁面と煙道端部で、被熱による変色を確認された。遺構内堆積土は 5 層に分けられるが、詳細は不明である。レンズ状堆積を呈していることから自然堆積土と考えられる。カマド内堆積土は 10 層に分けられるが、詳細は不明である。最下層は掘形埋土と思われる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち片口鉢 1 点、羽釜 1 点、高台付坏 2 点、丸瓦 1 点を図示した。

本遺構は、東壁にカマドを持つ竪穴住居跡である。所属時期は、出土遺物およびカマドの形態から平安時代と思われる。

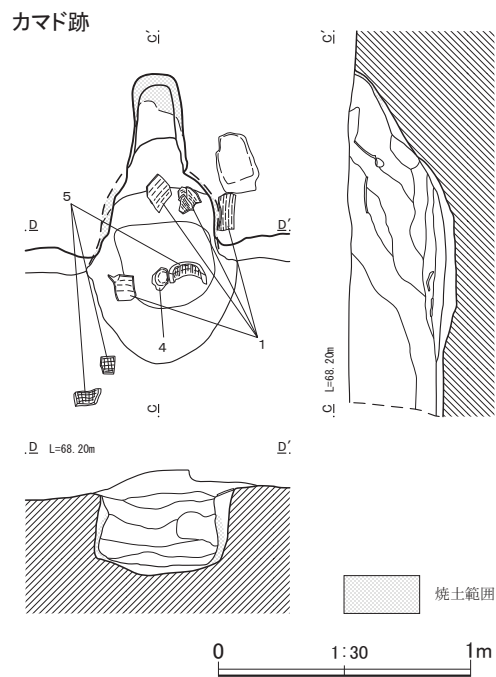
第 227 号住居跡（第 14・15 図、写真図版 4）

本遺構は、調査区北部の C 3、D 2・3 グリッドに位置する。第 226・228 ～ 230 号住居跡と重複しており、本遺構は第 226・228 号住居跡より古く、第 229・230 号住居跡よりも新しい。北半分の大半を第 228 号住居跡に壊されているため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は、5.18 × 5.10 m、東壁方向が N 13° W、検出面から床面までの深さは 50 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 1 個（p 1）が確認された。p 1 は南西隅部に位置し、上端幅 80 × 76 cm の不正隅丸方形を呈する。床面からの深さは 35 cm である。位置・形態から貯蔵穴と考えられる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、

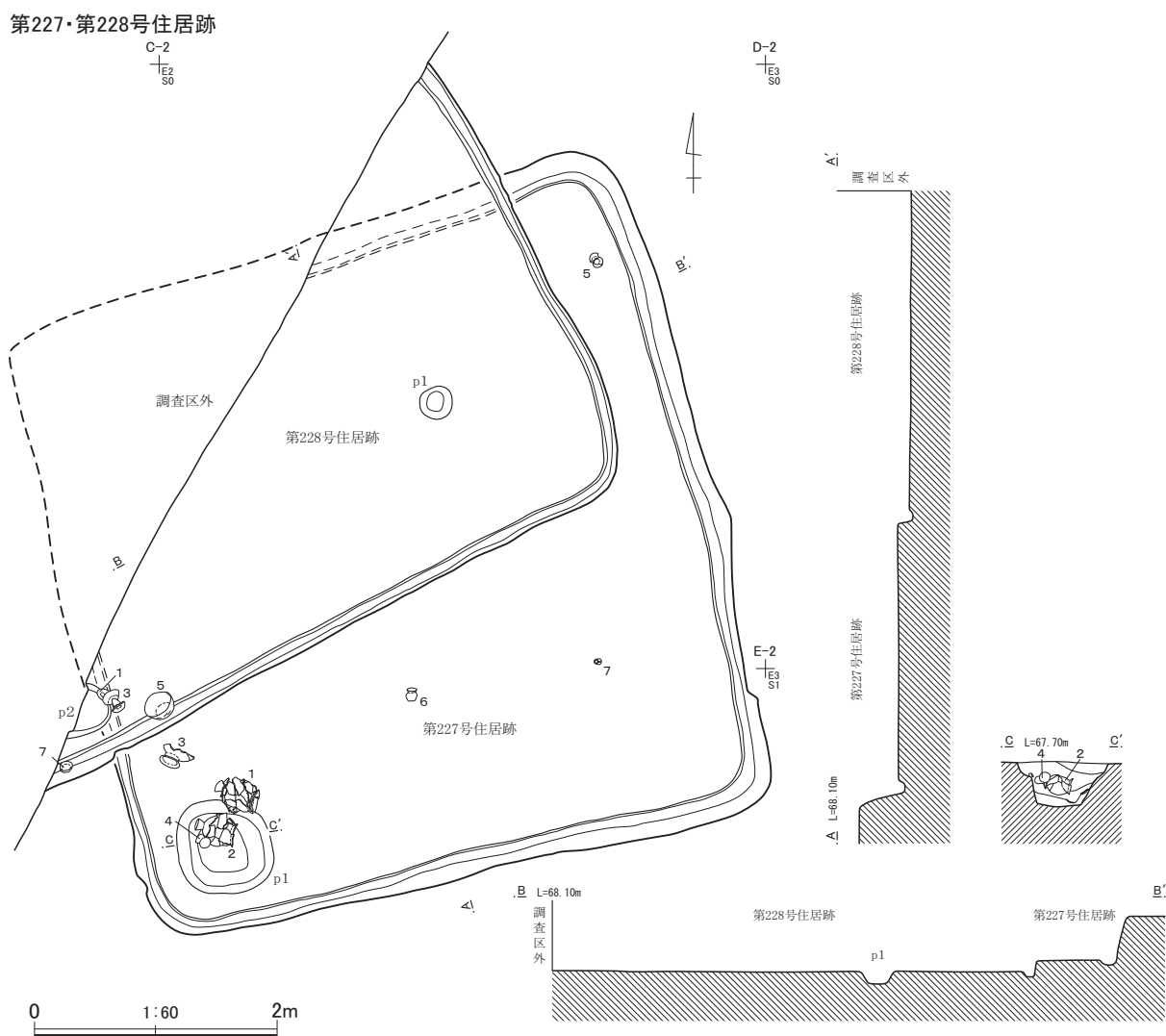
第226号住居跡



カマド跡

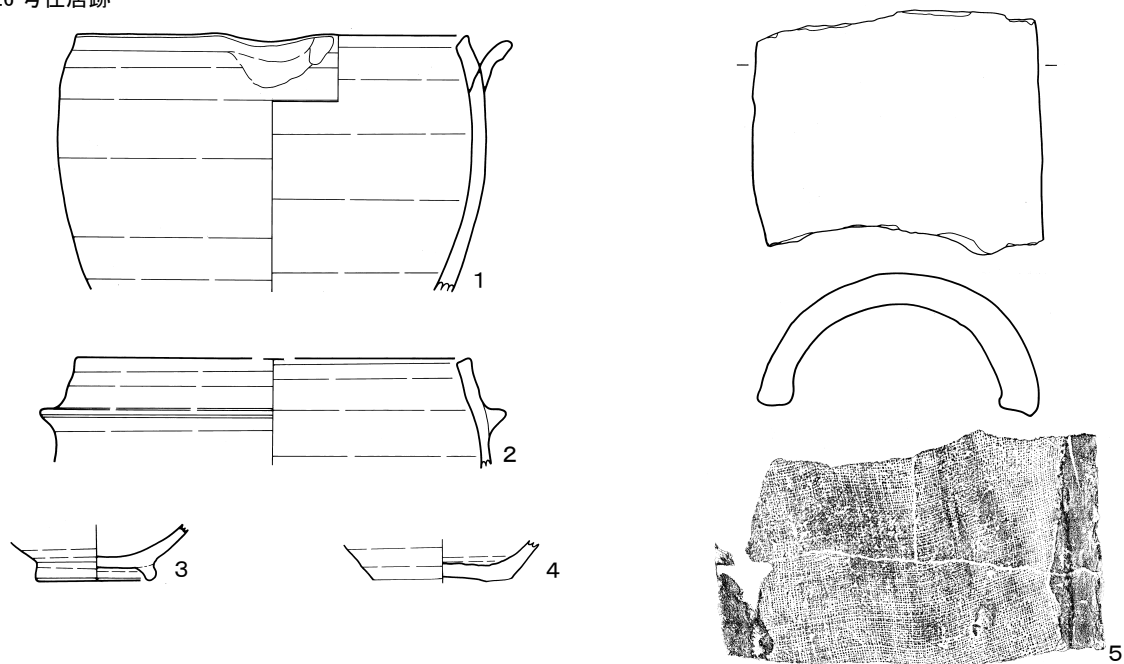


第227・第228号住居跡

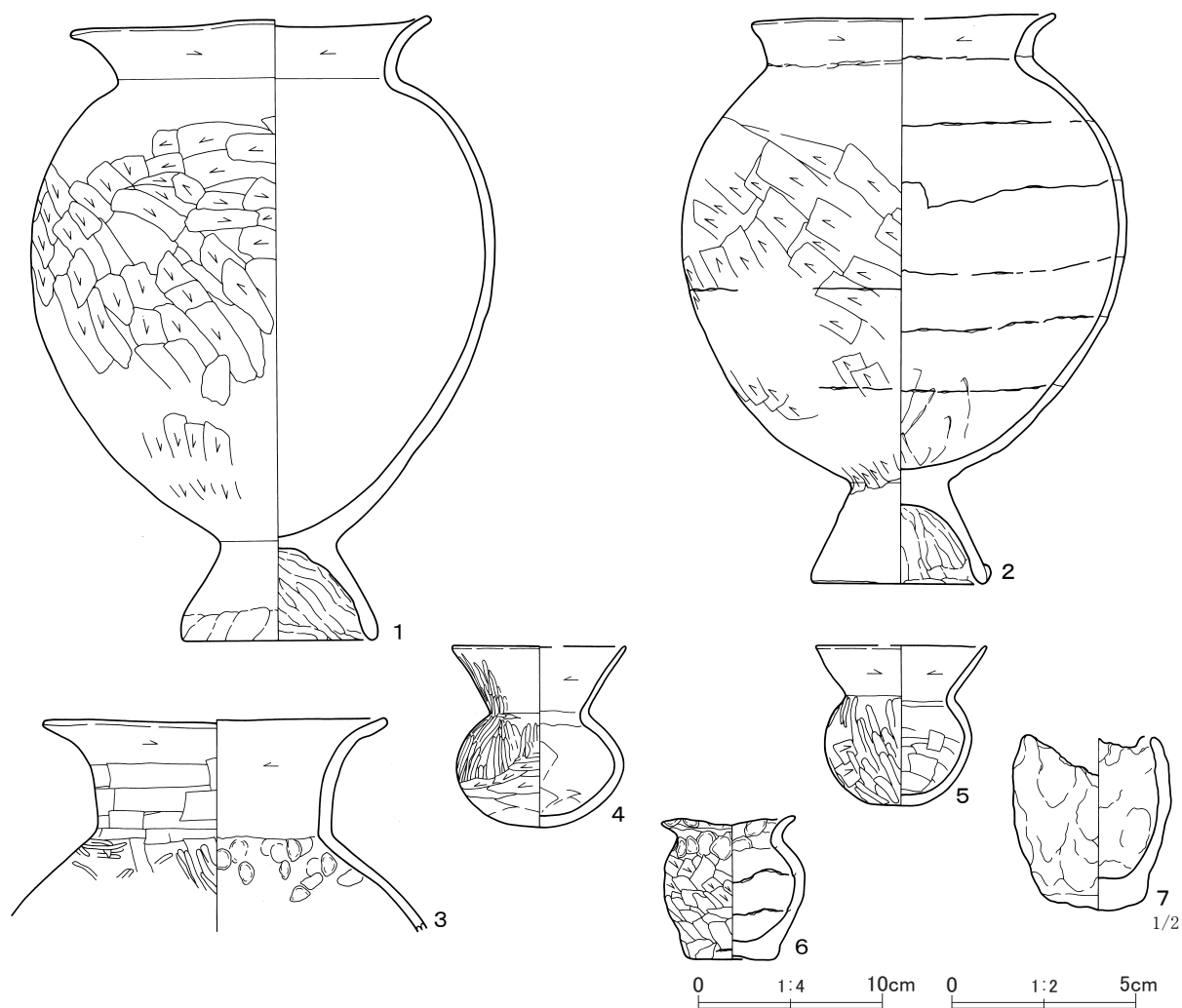


第 14 図 第226号住居跡、第227・第228号住居跡

第 226 号住居跡



第 227 号住居跡



第 15 図 第226・第227号住居跡出土遺物

第 226 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	器 形、成・整形、文様等の特徴	遺 存 状 況	
			○：推定値 □：遺存値	口 径	底 径						器 高
1	土師器 片口鉢	カマド 覆土	(20.7)	—	[13.4]	やや粗	良	灰色	口唇部内面を面取りし、口縁の一部を摘み出して注ぎ口を形成 外内面：ロクロナデ	口縁～体中部 1/4	
2	土師器 羽釜	カマド 覆土	(20.8)	—	[5.8]	緻密	良好	褐灰色	口唇部面取り 外内面：ロクロナデ	口縁部片	
3	須恵器 高台付坏	覆土	—	5.9	[2.8]	やや粗	酸化焰 焼成	灰色	外面：ロクロナデ 底部回転糸切り後高台部貼付 内面：ヘラナデ	体下～高台部 完存	
4	須恵器 高台付坏	カマド 覆土	—	—	[2.2]	やや粗	酸化焰 焼成	明黄褐色	外面：坏部ロクロナデ 底部ヘラ切り後高台部貼付 内面：坏部ロクロナデ 底部棒状工具による回転ナデ	底部 1/2 高台部剥落	
番号	種 別	出土位置	法 量 ()：推定値 []：遺存値				胎 土	焼 成	色 調	器 形、成・整形、文様等の特徴	遺 存 状 況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
5	丸瓦	カマド 覆土	[12.8]	15.3	2.0	[735.6]	緻密	良好	灰黄褐色	外面：ヘラケズリ 内面：布目痕	1/3 ?

第 227 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			○：推定値 □：遺存値	口径	底径	器高				
1	土師器 台付甕	床直	19.3	10.4	33.8	やや粗	良好	明黄褐色	外面：口縁～頸部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 台上部ナデ 台端部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ナデ 台部ヘラナデ	ほぼ完存
2	土師器 台付甕	p 1 覆土	16.1	9.1	30.9	緻密	良好	明褐色	外面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 台部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ・ナデ 台部ヘラナデ	ほぼ完存
3	土師器 壺	床直	18.2	—	[11.7]	やや粗	良	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 胴上部ヘラナデ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 胴上部ヘラナデ	口縁～頸部完存 胴上部 1/2
4	土師器 埴	p 1 覆土	9.2	—	9.8	やや粗	良	明黄褐色	体部は中位に最大径をもち扁平な球形を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 頸～体中部ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	口縁部一部欠損
5	土師器 埴	床直	9.1	—	8.7	やや粗	良	明黄褐色	体部は中位に最大径をもち球形を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 体～ 底部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	口縁部一部欠損
6	土師器 小型甕	床直	7.3	4.7	7.8	やや粗	良	橙色	口縁部と底部の中心が異なる歪な器形で、端部を外側に摘み出し口縁部を成形 外面：口縁～頸部指頭圧痕 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁～頸部指頭圧痕 体～底部ナデ・輪積み痕顕著	完存
7	ミニチュア 土器	床直	3.4	—	4.7	やや粗	良好	明赤褐色	手捏ね成形。外面は部分的にヘラによる整形を行なう。器形は鉢形に近い。	ほぼ完存

そのうち台付甕 2 点、甕 1 点、埴 2 点、小型壺 1 点、ミニチュア土器 1 点を図示した。

本遺構は、北半分の大半が壊されているため全容は不明であるが、形態・床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土した遺物から古墳時代中期と思われる。

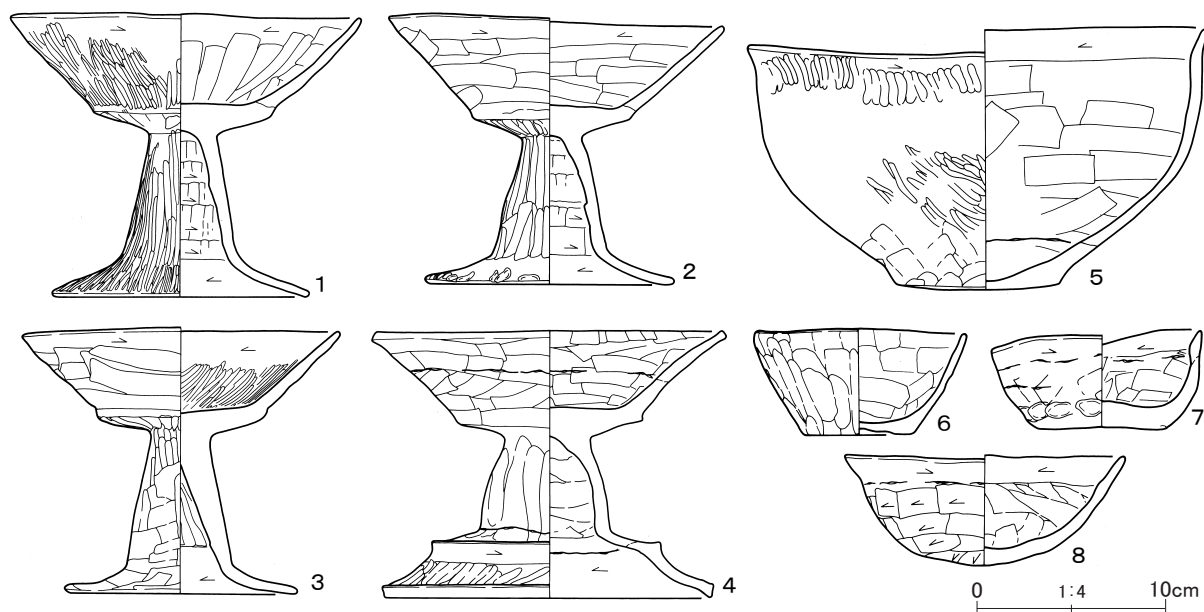
第 228 号住居跡（第 14・16 図、写真図版 3・4）

本遺構は、調査区北部の C 2・3、D 2・3 グリッドに位置する。第 226・227 号住居跡と重複しており、本遺構は第 226 号住居跡より古く、第 227 号住居跡よりも新しい。南東部約 3 分の 1 が確認され、残りの北西部約 3 分の 2 は調査区外にある。大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [5.32] × [3.61] m、東壁方向は N 28° W、検出面から床面までの深さは 44 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 2 個（p 1・2）が確認された。p 1 は南東隅部に位置している。直径約 26 cm の円形を呈し、床面からの深さは 9 cm である。位置から柱穴と考えられる。p 2 は南壁際に位置し、西半分は調査区外にある。平面形態は、[41] × 41 cm で、楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは 20 cm である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち高坏 4 点、鉢 1 点、坏 3 点を図示した。

本遺構は、大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、形態の特徴と床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物と第 227 号住居跡を壊していることから、古墳時代後期と思われる。

第 229 号住居跡（第 17・18 図、写真図版 4）

本遺構は、調査区北部の C 3、D 3 グリッドに位置する。第 227・230 号住居跡と重複しており、本遺構は一番古い。北東隅部と北西隅部が確認され、その他の部分は第 227・230 号住居跡によって壊されている。そのため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は 4.69 × [3.55] m、北壁方向は N 68° W、検出面から床面までの深さは 6 cm である。床面は概ね平坦である。本遺構からは土器片・土製品が出土しており、そのうち甕 1 点、土製品 1 点を図示した。



第 16 図 第228号住居跡出土遺物

第 228 号住居跡出土遺物観察表

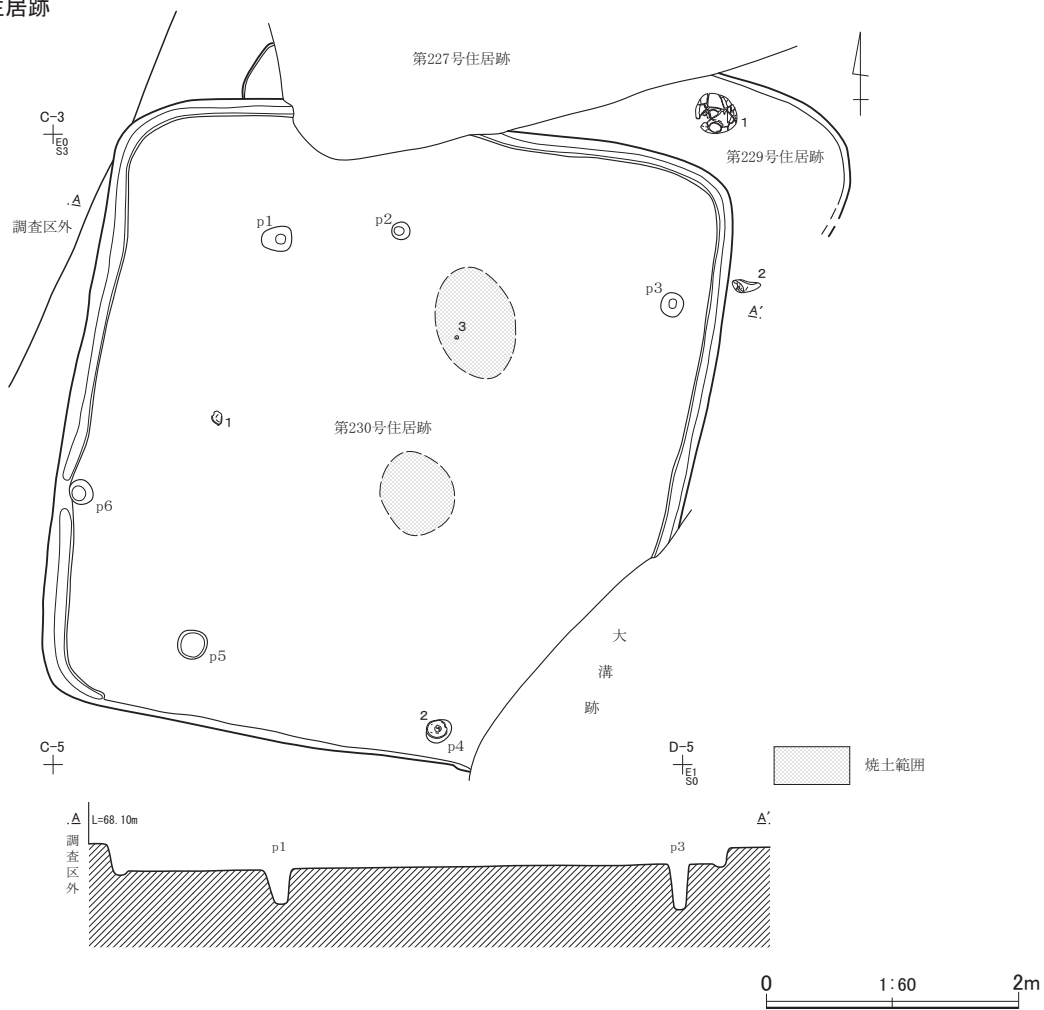
番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値	[]: 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	土師器 高坏	p 2 覆土	18.4	13.2	15.0	緻密	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 坏上部ヘラミガキ 坏下部ヘラナデ 脚～裾部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	完存
2	土師器 高坏	p 2 覆土	17.4	12.4	14.3	緻密	良好	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 坏上部ヘラナデ 坏下～脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	坏部一部欠損
3	土師器 高坏	床直	16.6	11.8	14.1	緻密	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラナデ、底部境に沈線 1 条巡らす 坏底～裾部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 坏部ヘラミガキ 脚上部絞り痕 脚部～裾部ヨコナデ	裾部一部欠損
4	土師器 高坏	p 2 覆土	18.2	17.1	14.1	緻密	良好	橙色 黒斑	口縁・裾端部面取り、裾部に稜をもつ 外面：坏部ヘラナデ 脚部ヘラミガキ 裾稜部ヨコナデ 裾部ヘラナデ 内面：坏部ヘラナデ 脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	裾部一部欠損
5	土師器 鉢	覆土	24.2	4.4	13.7	やや粗	良	橙色 明黄褐色 黒斑	口縁部が僅かに外反する 外面：口縁～体上部ヨコナデ後ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
6	土師器 坏	床直	11.0	5.8	5.6	やや粗	良	にぶい 黄橙色	底部は上げ底状を呈する 外面：口縁部ナデ 体～底部ヘラナデ 内面：口縁～底部ヘラナデ	完存
7	土師器 坏	床直	11.1	6.8	5.2	緻密	良	黄橙色	内面底部中央が盛り上がり上げ底状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部外縁ヘラケズリ	完存
8	土師器 坏	覆土	14.8	—	6.0	やや粗	良	橙色 黒斑	丸底で口縁端部が僅かに外反する 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	完存

本遺構は、北側の一部のみが確認された遺存状況の悪い遺構であるが、遺存する平面形の特徴、底面の状況から竪穴住居跡と判断した。所属時期は、出土遺物からでは判断が難しく、他の竪穴住居跡との切り合い関係から古墳時代中期以前と思われる。

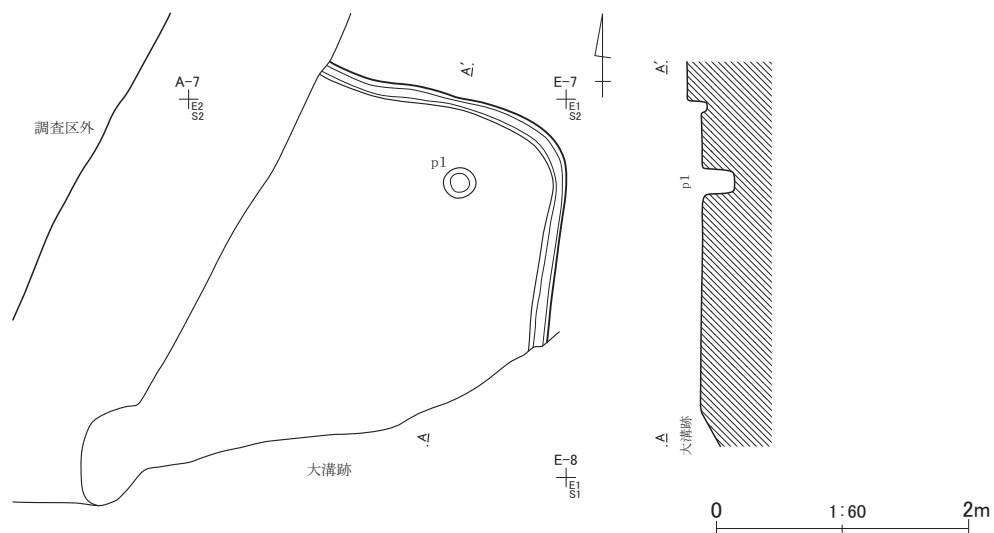
第 230 号住居跡（第 17・18 図、写真図版 5）

本遺構は、調査区北部の C 3・4、D 3・4 グリッドに位置する。第 227・229 号住居跡、大溝跡と重複しており、本遺構は第 227 号住居跡と大溝跡より古く、第 229 号住居跡よりも新しい。南東隅部を大溝跡に、北壁中央を第 227 号住居跡に壊されているが、ほぼ全体が確認された。平面形態は隅丸方形を呈する。床面幅は 4.88 × 4.72 m、西壁方向は N 8° E、検出面から床面までの深さは 20 cm である。床面は概ね平坦であるが、西側が東側より若干低くなっている。住居内施設は、焼土跡 2 ヶ所と小穴 6 個（p 1～6）、周溝が確認された。焼土跡は床面のほぼ中央と、そこからやや北寄りの 2 ヶ所で確認された。位置から炉跡と考えられる。p 1 は北西隅部に位置し、24 × 20 cm の不正楕円形、床面からの深さは 27 cm である。p 2 は北壁寄りのほぼ中央部に位置し、直径約 14 cm の円形で、床面からの深さは 19 cm である。p 3 はに東壁際の北寄りに位置し、20 × 18 cm の不正円形で、床面からの深さは 36 cm である。p 4 は南壁際の東寄りに位置し、21 × 16 cm の楕円形で、床面からの深さは 28 cm である。p 5 は南西隅部に位置し、直径約 23 cm の円形で、床面からの深さは 37 cm で

第229・第230号住居跡

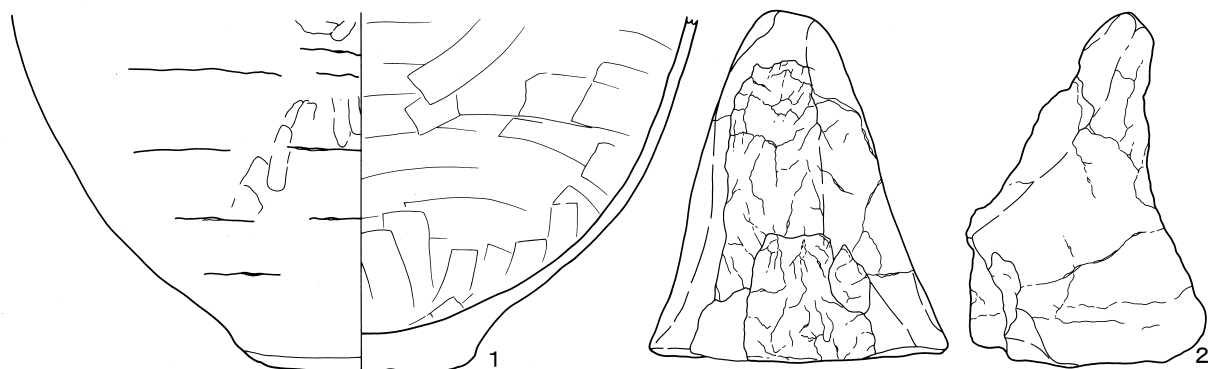


第231号住居跡

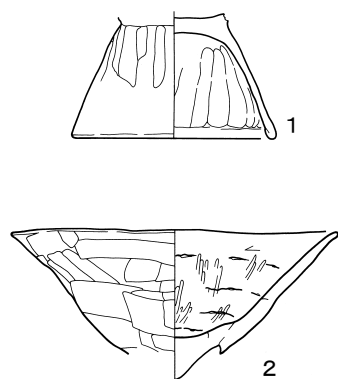


第 17 図 第229・第230号住居跡、第231号住居跡

第 229 号住居跡



第 230 号住居跡



第 231 号住居跡



第 18 図 第229～第231号住居跡出土遺物

第 229 号住居跡出土遺物観察表

表 2-5-3 与右陽山土遺物調査表											
番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値	□: 遺存値	口径	底径					
1	土師器 甕	床直	—	7.3	[18.8]	緻密	良	褐色	外面：胴下部ヘラケズリ・ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：胴下～底部ヘラケズリ	胴下部 1/2 底部完存	
番号	種別	出土位置	法 量 (): 推定値 [] : 遺存値				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
2	五徳状 土製品	床直	18.7	15.8	(12.7)	[2,120]	やや粗	良	橙色	底面は平らで、15.8×約13cmの楕円形を呈し、湾曲して立ち上がる。先端が細くなり、内側に向けて3.5×2.5cmの面を持つ。『後張遺跡Ⅱ』の分類のⅢに相当する。	ほぼ完存

第 230 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 □: 遺存値		器高						
			口径	底径							
1	土師器 台付甕	覆土	—	(10.4)	[6.5]	やや粗	良	浅黄桃色	S字甕 外面：台部磨減激しく調整不明、ハケメカ 内面：台部ヘラナデ 台端部折り返しヨコナデ 台上部砂粒多く含む土充填	台上部完存 台下部 1/4	
2	土師器 高坏	床直	17.1	—	[8.0]	やや粗	良	橙色	外面：坏部ヘラナデ 内面：坏部磨減激しいがヘラミガキカ	坏部ほぼ完存	
番号	種別	出土位置	法 量 (): 推定値 [] : 遺存値				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
3	土玉	覆土	2.3	2.6	2.3	13.1	やや粗	良好	にぶい 黄橙色	径2.6cmの球状を呈する。中心に径0.4cmの穴を通し、穴の端部は面取りを施し平らになっている。	完存

第 231 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 □: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 甕	覆土	(18.6)	5.8	22.8	やや粗	良好	褐色	最大径を胴中位にもつ球形を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部 ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	口縁部 1/6 胴～底部完存

ある。p 6 は西壁際の南寄りに位置し、直径約 21 cm の円形で、床面からの深さは 23 cm である。p 1・p 5 は位置から柱穴と考えられる。周溝は、南壁を除いた全域で確認された。幅は 13 ～ 21 cm、床面からの深さは約 4 cm である。本遺構からは少量の土器片と土製品が出土しており、そのうち台付甕 1 点、高坏 1 点、土玉 1 点を図示した。

本遺構は、形態の特徴、焼土跡が確認されたことから、炉跡を伴う竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、炉跡を伴うこと、出土した遺物から古墳時代前期～中期と思われる。

第 231 号住居跡（第 17・18 図、写真図版 5）

本遺構は、調査区南部西側の A 7・8、B 7・8 グリッドに位置する。大溝跡と重複しており、本遺構のほうが古い。南側は大溝跡に壊され、西側は調査区外に延びている。北東隅部のみが検出されたため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [3.63] × [3.26] m、東壁方向は N 8° E、検出面から床面までの深さは 12 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 1 個（p 1）、周溝が確認された。p 1 は北東隅部に位置し、直径約 25 cm の円形で、床面からの深さは 25 cm である。位置から柱穴と考えられる。周溝は、検出された壁面全域で確認された。幅は 11 ～ 15 cm、床面からの深さは 5 cm である。本遺構からは少量の土器片が出土しており、そのうち甕 1 点を図示した。

本遺構は、北東隅部のみ確認されたものであるが、形態の特徴、床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と思われる。

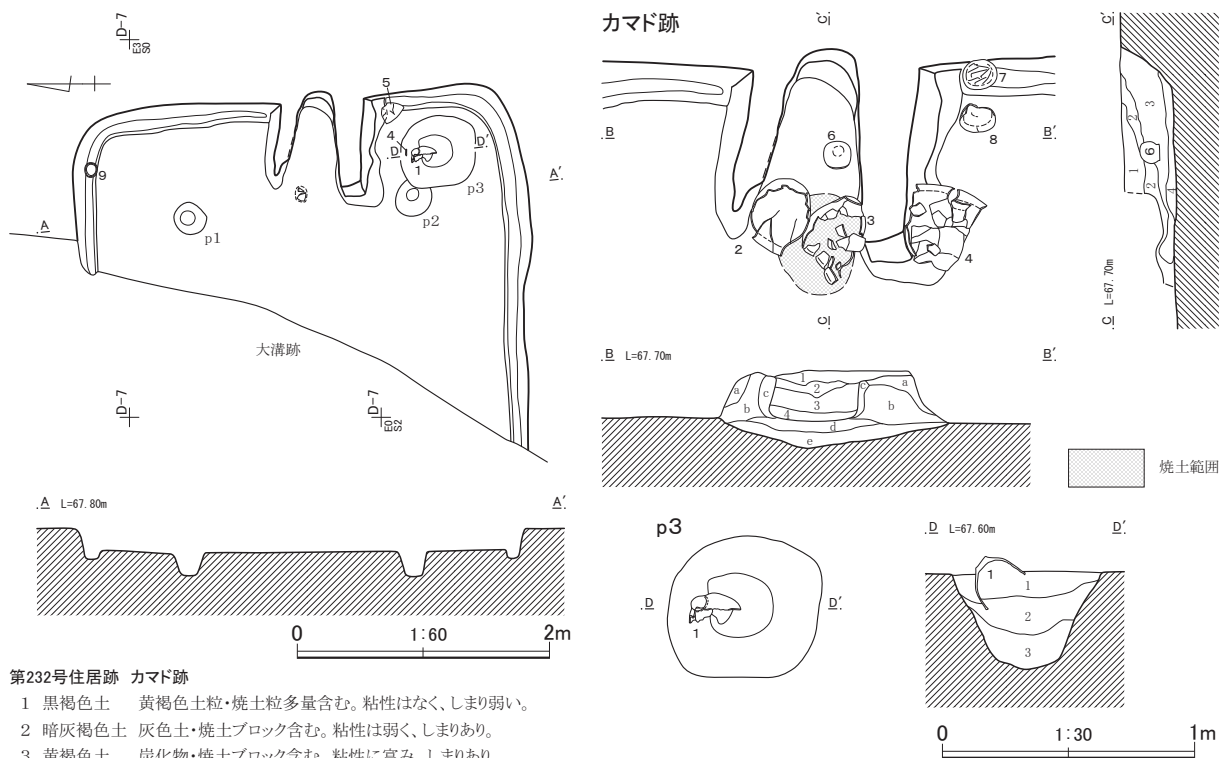
第 232 号住居跡（第 19・20 図、写真図版 5）

本遺構は、調査区南部中央の D 6・7 グリッドに位置する。第 236 号住居跡と大溝跡と重複しており、本遺構は大溝跡よりも古く、第 236 号住居跡よりも新しい。西側約半分を大溝跡に壊されているが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は 3.24 × [2.69] m、東壁方向は N 86° E、検出面から床面までの深さは 19 cm である。床面は概ね平坦であるが、中央部に向かって緩やかに傾斜している。住居内施設は、カマド 1 基、小穴 3 個（p 1～3）、周溝が確認された。カマドは、住居内に張り出す形態のもので、東壁のほぼ中央に造られている。方向は N 88° W、焚口幅 44 cm、奥行き 79 cm である。煙道は急激に立ち上がり、住居壁よりも奥へは延びていない。p 1 は北東隅部に位置し、直径約 25 cm の不正円形で、床面からの深さは 18 cm である。p 2 は北西隅部に位置し、直径約 29 cm の不正円形で、床面からの深さは 18 cm である。これらは位置から柱穴と考えられる。p 3 は北西隅部の壁際に位置し、直径約 55 cm の不正円形を呈する。断面は逆台形で、床面からの深さは 38 cm である。位置・形態から貯蔵穴と考えられる。周溝は、カマド内を除いて検出された全域で確認された。幅は 14 ～ 22 cm、床面からの深さは 6 cm である。カマド内堆積土は 4 層に分けられる。4 層はカマド内に堆積した炭化物層、3 層はカマド天井崩落土、1・2 層は天井崩落後の自然堆積土と思われる。a～c はカマド袖構築土、d・e はカマド掘形埋土である。本遺構からは多量の土器片・土製品が出土しており、そのうち甕 4 点、小型甕 1 点、埴 1 点、坏 3 点、土製支脚 1 点を図示した。

本遺構は、東壁にカマドを持つ竪穴住居跡である。所属時期は、出土遺物から古墳時代後期と思われる。

第 233 号住居跡（第 21・22 図、写真図版 6）

本遺構は、調査区南部中央の C 8・9、D 8 グリッドに位置する。大溝跡と重複しており、本遺構のほうが古い。西側約半分を大溝跡に壊されているが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は 3.50 × [2.68] m、東壁方向は N 32° E、検出面から床面までの深さは 16 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、カマド 1 基、小穴 4 個（p 1～4）、周溝が確認された。カマドは住居内に張り出す形態のもので、南隅に造られている。焚口幅 36 cm、奥行き 54 cm で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道は確認されなかった。カマド内には転用支脚として使われていたと考えられる逆位の高坏が残されていた。p 1・2 は東隅に位置する。p 1



第232号住居跡 カマド跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒多量含む。粘性はなく、しまり弱い。
- 2 暗灰褐色土 灰色土・焼土ブロック含む。粘性は弱く、しまりあり。
- 3 黄褐色土 炭化物・焼土ブロック含む。粘性に富み、しまりあり。
- 4 黒灰色土 焼土ブロック含む。粘性・しまりともになし。
- a 暗黄灰色土 炭化物・焼土粒若干含む。粘性・しまりともに弱い。
- b 黄褐色土 鉄分・炭化物の凝集が見られる。やや砂質で粘性弱く、しまりあり。
- c 赤灰色土 酸化反応が著しい。
- d 黄灰色土 炭化物・焼土粒含む。粘性に富み、しまり弱い。
- e 暗灰色土 鉄分・炭化物含む。粘性に富み、しまりなし。

第232号住居跡 p3

- 1 暗灰褐色土 炭化物・焼土粒含む。やや砂質で粘性は弱く、しまりなし。
- 2 暗黄灰色土 炭化物・焼土ブロック含む。粘性に富み、しまり弱い。
- 3 黒灰色砂質土 黄褐色土ブロック・焼土ブロック含む。粘性・しまりともになし。

第 19 図 第232号住居跡

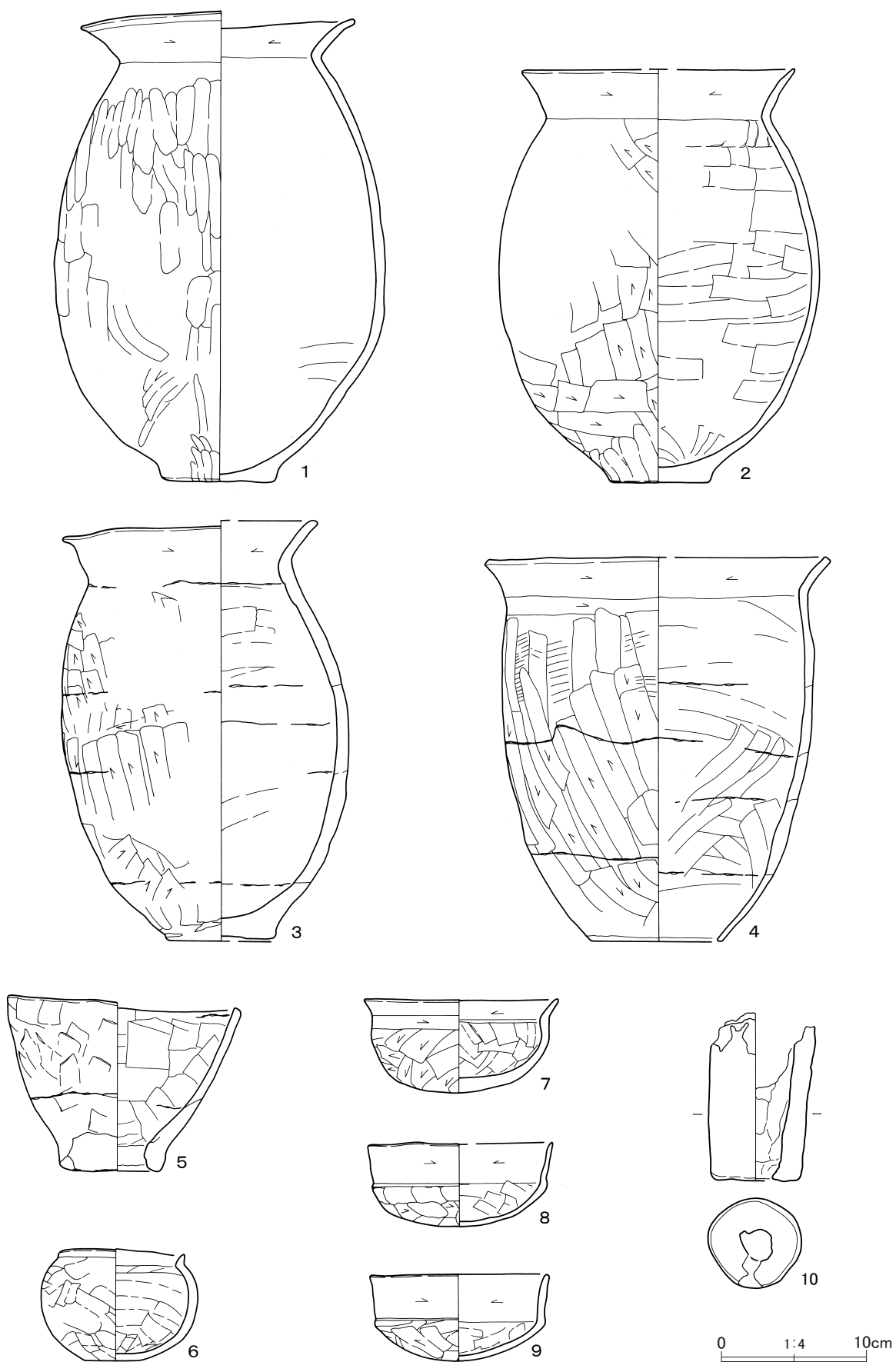
は直径約 22 cm の不正円形で、床面からの深さは 24 cm、p 2 は直径約 22 cm の不正円形で、床面からの深さは 25 cm である。位置からどちらも柱穴と思われる、柱を移動したと考えられる。p 3 はカマドの左に隣接している。66 × 51 cm の楕円形で、床面からの深さは 20 cm、断面は深い皿状である。位置・形態から貯蔵穴と考えられる。p 4 は床下土坑で、床面中央やや東よりに位置する。80 × 58 cm の西側が細い楕円形で、東側にテラスを持つ。床面からの深さは底部が 13 cm、テラス部が 11 cm である。周溝は東隅部周辺のみで確認された。幅 16 ～ 20 cm、床面からの深さ 6 cm である。本遺構からは多量の土器片と、石製品が出土しており、そのうち小型甑 1 点、高坏 2 点、埴 4 点、坏 1 点、石製紡錘車 1 点を図示した。

本遺構は、南隅部にカマドをもつ堅穴住居跡である。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と思われる。

第 234 号住居跡 (第 21・22 図、写真図版 6)

本遺構は、調査区南西隅部の A 10・11、A 10・11 グリッドに位置する。第 235 号住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。北東隅部のみ検出され、その他の部分は調査区外にある。遺構の大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。床面幅は [2.57] × [2.24] m、東壁方向は N 13° W、検出面から床面までの深さは 60 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 1 個 (p 1)、周溝が確認された。p 1 は北東隅部に位置し、直径約 43 cm の不正円形で、床面からの深さは 62 cm である。位置・規模から柱穴と考えられる。周溝は、検出された範囲の全域で確認された。幅は 10 ～ 24 cm、床面からの深さは 3 cm である。本遺構からは多くの土器片が出土しており、そのうち高坏 1 点、器台 1 点、埴 2 点、坏 1 点を図示した。

本遺構は、北東隅部周辺のみが確認された遺構であるが、形態の特徴と床面の状況から堅穴住居跡と判断した。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と思われる。



第 20 図 第232号住居跡出土遺物

第 232 号住居跡出土遺物観察表

番号			種別・器種			出土位置			法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
						(): 推定値 []: 遺存値										
						口径	底径	器高								
1	土師器 甕	p 3 覆土	18.7	6.8	32.4	やや粗	良	にぶい 黄橙色	最大径を胴下部にもつ下膨れの器形 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ・ナデ						胴下部 1/2 その他完存	
2	土師器 甕	カマド 覆土	(18.6)	6.6	28.4	やや粗	良好	明褐色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 頸～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸～底部ヘラナデ						口縁～胴中部 1/2 胴下～底部完存	
3	土師器 甕	カマド 覆土	16.9	7.2	29.0	粗	良	明褐色	上げ底状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ						口縁～胴中部 3/4 胴下～底部完存	
4	土師器 甕	床直	23.1	8.8	26.4	やや粗	良	橙色 黒斑	外面：口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 胴上部ハケメ後胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ						ほぼ完存	
5	土師器 小型甕	覆土	15.5	5.9	12.1	緻密	良好	橙色 黒斑	底部孔 2.8 × 3.3cm 口縁端面面取り 外面：ナデ・ヘラナデ 内面：ヘラナデ						完存	
6	土師器 壺	カマド 覆土	8.5	3.8	7.6	緻密	良好	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ						完存	
7	土師器 杯	床直	13.1	—	6.4	緻密	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ						完存	
8	土師器 杯	床直	12.7	—	5.8	緻密	良好	橙色 黒斑	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外傾する 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ						3/4	
9	土師器 杯	床直	12.1	—	5.9	緻密	良好	橙色 黒斑	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は直立する 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部との境に棒状工具によるミガキ 体～底部ヘラナデ						完存	
番号	種別	出土位置	法 量 (): 推定値 [] : 遺存値				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況					
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)										
10	土製 支脚	カマド 底面	[11.6]	7.1	5.9	[392.7]	緻密	良好	橙色	円筒状を呈する。孔径は端部約 3.2cm、中部約 3.5cm。外面はヘラナデを施し丁寧に仕上げる。端部は平らに整えられている。内面は調整を行っていない。		1/2 か？				

第 235 号住居跡（第 21 図）

本遺構は、調査区南西部隅の A 11 グリッドに位置する。第 234 号住居跡と重複しており、本遺構のほうが古い。西側は第 234 号住居跡によって壊され、南側は調査区外にあるため、東壁の一部のみ検出された。検出された部分がわずかであるため、平面形態は不明である。床面幅は [1.19] × [0.59] m、東壁方向は N 44 ° W、検出面から床面までの深さは 35 cm である。住居内施設は、周溝が確認された。幅 19 cm、床面からの深さ 5 cm である。本遺構からは少量の土器片が出土しているが、図示し得る遺物はなかった。

本遺構は、東壁の一部のみ検出された遺構であるが、床面の状況・周溝の存在から、竪穴住居跡と判断した。所属時期は、時期を判断できる遺物がないため不明であるが、遺構の重複状況から第 234 号住居跡に先行するものと考えられる。

第 236 号住居跡（第 23・24 図、写真図版 6）

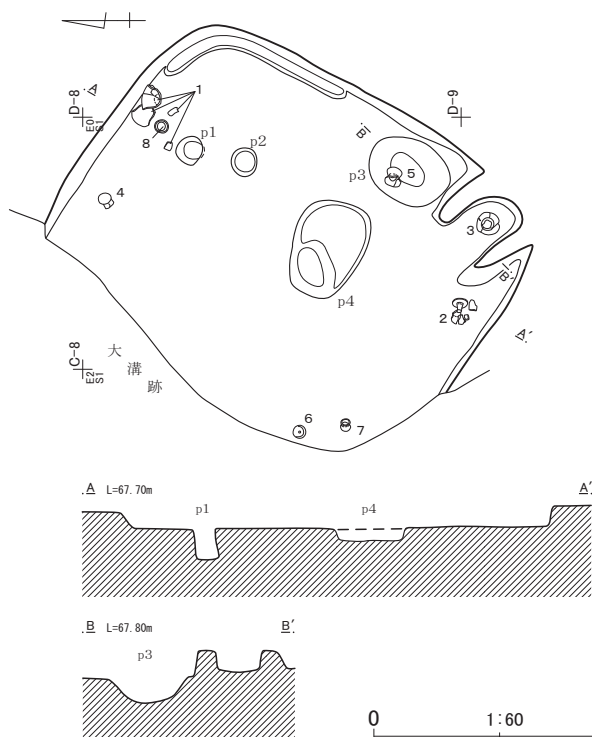
本遺構は、調査区南部中央の D 6 グリッドに位置する。第 232 号住居跡と大溝跡と重複しており、本遺構は両遺構よりも古い。西側は大溝跡に、南東壁の南側は第 232 号住居跡に壊されており、東隅部のみが検出された。そのため全容は不明であるが、残存部分から推測するに平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [2.49] × [1.95] m、東壁方向は N 36 ° W、検出面から床面までの深さは 16 cm である。床面は概ね平坦であるが、中央部に向かって緩やかに傾斜している。住居内施設は、小穴 3 個（p 1 ～ 3）が確認された。何れも東隅に位置している。p 1 は直径約 31 cm の円形で、床面からの深さは 33 cm である。p 2 は 42 × 36 cm の不正円形で、床面からの深さは 33 cm である。位置・深さから柱穴と考えられる。p 3 は 80 × 64 cm の楕円形で、床面からの深さは 11 cm である。p 1 ・ 2 に切られていることから、床下土坑と考えられる。本遺構からは土器片が少量出土しており、そのうち高坏 1 点を図示した。

本遺構は、東隅部周辺のみが検出された遺構であるが、形態の特徴・床面の状況から竪穴住居跡と判断した。所属時期は、出土遺物からは判断が付けられず不明であるが、遺構の切り合い関係から奈良時代より古いものと思われる。

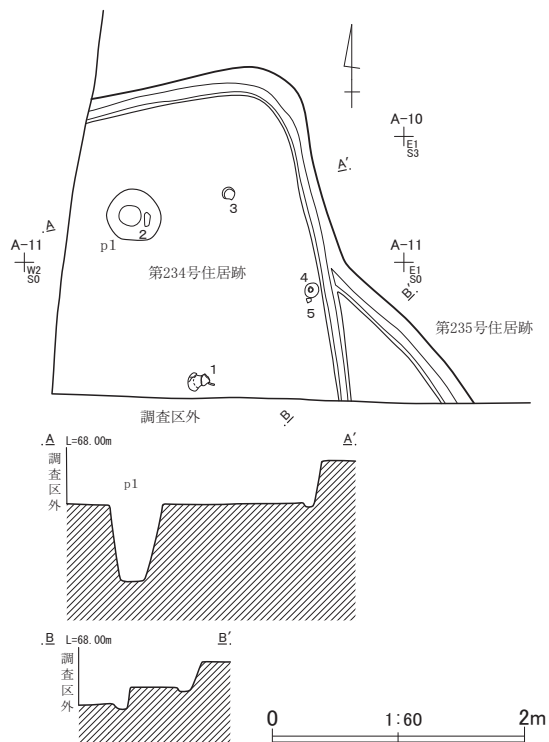
第 237 号住居跡（第 23・24 図、写真図版 6）

本遺構は、調査区南端部中央の D 10 ・ 11、E 10 ・ 11 グリッドに位置する。重複する遺構はない。北壁と西

第233号住居跡

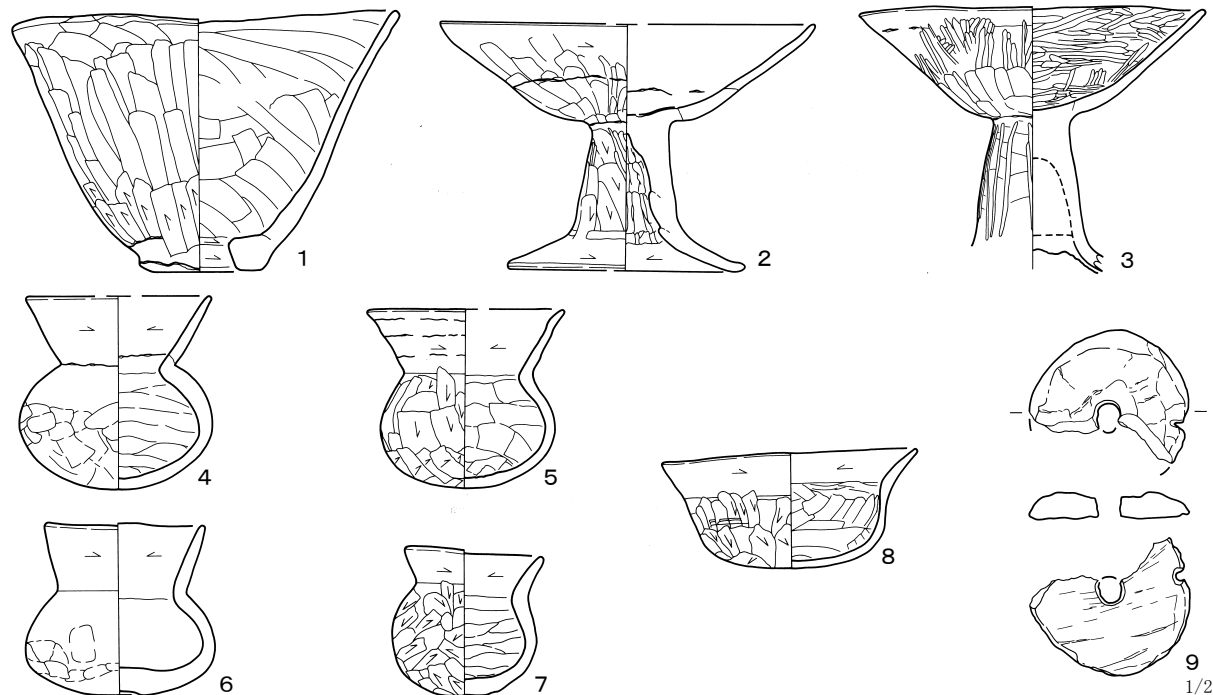


第234・第235号住居跡

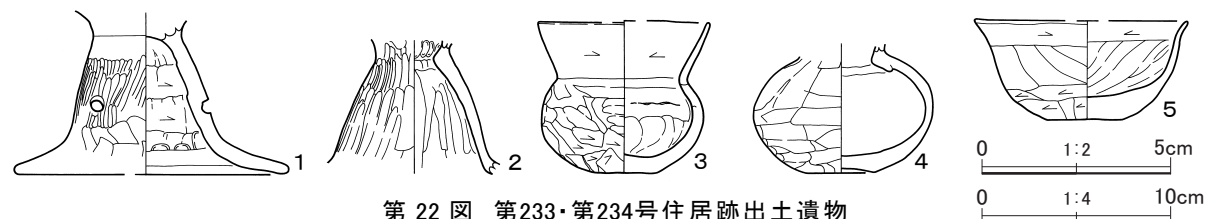


第 21 図 第233号住居跡、第234・第235号住居跡

第 233 号住居跡



第 234 号住居跡



第 22 図 第233・第234号住居跡出土遺物

第 233 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 小型甌	床直	20.2	5.9	13.7	やや粗	良好	明赤褐色 黒斑	底部単孔径 2.8cm 外面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	ほぼ完存
2	土師器 高坏	床直	(19.8)	12.2	13.1	緻密	良	橙色	外面: 坏部ナデ・ヘラナデ 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ 内面: 坏部磨減激しく調整不明 脚部絞り痕 裾部ヨコナデ	坏部 1/4 脚～裾部完存
3	土師器 高坏	カマド 底面	18.2	—	[14.1]	緻密	良	橙色	焼成前に脚部内面を粘土で塞いでいる 外面: 坏上部ナデ後ヘラミガキ 坏下部ヘラナデ 脚部ヘラナデ後ヘラミガキ 内面: 坏部ナデ後ヘラミガキ 脚部不明	坏～脚部完存
4	土師器 埴	床直	9.5	—	10.2	緻密	良	橙色	外面: 口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデか 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデと思われる	口縁部 1/2 体～底部完存
5	土師器 埴	p 3 覆土	10.2	—	9.5	緻密	良好	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
6	土師器 埴	床直	8.2	2.5	9.0	緻密	良	橙色 黒斑	体下部に最大径を持つ下膨れの器形で底部外面上げ底状を呈す 外面: 口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部磨減激しく調整不明	完存
7	土師器 埴	床直	7.1	1.6	7.8	緻密	良好	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ	ほぼ完存
8	土師器 坏	床直	13.5	—	6.1	緻密	良好	明赤褐色	外面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	完存
番号	種別	出土位置	法 量 (): 推定値 [] : 遺存値				石質	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)				
9	石製 紡錘車	覆土	[3.5]	4.2	0.7	[10.9]	石灰岩 か?	オリーブ 黄色	断面は扁平な台形を呈し、外縁部 1 箇所に切り込みを持つ。表面は凹凸を残しているが裏面は平滑である。両面から径 0.7cm の穿孔を施す。	2/3

第 234 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 高坏	覆土	—	(14.4)	[8.2]	緻密	良	橙色	脚部外面 3箇所に径 0.8cm の刺突痕あり 外面: 坏底部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部ヘラナデ 内面: 脚部輪積み痕顕著・ヘラケズリ 裾部ヨコナデ・指頭圧痕	坏底部 1/4 脚部完存 裾部 1/3
2	土師器 器台	覆土	—	—	[6.8]	緻密	良好	明褐色	外面: 器受部ヨコナデ 脚上部ヘラミガキ 脚下部ヘラナデ 内面: 器受部ナデ・指頭圧痕 脚部絞り痕・ヘラナデ	器受下～脚部 2/3
3	土師器 埴	覆土	(8.8)	2.8	8.1	緻密	良好	明赤褐色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 体上部ナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	口縁部 2/3 体～底部完存
4	土師器 埴	覆土	—	3.5	[6.8]	緻密	良	にぶい 黄橙色	外面底部上げ底状を呈する 外面: 体～底部ヘラナデ 内面: 頸部が狭いため観察不能	体～底部完存
5	土師器 坏	覆土	(10.6)	4.8	5.2	やや粗	良	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存

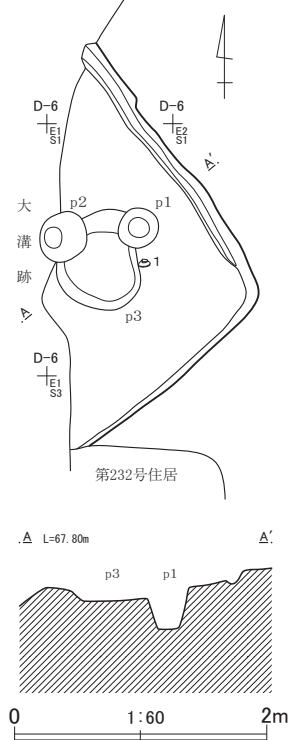
壁が検出され、南壁と東壁は調査区外にある。約半分が調査区外にあるため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は [4.82] × [4.66] m、西壁方向は N 22° E、検出面から床面までの深さは 19 cm である。床面は概ね平坦である。住居内施設は、小穴 3 個 (p 1 ～ 3)、周溝、溝 1 条が確認された。p 1 は西壁寄りの南側に位置し、直径約 25 cm の不正円形で、床面からの深さは 12 cm である。p 2 は床面中央の南西隅寄りに位置し、直径約 22 cm の円形で、床面からの深さは 19 cm である。p 3 は床面中央の北西隅寄りに位置し、直径約 20 cm の不正円形で、床面からの深さは 21 cm である。p 2 ・ 3 は位置から柱穴と考えられる。周溝は、北壁の西側と東側で確認され、中央部では見られない。幅は 9 ～ 19 cm、床面からの深さは 4 cm である。西壁の北部から南東方向に走る溝跡が 1 条確認された。幅は 23 ～ 36 cm、深さは西壁側が 5 cm、南東側が 10 cm で南東方向に傾斜している。住居壁面とも方向が異なるため間仕切り溝とは捉えがたく、その性格は不明である。本遺構からは多量の土器片と土製品が出土しており、そのうち高坏 2 点、埴 2 点、土製紡錘車 1 点を図示した。

本遺構は、南東部約半分が調査区外にあるため全容は不明であるが、形態の特徴、床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と思われる。

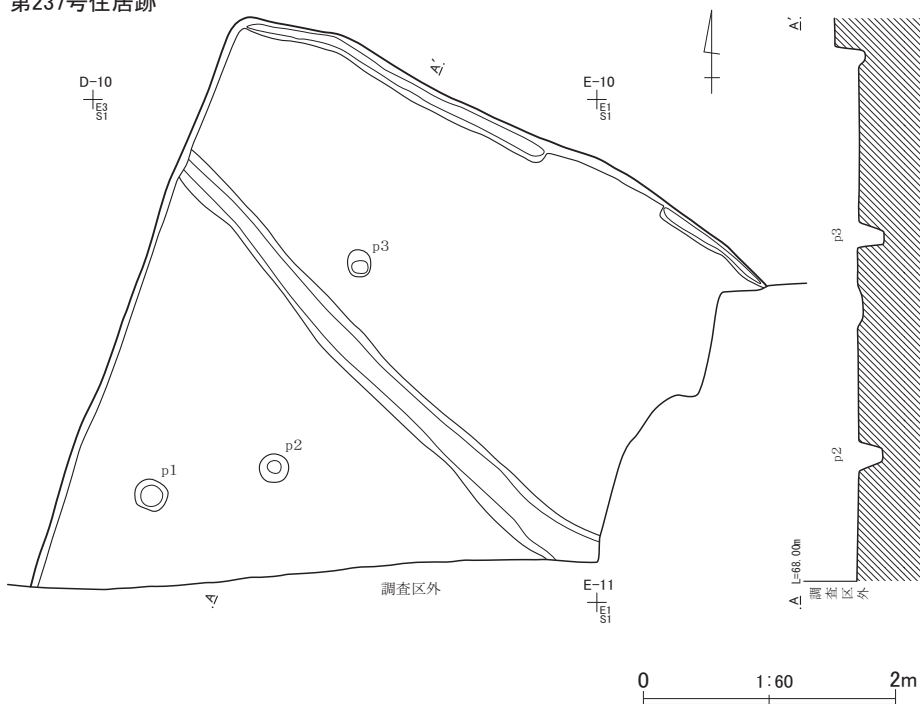
第 238 号住居跡 (第 23 ・ 24 図、写真図版 6)

本遺構は、調査区南部東側の E ～ G 7 ・ 8 グリッドに位置する。D - 2 号溝跡と重複しており、本遺構のほうが古い。東壁の南半分は削られているため残存せず、南壁は中央部で内側へ屈曲している。そのため平面形態は隅丸方形ではなく、南西部が張り出す方形形状か、台形状を呈すると思われる。床面幅は 5.66 × 5.45 m、西壁方向は N 28° E である。住居内施設は、小穴 4 個 (p 1 ～ 4) が確認された。p 1 ～ 3 は北西隅部に位置し、p 1 は直径約 24 cm の円形、p 2 は直径約 34 cm の円形、p 3 は 41 × 35 cm の楕円形である。p 4 は北東隅部に

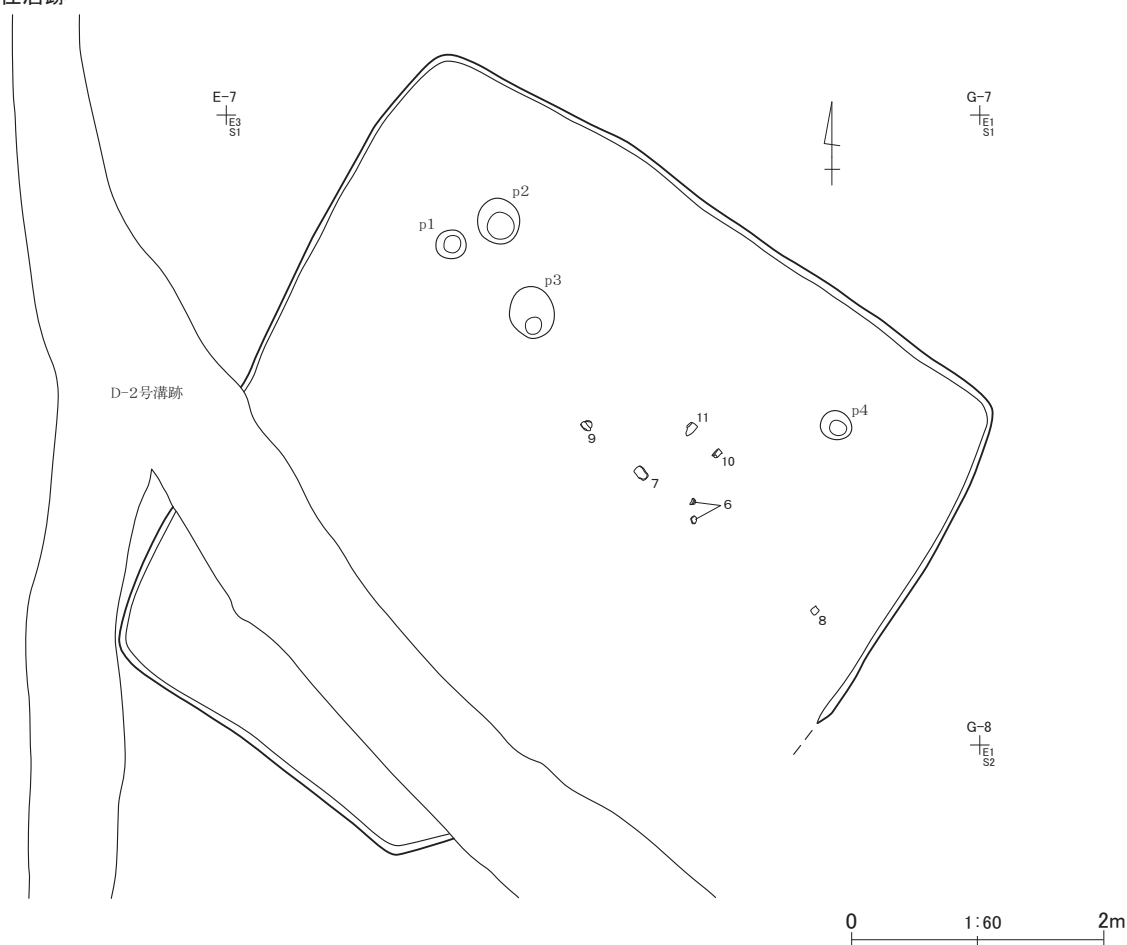
第236号住居跡



第237号住居跡

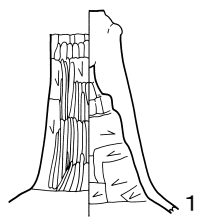


第238号住居跡

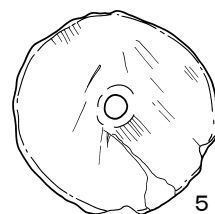
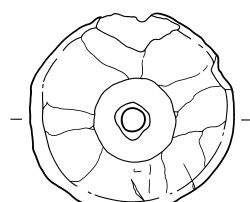
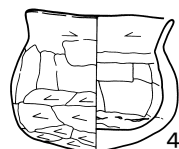
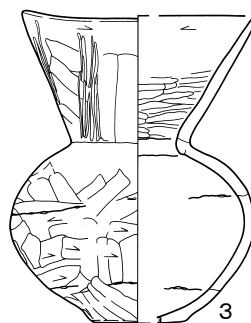
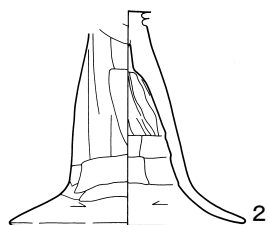
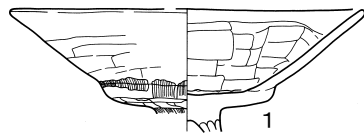


第 23 図 第236～第238号住居跡

第 236 号住居跡

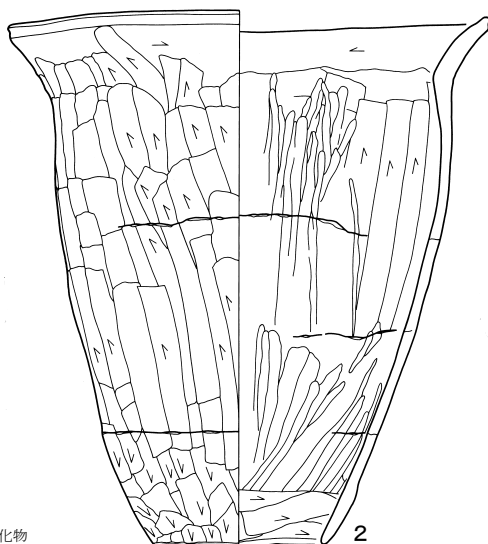
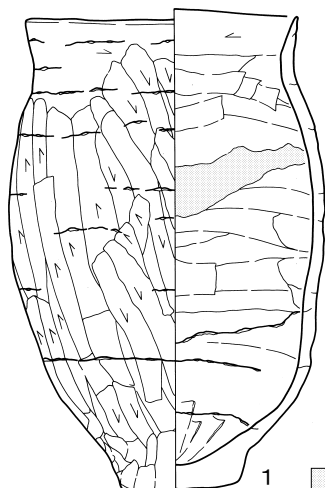


第 237 号住居跡

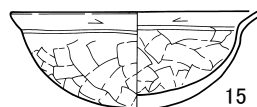
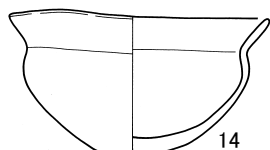
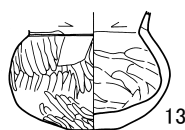
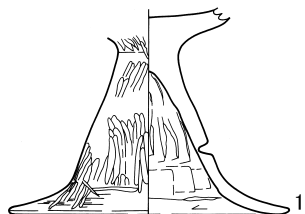
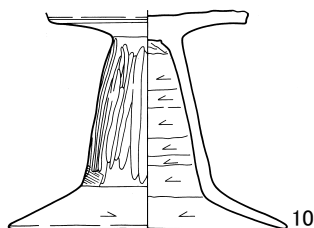
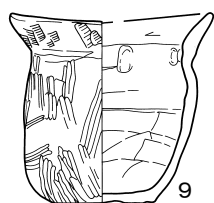
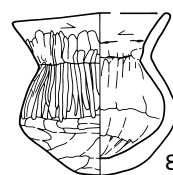
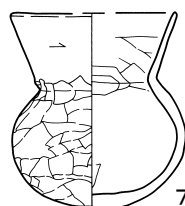
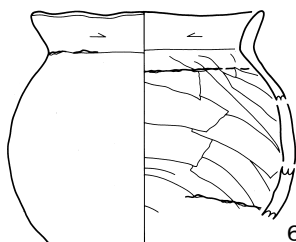
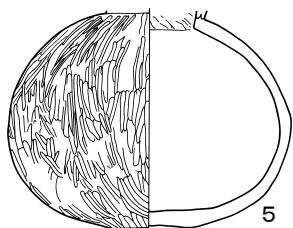
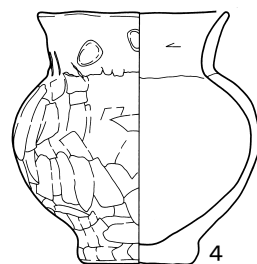
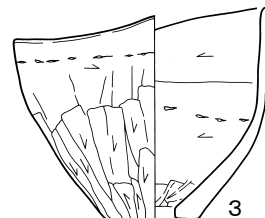


5
1/2

第 238 号住居跡



炭化物



0 1:4 10cm

0 1:2 5cm

第 24 図 第236～第238号住居跡出土遺物

第 236 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 高坏	覆土	—	—	[10.6]	緻密	良好	明赤褐色	脚上部口縁状に整形後坏部を接合する 外面：脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：脚上部絞り痕 脚下部ヘラケズリ	脚部完存

第 237 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況	
			(): 推定値 []: 遺存値								
			口径	底径	器高						
1	土師器 高坏	覆土	18.7	—	[6.4]	やや粗	良	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 坏部ハケ目後ヘラナデ 坏底部境にハケ目残る 内面：口縁～坏部ヨコナデ 坏底部ナデ	坏部 4/5	
2	土師器 高坏	覆土	—	12.2	[10.3]	やや粗	良	橙色	外面：脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ 内面：脚上部絞り痕 脚下部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	脚～裾部 ほぼ完存	
3	土師器 小型壺	覆土	12.2	5.0	16.4	緻密	良好	明赤褐色	外面：口縁部ヘラナデ後ヘラミガキ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ 体部磨減激しく調整不明	ほぼ完存	
4	土師器 埴	覆土	7.7	—	7.4	やや粗	良	橙色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	完存	
番号	種別	出土位置	法 量 () : 推定値 [] : 遺存値				胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
5	土製 紡錘車	覆土	5.3	5.3	1.6	37.8	緻密	良好	橙色	断面は三角形に近い扁平な台形を呈し、表面から径0.7cmの穿孔を施す。表面はヘラケズリ、裏面はヘラナデを施す。	ほぼ完存

第 238 号住居跡出土遺物観察表

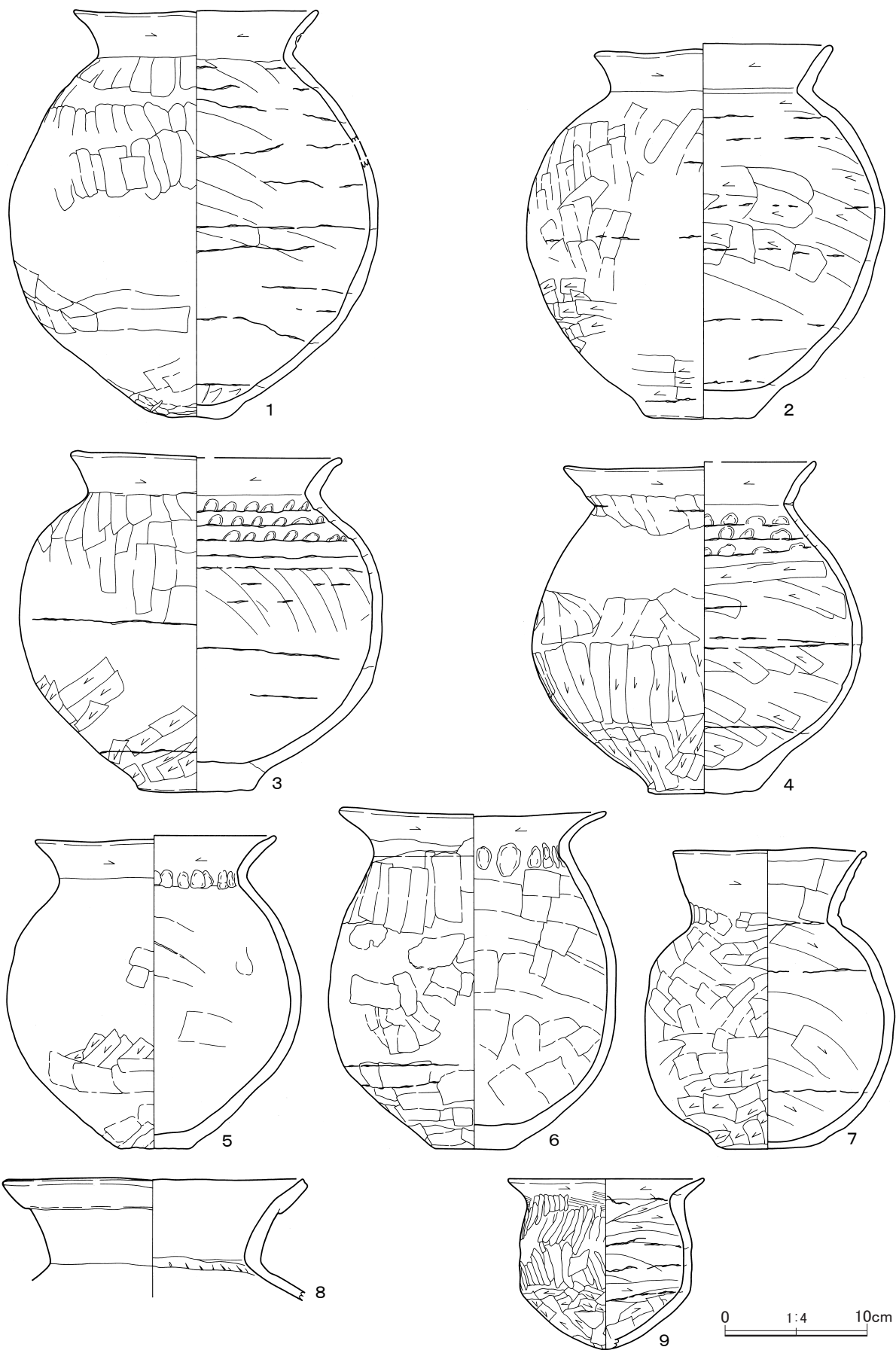
番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 []: 遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器 甕	覆土	14.3	4.8	25.5	やや粗	良	明黄褐色 橙色	胴下部が橙色に変色、被熱によるものか 内面胴上部炭化物付着 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラケズリ 輪積み痕顕著 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	完存
2	土師器 甌	覆土	25.2	8.6	28.3	やや粗	良	明黄褐色 黒斑	外面：口縁端部棒状工具ナデ 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ後ヘラナデ 底部ヘラケズリ	ほぼ完存
3	土師器 小型甌	覆土	13.3	4.9	11.2	緻密	良	明赤褐色	底部中央に径 2.7cm の穴を穿孔 外面：口縁～体上部ヨコナデ 体下～ 底部ヘラケズリ 内面：口縁～体部ヨコナデ 底部ヘラナデ	完存
4	土師器 小型壺	覆土	9.8	5.6	13.3	やや粗	良	にぶい 橙色	底部は円盤状、球形の胴部、頸部は窄まらずに口縁部がほぼ直立する 外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 胴部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部磨減激しく調整不明	ほぼ完存
5	土師器 小型壺	覆土	—	4.3	[11.5]	緻密	良好	明黄褐色	外面：胴部ヘラミガキ 底部ヘラナデ後ヘラミガキ 内面：頸部が狭いため観察不能	胴～底部完存
6	土師器 小型壺	覆土	12.0	—	[12.4]	やや粗	良	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケ目後ナデ 胴部磨減激しく調整不明 内面：口縁～頸部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁～胴上部 3/4 胴中部ほぼ完存
7	土師器 埴	覆土	(9.0)	1.8	10.3	緻密	良好	明赤褐色	外面：口縁～頸部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラナデ 頸～底部ナデ	口縁部 1/4 頸～底部ほぼ完存
8	土師器 埴	覆土	8.2	—	8.5	緻密	良好	明褐色	体中部が張り算盤玉状を呈する 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ後ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体上部ナデ 体下～底部ヘラナデ	ほぼ完存
9	土師器 鉢	覆土	10.5	5.4	10.2	緻密	良好	明褐色	外面：口縁部ハケ目後ナデ 体部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 体～底部ヘラナデ	口縁部 1/2 体～底部ほぼ完存
10	土師器 高坏	覆土	—	(14.6)	[11.5]	やや粗	良	橙色	外面：坏底部ナデ 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：坏底部ナデ 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	坏底部 1/6 脚部完存 裾部 1/4
11	土師器 高坏	覆土	—	14.2	[10.7]	やや粗	良	橙色	脚部外面 1 箇所径 0.5cm の刺突痕あり 外面：坏底～脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：坏底部ナデ 脚上部絞り痕 脚下部～裾部ヘラナデ・ヨコナデ	坏底部 1/3 脚～裾部ほぼ完存
12	土師器 高坏	覆土	—	11.8	[8.1]	緻密	良	黄橙色	胎土が異なる、搬入品か 脚部に径 1.4cm の透穴 3 個穿孔 外内面：脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	脚～裾部ほぼ完存
13	土師器 埴	覆土	(5.8)	2.8	[6.3]	緻密	良	橙色 黒斑	外面：頸部ヨコナデ 体～底部ヘラミガキ 内面：頸部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	体～底部完存
14	土師器 坏	覆土	13.6	3.7	7.5	やや粗	不良	橙色 黒斑	外面：口縁～体部磨減激しく調整不明 底部ヘラケズリ 内面：磨減激しく調整不明	ほぼ完存
15	土師器 坏	覆土	13.2	—	5.1	緻密	良	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ	ほぼ完存
16	土師器 坏	覆土	11.7	—	5.4	緻密	良好	橙色	口縁部と体部の境に稜をもち口縁部は外反する 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ後ヘラミガキ	口縁部 2/3 体部完存

位置し、直径約 24 cm の不正円形である。位置から p 2・p 4 が柱穴と考えられる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち甕 1 点、甌 2 点、小型壺 3 点、埴 2 点、鉢 1 点、高坏 3 点、埴 1 点、坏 3 点を図示した。

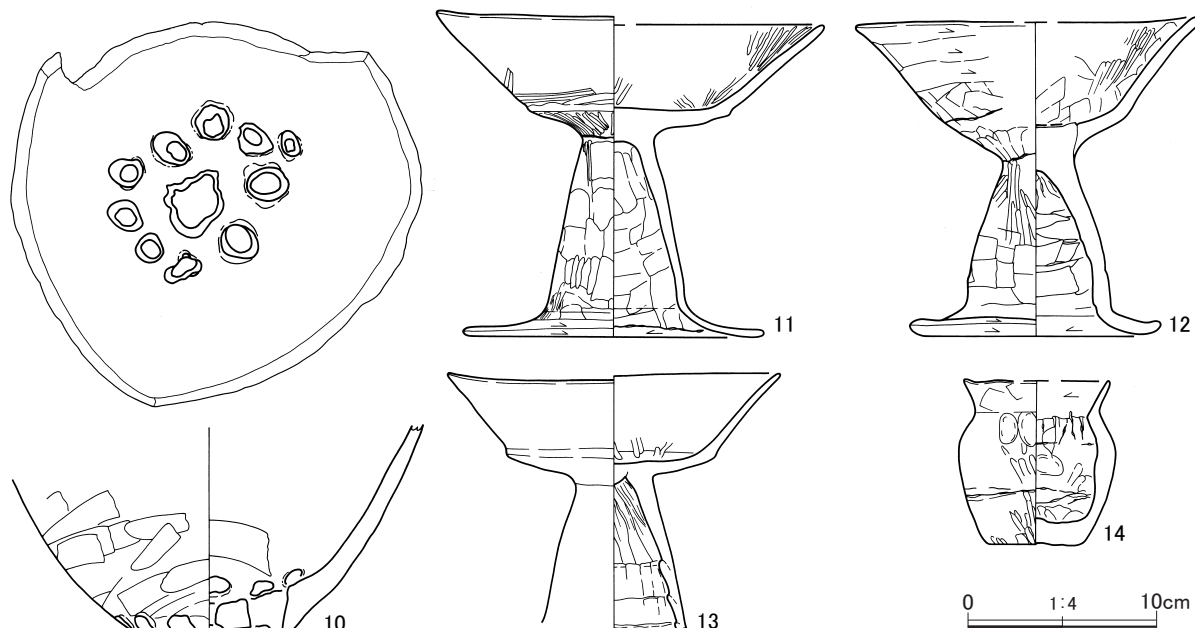
本遺構は、カマド・炉など明確な特徴が確認されなかったが、形態の特徴から堅穴住居跡と判断した。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と思われる。

第 239 号住居跡（第 25・26 図、写真図版 7・8）

本遺構は、調査区南端部中央の E 10・11 グリッドに位置する。調査の最後に仮設トイレの設置場所を掘った時に確認された住居跡で、第 237 号住居跡よりも深い住居跡である。多量の遺物が出土しており、そのうち甕 6 点、壺 2 点、鉢 1 点、甌 1 点、高坏 3 点、小型甕 1 点を図示した。



第 25 図 第239号住居跡出土遺物(1)



第 26 図 第239号住居跡出土遺物(2)

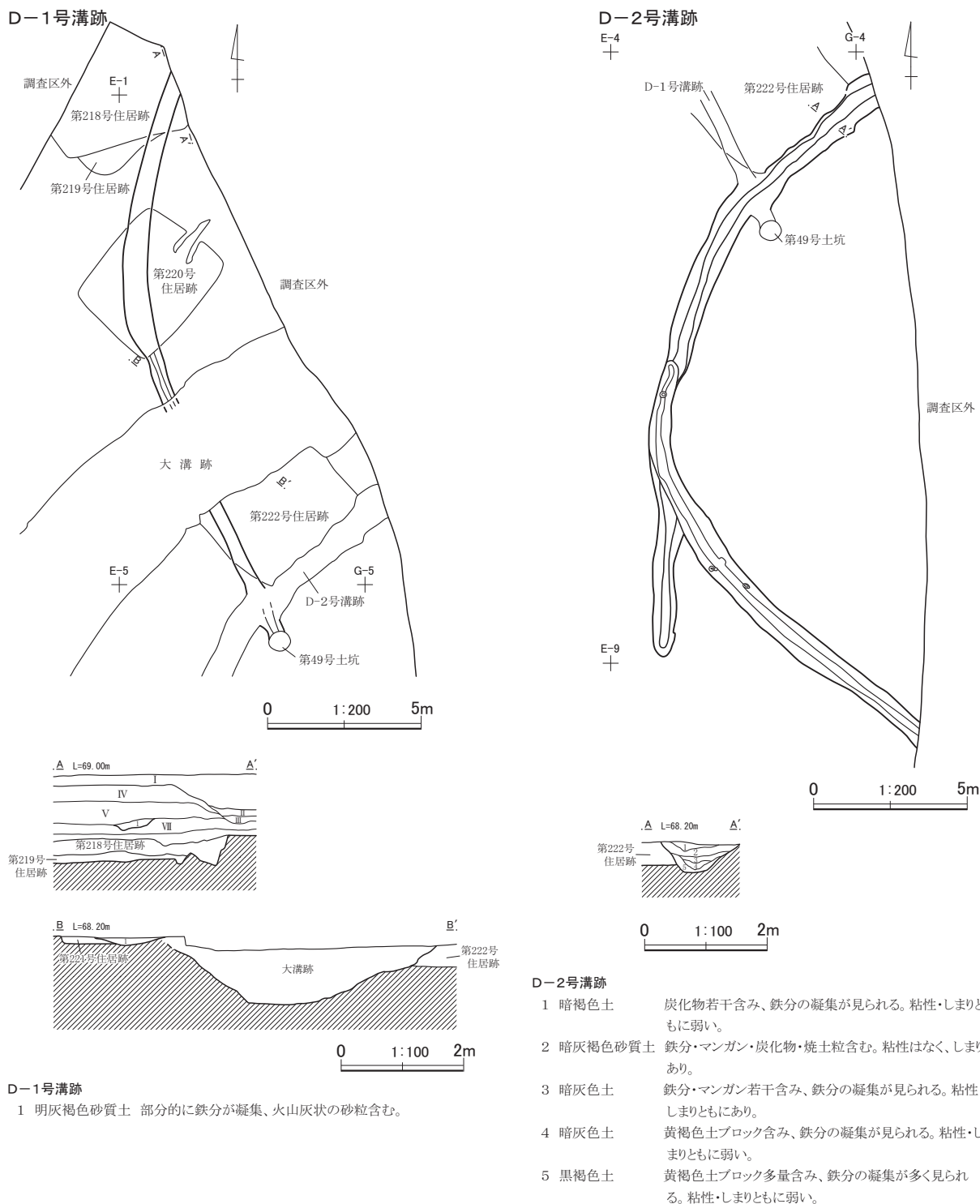
第 239 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			(): 推定値 □: 遺存値	口径	底径	器高				
1	土師器 甕	ビット 覆土	17.0	3.6	28.7	緻密	良好	明褐色	外面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴~底部ヘラケズリ	ほぼ完存
2	土師器 甕	ビット 覆土	16.2	6.6	26.4	緻密	良	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ・ヘラケズリ 底部ナデ	ほぼ完存
3	土師器 甕	ビット 覆土	18.6	4.7	24.0	やや粗	良好	明赤褐色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ・ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴上部輪積み痕顕著・指頭圧痕 胴中部ヘラナデ 胴下~底部磨減激しく調整不明	口縁~胴上部 2/3 胴下~底部ほぼ完 存
4	土師器 甕	覆土	17.5	5.2	23.4	緻密	良好	明褐色	外面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ・ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴上部輪積み痕顕著・指頭圧痕 胴中~下部ヘラ ケズリ 底部ナデ	ほぼ完存
5	土師器 甕	覆土	16.8	4.8	22.0	やや粗	良好	にぶい 褐色	外面: 口縁~頸部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ・ヘ ラナデ 内面: 口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 胴~底部ヘラケズリ	ほぼ完存
6	土師器 甕	覆土	18.6	5.4	23.9	緻密	良好	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 胴上~中部ヘラナデ 胴下~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 胴部ヘラケズリ 底部ナデ	ほぼ完存
7	土師器 壺	覆土	13.4	3.9	21.2	緻密	良好	明褐色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 頸部ヨコナデ後ヘラナデ 胴上部ヘラナデ 胴下 ~底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ後ヘラナデ 胴~底部ヘラケズリ	完存
8	土師器 壺	覆土	20.9	—	[8.7]	やや粗	不良	橙色 黒斑	折り返し口縁 外面: 磨減激しく調整不明 内面: 磨減激しく調整不明、 頸部指頭圧痕	口縁~頸部完存 胴上部 1/3
9	土師器 鉢	覆土	13.9	—	12.2	やや粗	良好	明褐色	外面: 口縁~頸部ヨコナデ 胴上部ナデ・ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ	口縁~胴部 1/3
10	土師器 甌	ビット 覆土	—	7.8	[11.1]	緻密	良	明褐色	底部中央に径約3cmの穴1個、周囲に径約1~1.5cmの穴10個穿孔 外面: 胴~底部ヘラナデ・ヘラケズリ 内面: 胴~底部ヘラナデ	胴下~底部完存
11	土師器 高坏	覆土	20.5	15.5	16.2	緻密	良好	明褐色	外面: 坏部磨減激しく調整不明 坏底部ヘラミガキ 脚部ヘラナデ後ヘラ ミガキ 裾部ヨコナデ 内面: 坏部ヘラミガキ 脚上部絞り痕 脚下部ナデ 裾部ヨコナデ	坏部 2/3 脚~裾部ほぼ完存
12	土師器 高坏	覆土	17.9	11.6	16.6	やや粗	良好	明赤褐色 黒斑	外面: 坏部ヨコナデ・ナデ 坏底部ヘラナデ 脚部ヘラナデ後ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面: 坏部ヘラナデ後ヘラミガキ 脚上部絞り痕 脚 下部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	坏部 3/4 脚~裾部ほぼ完存
13	土師器 高坏	覆土	17.5	—	[13.8]	やや粗	不良	橙色	外面: 磨減激しく調整不明 内面: 坏部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下部ナデ	坏~脚部 ほぼ完存
14	土師器 小型甕	覆土	(7.8)	5.1	8.7	緻密	良好	褐色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ後ヘラナデ 頸部指頭圧痕 体部ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体部ナデ・指頭圧痕 底部成形後 粘土貼付、その後ヘラケズリ	口縁~体上部 1/4 体下~底部完存

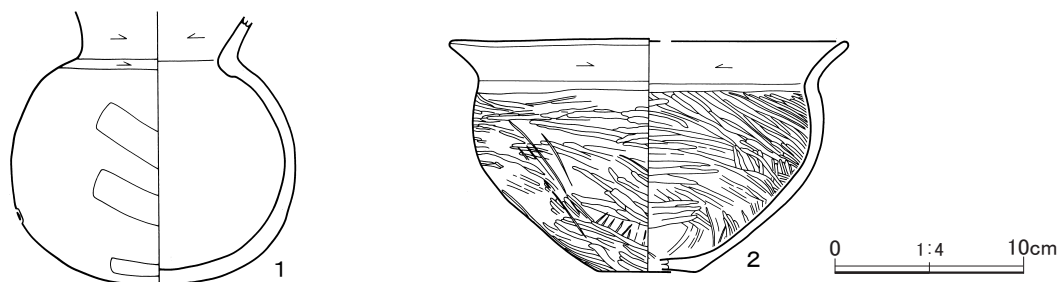
第3節 溝跡

D-1号溝跡（第27図）

本遺構は、調査区北部のE 0～4、F 4・5グリッドに位置する。第218～222号住居跡、D-2号溝跡、大溝跡と重複しており、本遺構はこれら全ての遺構よりも新しい。調査区北端部東壁から西側へ緩く弧を描いて南下する。遺構確認面では第49号土坑と接する所までしか確認できなかったが、南東に位置する第224・



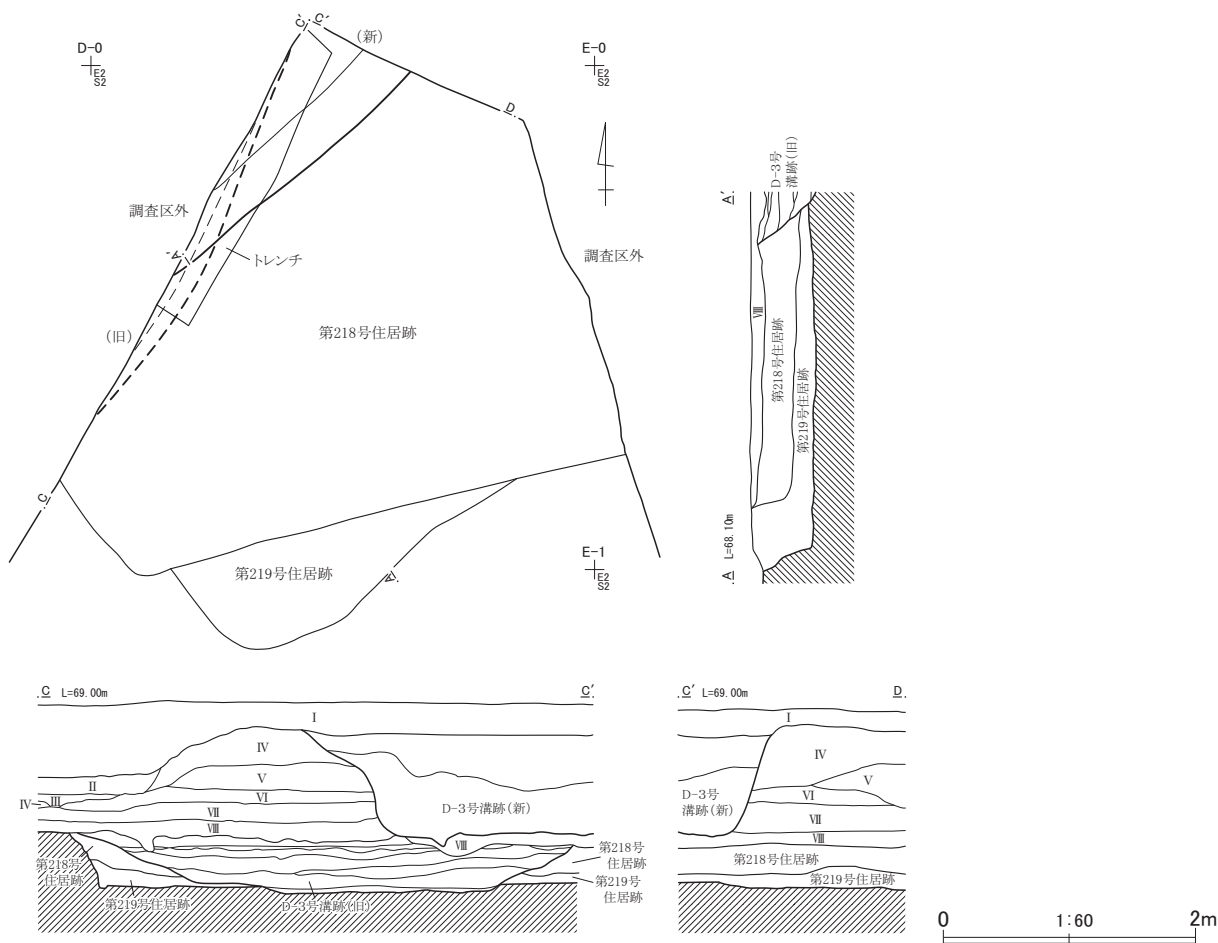
第27図 D-1・D-2号溝跡



第 28 図 D-2号溝跡出土遺物

D-2号溝跡出土遺物観察表

法 量 (cm)						胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
番号	種別・器種	出土位置	○：推定値 □：遺存値							
			口径	底径	器高					
1	土師器壺	覆土	—	2.2	[14.4]	緻密	良	にぶい 橙色	外面：口縁～肩部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ、丁寧に施され痕跡は不明瞭 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ナデ	口縁端部欠損
2	土師器鉢	覆土	21.1	5.2	12.2	緻密	良好	明赤褐色	外面：口縁～頸部ヨコナデ 体部ヘラナデ後ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラナデ 体部ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	1/3



第 29 図 D-3号溝跡

第 225 号住居跡の断面で本遺構の覆土が確認され、調査区東壁の断面では確認されていないことから、本遺構は調査区東壁付近まで延びていると考えられる。上端幅は 40 ～ 85cm、長さは直線距離で [18.6] m である。底面の標高は、調査区北端部で 68.05 m、B-B' セクションで 67.95 m、南部の第 222 号住居跡内で 67.85 m となっており、南に向かって緩やかに傾斜している。本遺構南端部と重なる位置にある第 49 号土坑は、本遺構と一連の遺構となる可能性も考えられる。遺構内堆積土は単一層である。本遺構からは多くの土器片が出土したが、図示し得るものはなかった。

本遺構は、調査区北端部の外から南下し、南端部が確認された溝跡である。南側の一部分のみが検出された溝であるため、性格は不明である。所属時期は、時期を判断できる遺物が出土していないため不明であるが、調査区北端部において古墳時代中期の遺構覆土上に堆積した旧表土層を掘り込んでいることから、平安時代以降になるものと思われる。

D－2号溝跡（第27・28図、写真図版8）

本遺構は、調査区東部のE 5～8、F 4・5・8・9、G 4・9グリッドに位置する。第222・223・238号住居跡、D－1号溝跡と重複しており、本遺構はD－1号溝跡より古く、第222・223・238号住居跡よりも新しい。調査区北部東側の調査区外から西側に大きく弧を描いて南下し、調査区南部東側の調査区外へと続いていく。南西から南東へ方向が変わるところで二股に分岐し、南下する溝は5m進んで収束する。北半分の南西方向に進む部分は、後述する大溝跡とほぼ平行であることから、何らかの関係があるものと思われる。上端幅は60～95cm、長さは[31.5]mである。遺構内堆積土は5層に分けられる。レンズ状堆積を示しており、自然堆積したものと思われる。本遺構からは多量の土器が出土しており、そのうち壺1点、鉢1点を図示した。

本遺構は、調査区北部の調査区外から調査区南部の調査区外へ弧を描いて南下している溝である。一部分のみが検出された溝跡であるため、その性格は不明である。所属時期は、遺構の重複関係から古墳時代後期から平安時代の間に含まれるものと思われる。

D－3号溝跡（第29図）

本遺構は、調査区北端部のD 0・1、E 0グリッドに位置する。第218・219号住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。本遺構は新旧2時期確認されている。

新しい溝跡は調査区北端部を北東－南西方向に走っており、南側の壁の一部のみが確認された。そのため、溝の幅は不明である。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。北壁が確認されていないが、断面は逆台形を呈すると思われる。遺構内堆積土は2層に分けられる。現表土直下から掘り込まれ、旧表土内で掘り込みが終わっている。

古い溝跡は調査区北端部西壁際を北北東－南南西方向に走っている。新しい溝と同様、南壁の一部分しか確認されていないため幅は不明である。また、調査区西壁際をほぼ平行に走っているため断面形も判断できない。遺構内堆積土は6層に分けられている。第218号住居跡と同じ面から掘り込まれ、上に同一の土（LⅧ）が堆積していることから、第218号住居跡と古いD－3号溝跡の時間差は大きくないものと考えられる。本遺構からは土器片が出土したが、図示し得るものは無かった。

本遺構は、調査区北端部を走る新旧2本の溝跡である。今回、同一の名前で新旧の溝跡としているが、方向が異なること、遺構内堆積土の間に旧表土が入り連続性がないことから、別々の溝跡だったと思われる。所属時期は、新しい溝跡が現表土下から掘り込まれていることから、中近世以降と思われる。古い溝跡が第218号住居跡とあまり時間差がないと考えられることから、古墳時代後期から平安時代までの間と思われる。

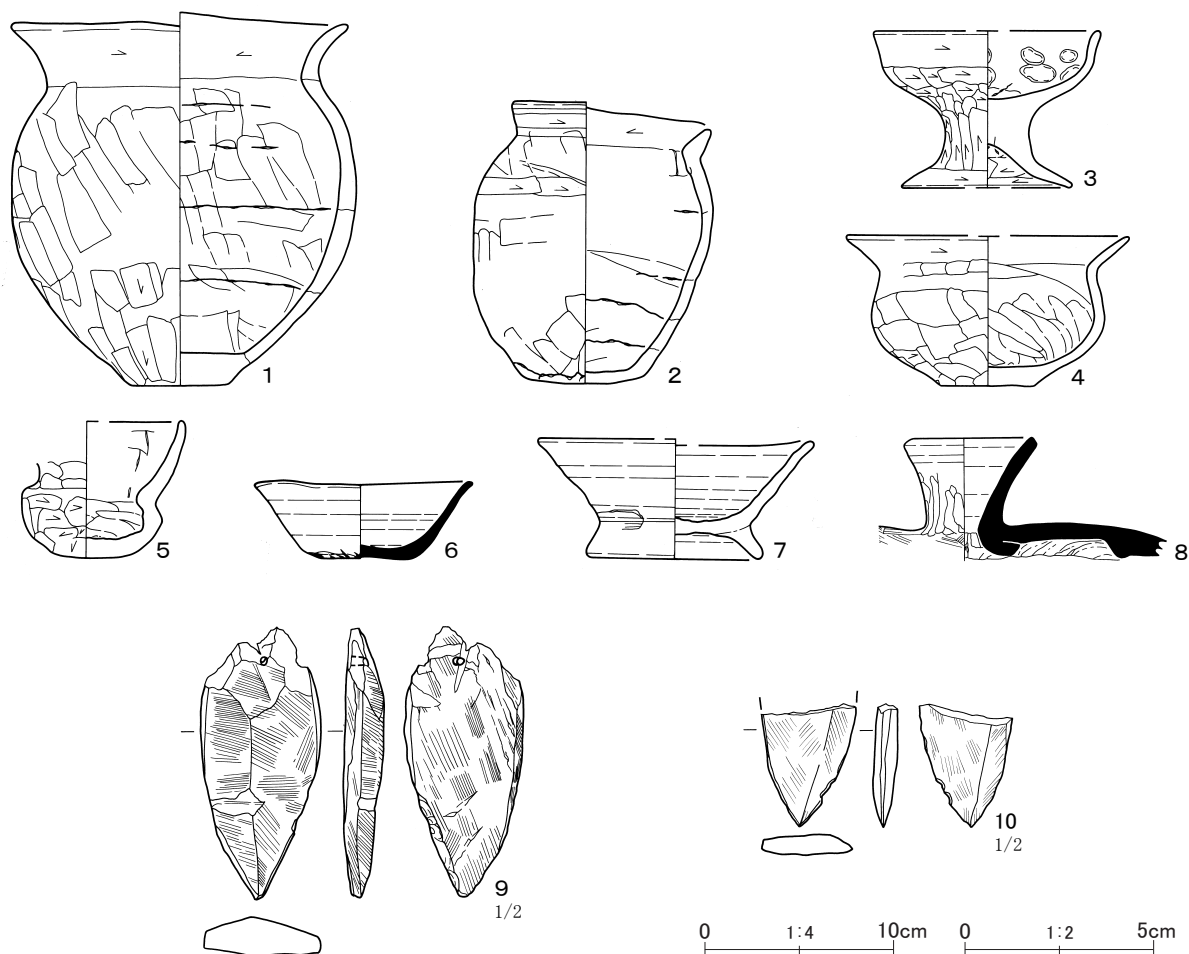
第4節 大溝跡

大溝跡（第30・31図、写真図版8）

B地点で確認された大溝跡に繋がると考えられる大溝跡である。本遺構は、調査区北部の東壁から調査区南西隅部の方向へ延びており、調査区内を縦断している。第221・222・230～233・236号住居跡、D－1号溝跡と重複しており、本遺構はD－1号溝跡より古く、竪穴住居跡よりも新しい。西側へ緩く弧を描く様に南下するものが主体で、調査区南部のB 8グリッド付近でS字になるように西方へ延びる溝と分岐している。上端幅は3.78～6.30m、底部幅は0.60～2.85mである。西方へ分岐する溝跡は上端幅約3.50～3.75m、底部幅は0.65～0.95mである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、調査区東壁の



第 30 図 大溝跡



第 31 図 大溝跡出土遺物

大溝跡出土遺物観察表

法 量 (cm)											
番号	種別・器種	出土位置	(): 推定値 []: 遺存値			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況	
			口径	底径	器高						
1	土師器 甕	覆土	(17.8)	5.1	19.7	やや粗	良好	褐色	外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ・ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 底部ナデ	口縁～胴部 1/2 底部完存	
2	土師器 甕	覆土	10.4	2.4	14.9	やや粗	良	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ・ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部指頭圧痕 胴部ヘラナデ 底部ナデ	口縁～胴上部 2/3 胴下～底部完存	
3	土師器 高坏	覆土	(11.8)	8.9	8.2	やや粗	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 坏～脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ 内面：坏部ヨコナデ・指頭圧痕 脚部ヘラナデ 裾部ヨコナデ	坏部 1/4 脚部完 存 裾部 1/6	
4	土師器 鉢	覆土	(14.9)	5.0	7.9	緻密	良好	明赤褐色 黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ・ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ後ヘラケズリ	口縁部 1/4 体上部 1/2 体下～底部完存	
5	土師器 埴	覆土	(10.4)	—	7.2	やや粗	良	灰黄褐色	体内部に鉄分附着 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ナデ・ヘラナデ 体 下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ後ヘラナデ 体～底部ナデ	口縁部 1/3 体～底部完存	
6	須恵器 坏	覆土	11.5	4.8	4.0	緻密	良	褐灰色	外面：ロクロナデ 底部回転糸切り後外縁部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	坏部 2/3 底部完存	
7	須恵器 高台付坏	覆土	(14.4)	8.9	6.2	やや粗	酸化焰 焼成	にぶい 黄橙色	外面：坏部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後高台部貼付・ロクロナデ 内面：坏部ロクロナデ 底部棒状工具による回転ナデ	坏部 1/4 底～高台部完存	
8	須恵器 平瓶	覆土	(7.4)	—	[6.3]	緻密	良好	灰黄褐色	体部成形後内盤を貼付て閉塞し、別に開口部を設け別作りの口縁部を接合 外面：口縁～頸部ロクロナデ 体部接合後ヘラケズリ 体部ロクロナデ 内面：口縁～頸部ロクロナデ 体部内盤貼付の加圧変形シワ	口縁部 1/5 頸部完存 体上部 1/3	
番号	種別	出土位置	法 量 (): 推定値 []: 遺存値				石質	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
9	石製 模造品	覆土	[7.2]	3.2	1.0	[24.6]	チャート ?	灰色	剣形。表面はY字状に稜線があり、側面は両側とも面を持つ。断面は五角 形状。各面とも明瞭な擦痕を残す。上部に径0.1cmの穿孔を施す。	ほぼ完存	
10	石製 模造品	覆土	[3.3]	[2.4]	0.5	[5.3]	チャート ?	浅黄橙色	剣形。表面は右側に、裏面は左側に外形と平行して稜線があり、左側面に 面を持つ。断面は平行四辺形状を呈する。	下部 1/2	

A-A' 部で 67.26 m、そこからやや南西の B-B' 部で 66.98 m となっており、おそらく南に向かって傾斜しているものと思われる。遺構内堆積土は A-A' で 11 層、B-B' で 10 層に分けられているが、詳細は不明である。本遺構からは多量の土器片と石製品が出土しており、そのうち甕 2 点、高坏 1 点、鉢 1 点、埴 1 点、須恵器坏 1 点、高台付坏 1 点、平瓶 1 点、石製模造品 2 点を図示した。

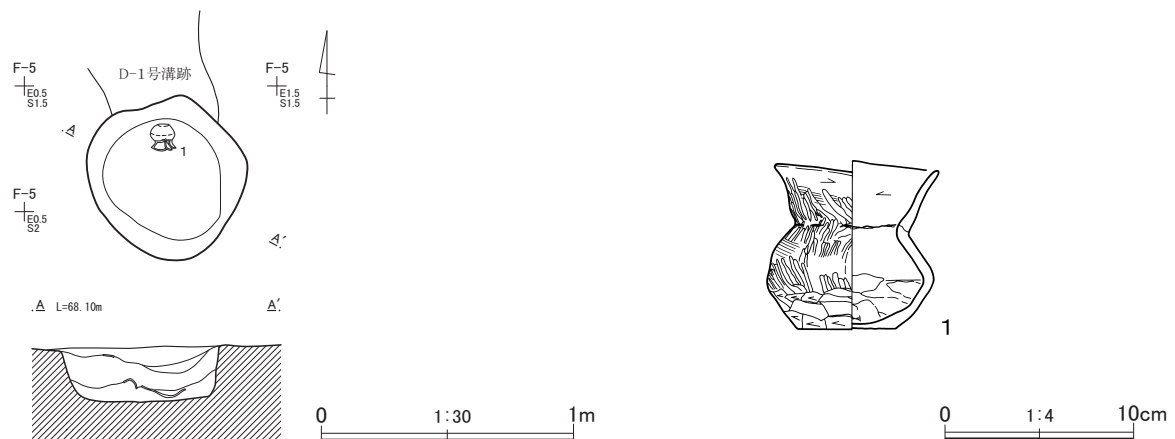
本遺構は、B 地点で確認された大溝跡と繋がると考えられる大溝跡である。本調査区で古墳時代中期と後期の竪穴住居跡を壊していることから古墳時代後期以降と考えられ、B 地点の調査では平安時代の竪穴住居跡よりも古いと判断されていることから、本遺構の所属時期は、奈良時代に属するものと考えられる。

第 5 節 土坑

第 49 号土坑（第 32 図、写真図版 8）

本遺構は、調査区北部東側の F 5 グリッドに位置する。D-1 号溝跡と重複している。平面形態は径 64cm の不正円形を呈し、検出面から底面までの深さは 21cm である。壁面はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、断面は上辺がわずかに長い台形状を呈する。遺構内堆積土は 4 層に分けられ、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。本遺構からは、土器片が多数出土しており、そのうち小型壺 1 点を図示した。

本遺構は、D-1 号溝跡が中心を通っていることから、D-1 号溝跡と同時期に機能していた一連の遺構の可能性が考えられる。所属時期は、底面付近から出土した遺物がないため不明であるが、D-1 号溝跡と一連の遺構となるならば平安時代以降と思われる。



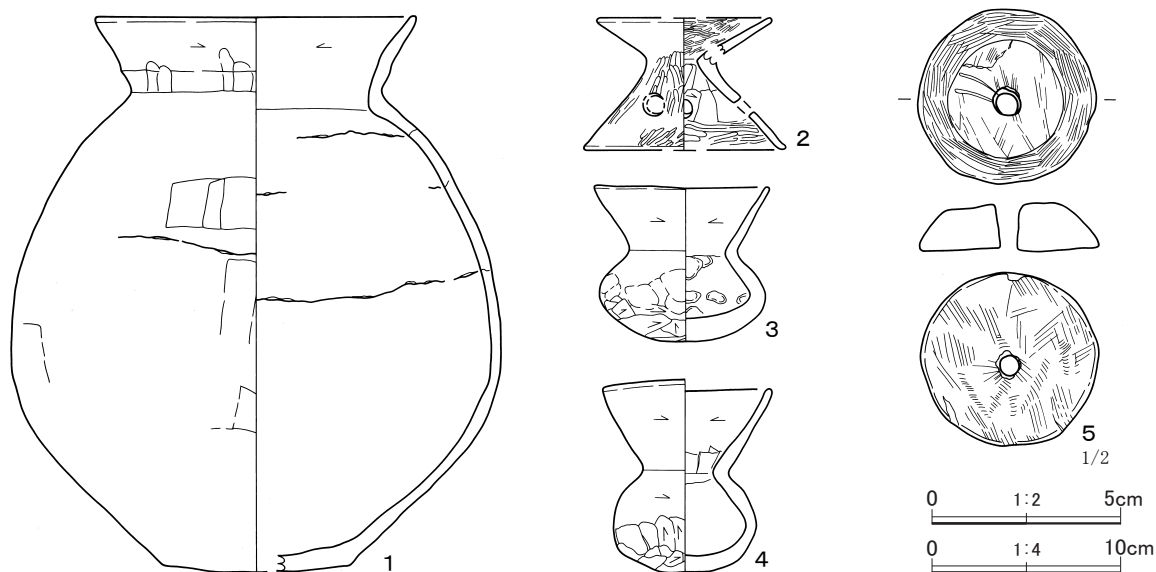
第 32 図 第 49 号土坑、第 49 号土坑出土遺物

第 49 号土坑出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			0: 推定値	□: 遺存値						
1	土師器 埴	覆土	口径 8.6	底径 5.1	器高 9.0	緻密	良好	明褐色	外面：口縁部ヨコナデ 頸～体中部ヘラナデ後ヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラナデ 体～底部ナデ	ほぼ完存

第 6 節 遺構外出土遺物

本調査区では、遺構外からも多量の土器片、石製品が出土しており、そのうち甕 1 点、器台 1 点、小型丸底土器 2 点、石製紡錘車 1 点を図示した。（第 33 図、写真図版 8）



第 33 図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

番号	種別・器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			○: 推定値 □: 遺存値	口径	底径	器高				
1	土師器 甕	D 4 グリッド	16.9	4.0	29.4	やや粗	良	橙色 黒斑	外面: 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	1/2
2	土師器 器台	D 5 グリッド	(9.1)	10.3	7.0	やや粗	良好	橙色	脚部 3 箇所に径約 1 cm 透穴穿孔 外面: 器受部磨減激しく調整不明 脚部ナデ後ヘラミガキ 内面: 器受部ヘラミガキ 脚部ヘラナデ 脚端部ヘラミガキ	器受部 1/4 接合部完存 脚部 1/2
3	土師器 埴	D 4 グリッド	9.0	1.8	8.1	緻密	良	橙色	外面: 口縁部ヨコナデ 体上部ナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
4	土師器 埴	表探	8.9	1.8	10.1	緻密	不良	橙色	外面: 口縁～体中部ヨコナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 体部頸部口が狭く観察不能	完存
番号	種別	出土位置	法 量 () : 推定値 [] : 遺存値				石質	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)				
5	石製 紡錘車	E 3 グリッド	4.6	4.8	1.3	37.3	流紋岩?	緑灰色	断面は扁平な台形を呈し、表面から径 0.7cm の穿孔を施す。表面頂部に 2 条の線刻を有し、斜面部には横方向の擦痕が残る。	完存

第 4 章 まとめ

今回発掘調査を行った D 地点は、後張遺跡の発掘調査地点では一番西側に位置し、竪穴住居跡が 21 軒、大溝跡が 1 条、溝跡 3 条、土坑 1 基が検出された。

竪穴住居跡は、時期別に見ると古墳時代中期が 12 軒、古墳時代後期が 4 軒、平安時代が 1 軒、時期不明が 4 軒となる。古墳時代中期の竪穴住居跡は、本調査区内においても全域に分布する状況が確認された。本調査区が後張遺跡の発掘調査地点の西端部にあたることから、A 地点から続く古墳時代中期の集落範囲は本調査区よりもさらに南西側へ広がるものと思われる。古墳時代後期の竪穴住居跡は、調査区北東部に 3 軒、中央部に 1 軒分布する状況が確認された。古墳時代中期と比べて遺構数が少なく、分布状況は北東側に寄っている。このことから、古墳時代後期の 1 つの小集落の南西端部に当るのではないかと考えられる。平安時代の竪穴住居跡は調査区北部で 1 軒確認された。他の調査区でも A 地点で 2 軒、B 地点で 1 軒が確認されたのみである。後張遺跡では平安時代には集落が形成されなかったと考えられる。

大溝跡は、B 地点で確認された大溝跡と繋がると考えられるものである。本調査区を北東―南西方向に縦断し、調査区南部で南方向と西方向に分岐する。B 地点で平安時代の竪穴住居跡よりも古いことが確認され、本調査区では古墳時代後期の竪穴住居跡よりも新しいことが確認されたことから、大溝跡は奈良時代に属するものと考えられる。後張遺跡で本調査区および他の調査区でも奈良時代の竪穴住居跡が確認されていないことは、

奈良時代においては、後張遺跡周辺地域は水路開削を行い集落を別の地域に形成していたのではないかと考えられる。

溝跡は、調査区北部で2条、調査区東部で1条確認された。北部で検出された溝跡は平安時代以降のものと考えられるものであるが、一部のみが検出されているものであるため性格は不明である。東部で確認された溝跡は古墳時代後期～平安時代の間に収まるものと考えられる。先の溝跡と同様、一部のみを検出であるため性格は判断できないが、北側が西に位置する大溝跡とほぼ並行していることから、関連がある遺構の可能性はある。

土坑は調査区東部で確認され、調査区北部で確認された溝跡の南端部に位置する。時期は定かではないが、溝跡と一連の遺構であるならば、平安時代以降のものになると考えられる。

今回の発掘調査で明らかになった点は、古墳時代中期の集落がさらに南西方向に続いていくこと、古墳時代後期の集落の南西端が確認された可能性があること、奈良時代の大溝跡が確認されたことが挙げられる。周辺遺跡の調査成果との検討を重ねることによって、古墳時代から奈良・平安時代にかけての女堀川低地域の集落の様相が明らかになっていくものと思われる。

引用・参考文献

恋河内昭彦（2005）『後張遺跡Ⅲ－C地点の調査－』 児玉町遺跡調査会報告書 第20集

恋河内昭彦（1993）『川越田遺跡Ⅱ（B・C地点の調査）』 児玉町遺跡調査会報告書 第5集

児玉町（1993）『児玉町史』自然編

本庄市（1986）『本庄市史』通史編Ⅰ

増田逸朗・立石盛詞他（1982）『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集

増田逸朗・立石盛詞他（1983）『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

松本完・大熊季広（2009）『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡

－本庄早稻田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2－』

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第13集

写真図版 1

第 218 号住居跡



第 218 号住居跡



第 219 号住居跡



第 220 号住居跡

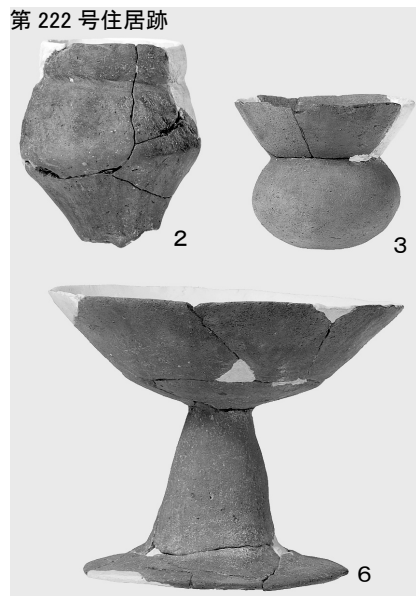


写真図版 3

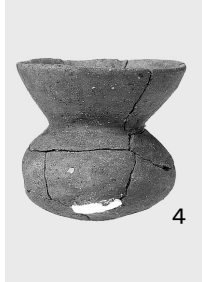
第 221 号住居跡



第 222 号住居跡



第 224 号住居跡



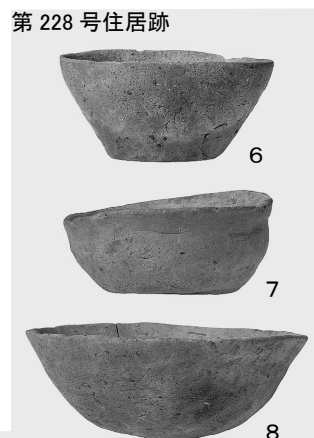
第 225 号住居跡



第 226 号住居跡



第 228 号住居跡



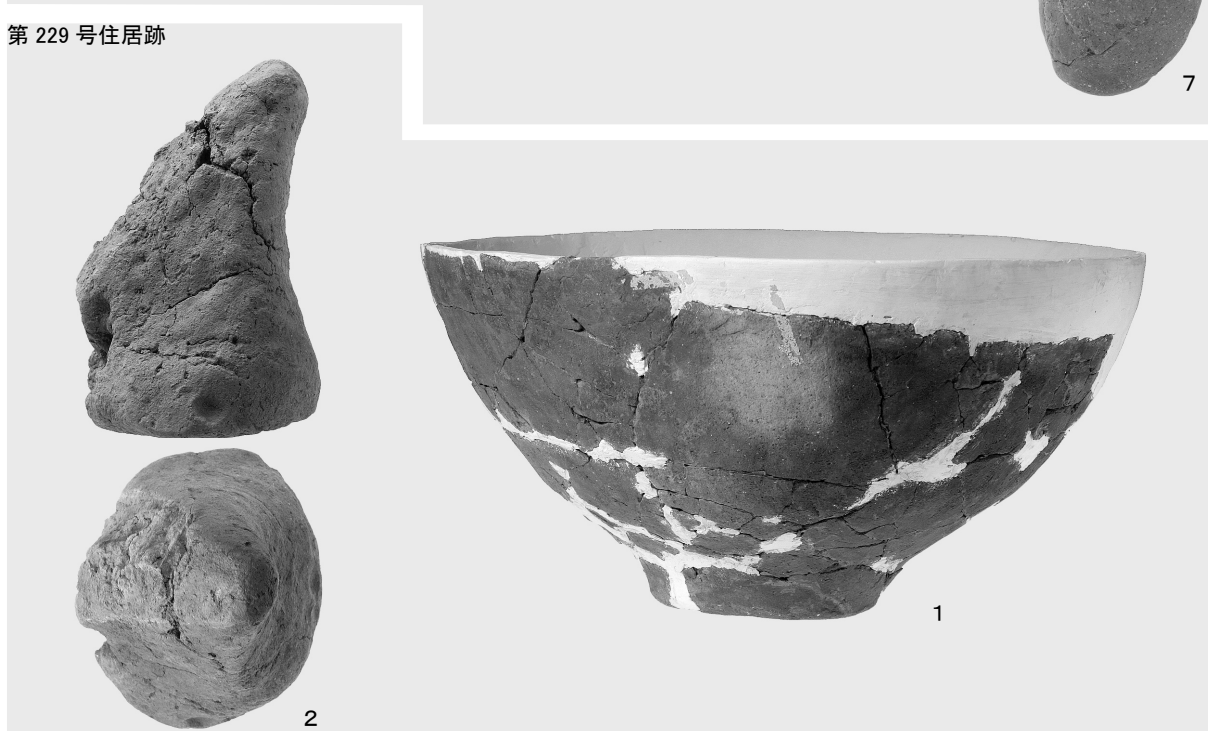
第 228 号住居跡



第 227 号住居跡



第 229 号住居跡

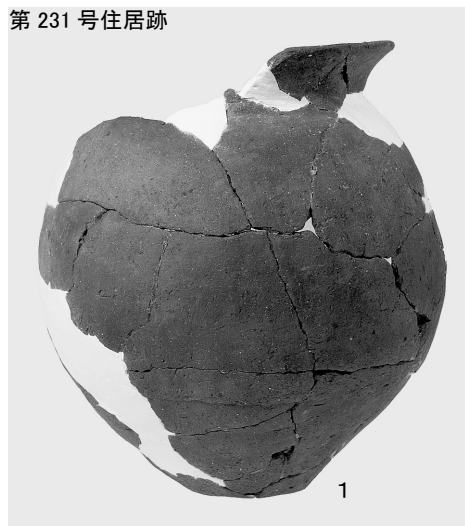


写真図版 5

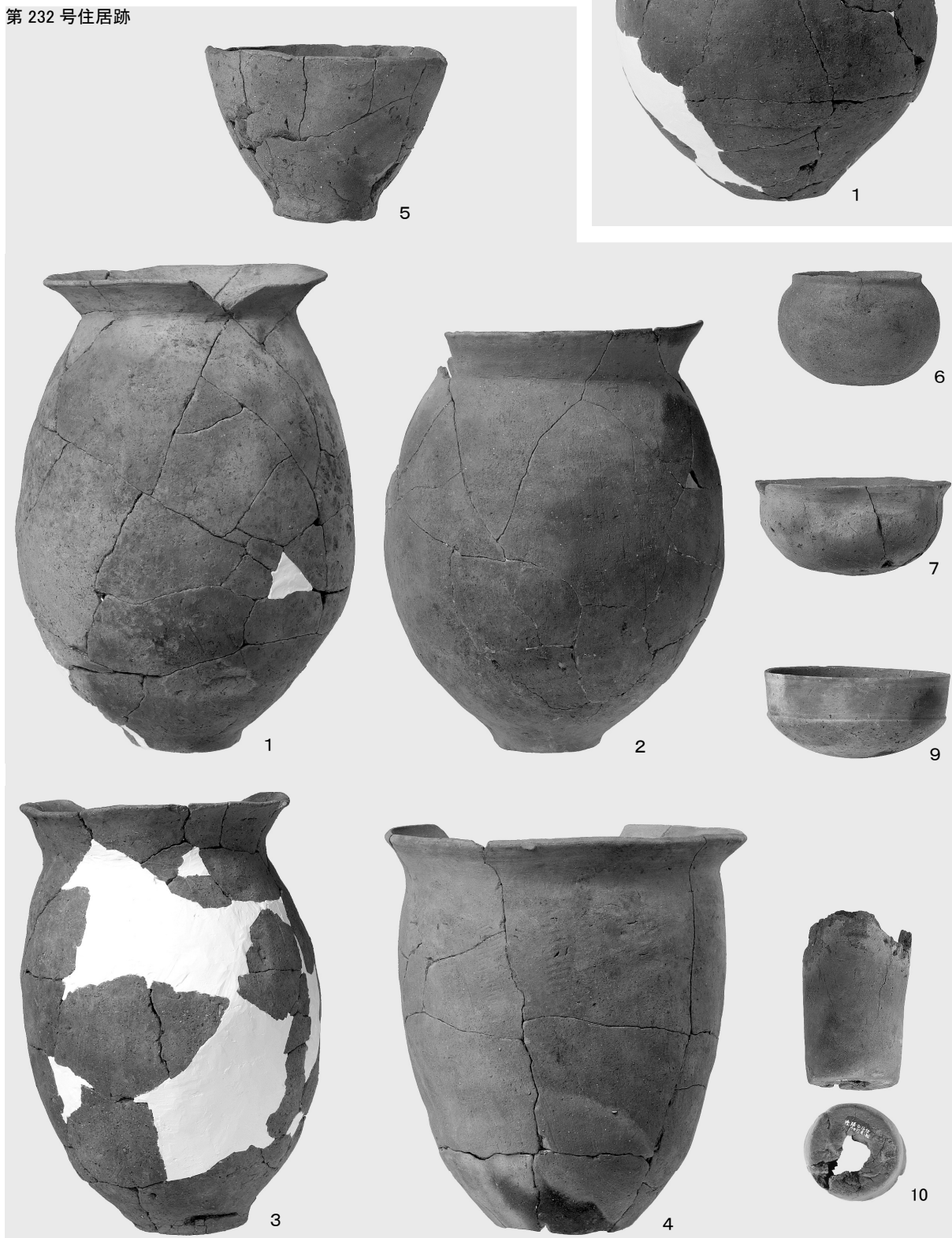
第 230 号住居跡



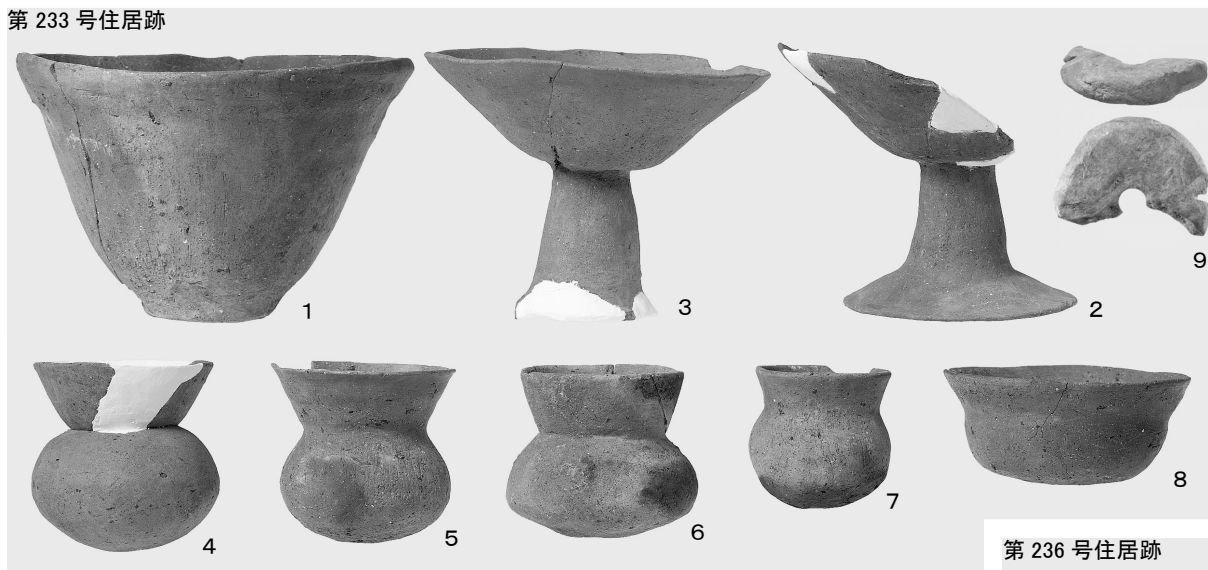
第 231 号住居跡



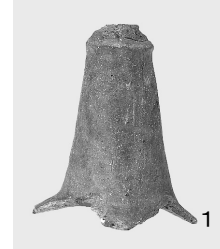
第 232 号住居跡



第 233 号住居跡



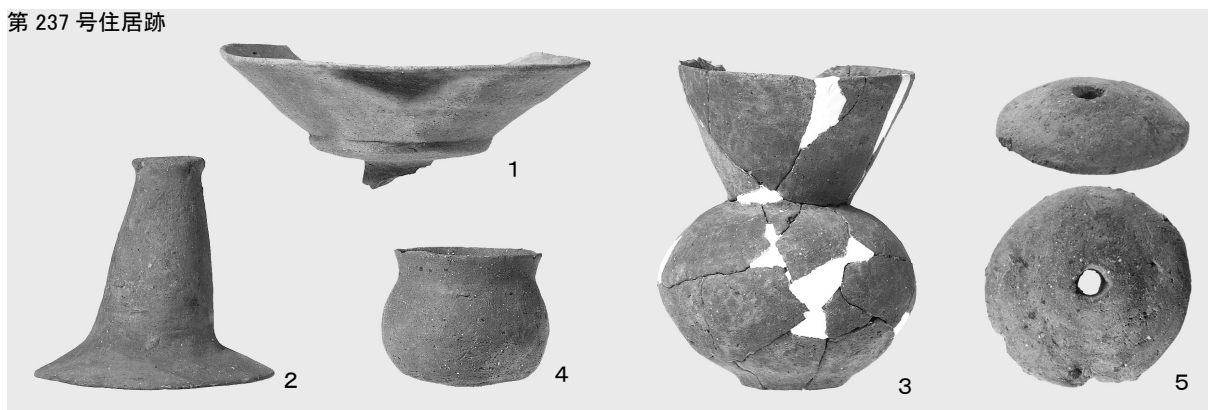
第 236 号住居跡



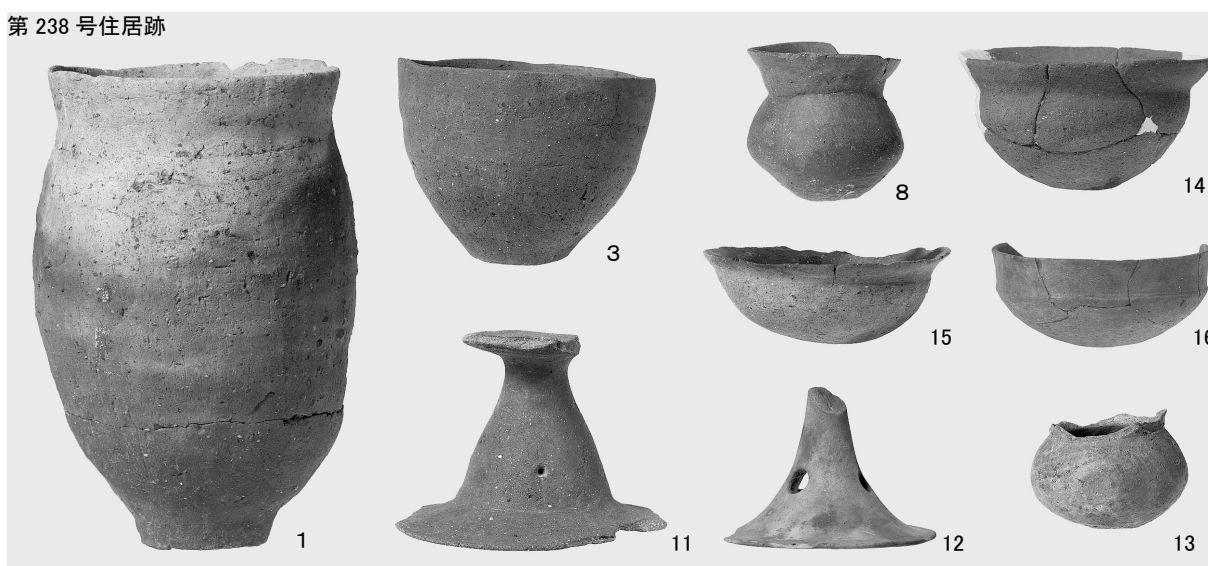
第 234 号住居跡



第 237 号住居跡

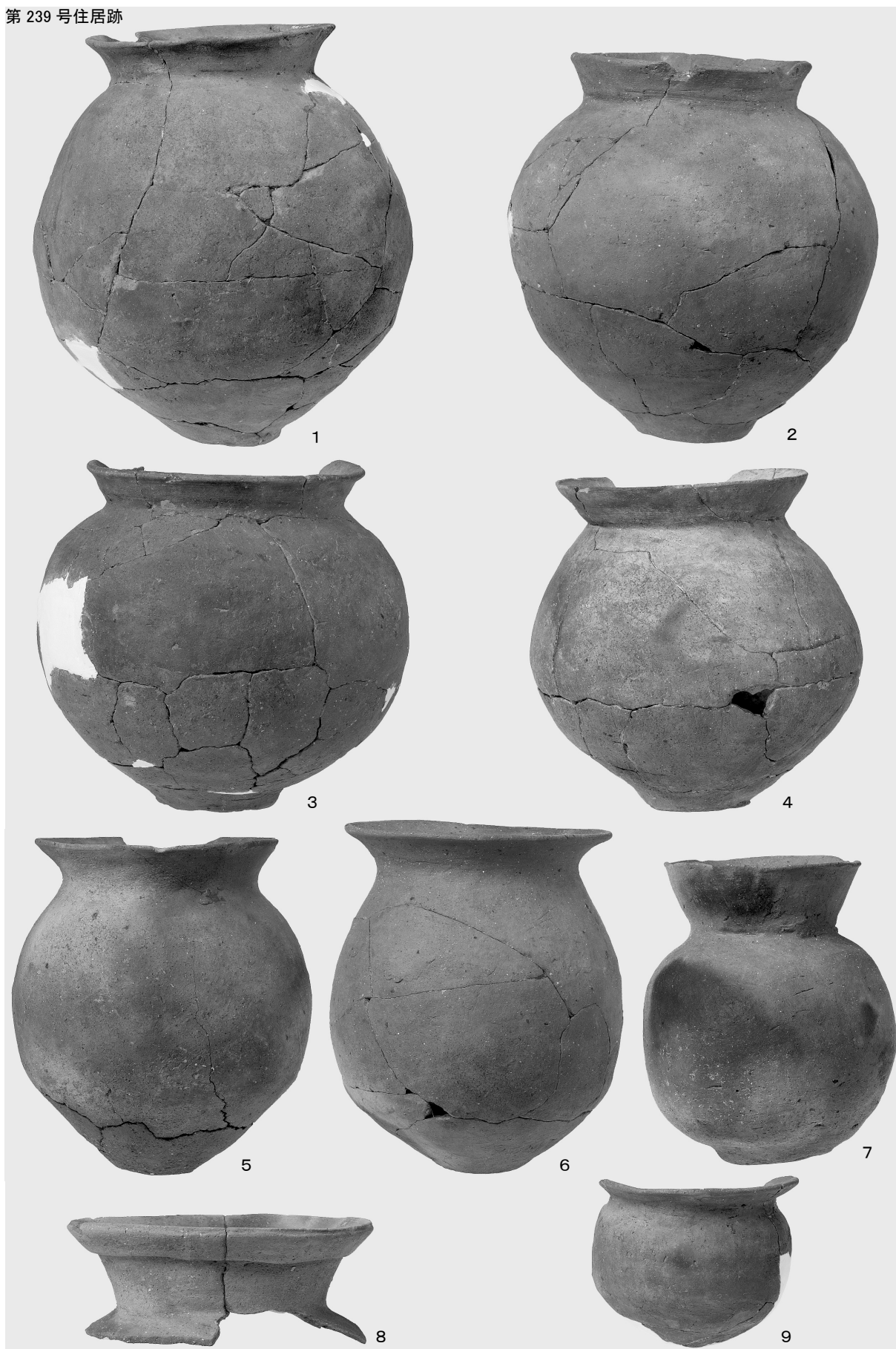


第 238 号住居跡



写真図版 7

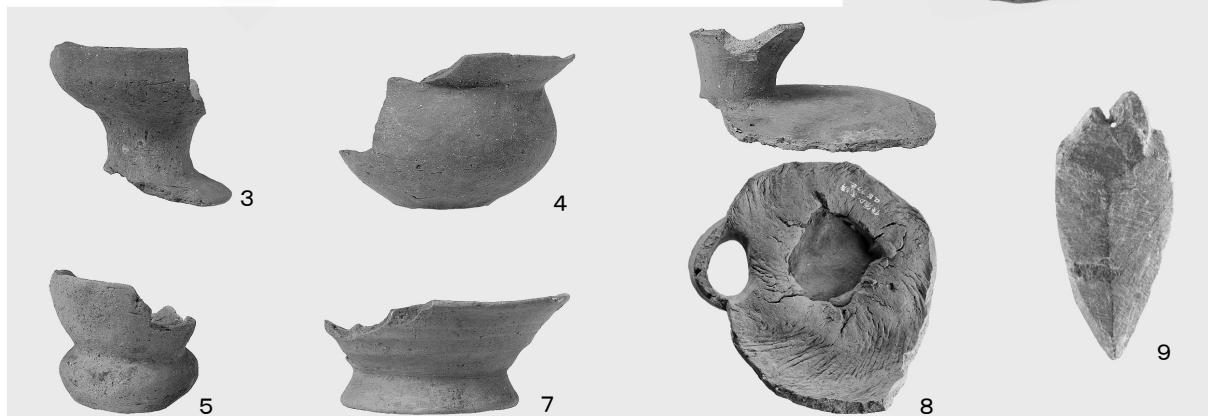
第 239 号住居跡



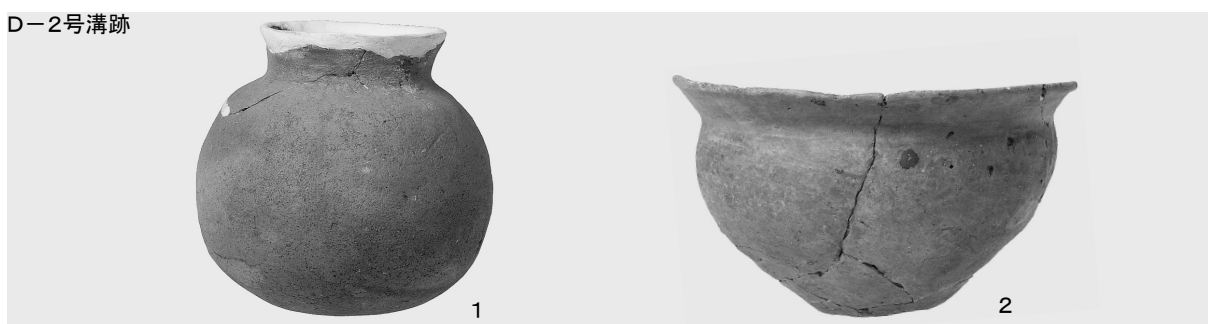
第 239 号住居跡



大溝跡



D-2号溝跡



第 49 号土坑



遺構外



報告書抄録

フリガナ	ゴバリイセキⅣ							
書名	後張遺跡Ⅳ							
副書名	D地点の調査							
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書					巻次	第35集	
編著者	高林真人							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495－25－1185							
発行日	西暦2010年（平成22年）9月30日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
ゴバリイセキ 後張遺跡 (D地点)	ホンジョウシコダマチヨウ 本庄市 児玉町 タカゼキゾウドウホカ 高関地藏堂他	112119	54－275	36° 13' 10"	139° 9' 46"	1989.11.22 ～1990.3.31	1,000 m ²	ホテル 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
後張遺跡 (D地点)	集落	古墳時代	竪穴住居跡 16		土師器・石製品・土製品			
	集落	奈良・平安時代	竪穴住居跡 1 大溝跡 1 溝跡		土師器・須恵器・羽釜・ 片口鉢・瓦・石製品			
	集落	不明	竪穴住居跡 3 土坑 1		土師器			

本庄市遺跡調査会報告書第35集

後 張 遺 跡 IV

－D地点の調査－

平成22年 9 月30日 印刷

平成22年 9 月30日 発行

発行／本 庄 市 遺 跡 調 査 会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／上毎印刷工業株式会社